

東北大学生の生活と意識 に関する調査

2022 年度前期・行動科学基礎実習報告書

目次

はじめに

(小川和孝) 1

「課外活動が生活満足度に与える影響——

部活動とアルバイトにおける義務感と主体性に着目して」

(大橋麗・吉川萌子・小泉蓮) 2

「東北大生のオンライン授業と意識——

オンライン授業の割合による意識の差に着目して」

(大村朋・松浦敦士) 11

「東北大学生の就職開始時期に関する社会調査——

個人の持つ「多様性」が与える影響」

(菊地庸太・高橋冬馬・古谷涼風・鍾婧雯・劉崢) 22

「東北大生の容姿への関心についての調査——自己評価との関連から」

(赤城みう・松浦和貴・村上愛理) 33

「東北大生の社会意識——

結婚意欲・友人関係の自己効力感・自己責任論の選好に着目して」

(森坂太一・門間晴風・汪寧) 43

調査票 75

基礎集計表 85

はじめに

小川和孝

本報告書は、2022 年度前期に東北大学文学部において開講された「行動科学基礎実習」の受講者による論文をまとめたものである。この授業では社会調査の企画、設計、実査、分析、報告までの一連のプロセスを学生が経験することで、社会調査を実施する知識・技能を習得することを目的としている。

今年度の調査では、東北大学の文学部、経済学部、工学部、農学部の 4 学部において開講された授業を対象に、授業担当の先生を通じて履修している学生への調査協力を依頼した。

今年度は引き続き新型コロナウイルスの世界的な流行により、多くのこの授業は全面的に、あるいは部分的にオンラインによって実施されることになった。そうした状況を踏まえて Google フォームを利用したウェブ調査という形で行った。多くの授業では Google Classroom によって授業の運営管理が行われており、そちらを通じて履修学生へ調査フォームの URL を転送していただくという形で依頼した。

調査項目は学生の立てたりサーチ・クエスチョンを反映したものになっている。詳しくは巻末の調査票を参照されたい。有効回答数は 157 件であった。こちらでも詳しくは巻末の基礎集計表を参照いただきたいが、回答者の属性では男性が約 64%、女性が約 32%であった。また学年では 3 年生が過半数を占めている。

受講者には関心の近さによって、合計 5 つの班にわかれて報告書を執筆してもらった。それらは、課外活動と生活満足度、オンライン授業の受講割合による意識の差、就職開始時期、用紙への関心、社会意識といったものである。いずれもユニークな視点が入り入れられた分析になっている。

調査に協力をいただいた学生の皆様と、対象授業の担当の先生方には心から御礼を申し上げます。言うまでもなく、社会調査は調査対象やその関係者の善意による協力がなければ成り立たないものである。また、文学研究科博士課程の李撃月さんにはティーチング・アシスタントとして、授業準備や学生の分析に関するアドバイスなどを担当していただいた。授業運営を大いにサポートしていただいたことに、記して感謝申し上げます。

課外活動が生活満足度に与える影響

——部活動とアルバイトにおける義務感と主体性に着目して——

大橋麗・吉川萌子・小泉蓮

1. 研究関心とリサーチクエスチョン

多くの大学生は、学業だけでなく課外活動をすることで、大学生活をより充実したものにしようとしている。大学生が行う主な課外活動として、アルバイトや部活動・サークルが挙げられる。マイナビによる「大学生のアルバイト実態調査」(2021)では、アルバイトをしている大学生が62.9%、「就業経験はあるが現在は非就業」と答えた人と合わせると、88.3%がアルバイトを経験しているということになる。収入を貯金や趣味、交遊費に充てるなど、アルバイトは生活を豊かにすることにつながる。また、収入以外のメリットとして、違う大学に通う人との交流が持てる、社会勉強ができるといったものが挙げられる。しかし、一方で、山本ら(2018)は、アルバイトには生活リズムの乱れや精神的な疲労などのデメリットが存在することを指摘している。

部活動やサークルに関しても、加入することで交友関係が広がったり、就職活動に有利になったりなどのメリットがあるが、自分の時間が減る、部費や交友費などお金がかかるなどのデメリットも存在する。

このように、本来、課外活動は生活をより充実したものにしてくれるものであるにもかかわらず、課外活動によって生活に支障をきたしてしまう場合も存在する。

本分析では、活動時間に着目し、課外活動が大学生の生活満足度に与える影響を明らかにすることを目的としている。その上で、大学生の生活を豊かにするための課外活動のあり方について検討していきたい。

2. 先行研究と仮説

2.1 先行研究

これまで、「部活動(アルバイト)に所属しているか否か」という点に着目している論文は多数存在するものの、「課外活動にかける時間」と生活満足度との関係を分析した論文はほぼ報告されていない。しかし、東北大学には多種多様な部・サークルが存在しており、その特性もさまざまである。例えば、同じ競技でも複数サークルが存在し、「ゆるさ」がサークルによって全く違うという例が存在する。それらを「部活」と一括りにして捉えることには問題があると考えられる。加えて、アルバイトにおいても、働き方は多様であり、アルバイトにかける時間も個人差が大きいだろう。

また、過剰な長時間労働を強いられることを意味する「ブラック部活(バイト)」という言葉が存在するように、時間は課外活動の満足度に大きな影響を及ぼすと考えられる。そこで、私たちは「課外活動にかける時間」に着目して分析を行った。

2.2 仮説

- ・仮説①「部活動・アルバイトの時間が長いほど生活満足度が高くなる」

部活動やアルバイトを通して、体力、精神力、そしてタイムマネジメント能力など日常生活において重要なスキルを身につけることが可能で、それにより学習満足度や趣味満足度が高くなると考えられる。そして、部活動やアルバイトを通して交友関係を広げることができ、人間関係満足度が高くなることも考えられる。そのため、生活において部活動やアルバイトの比重が大きくなるほど全体として生活満足度が高くなるという仮説を立てた。

しかし、課外活動を義務感に追われて行っている場合、活動時間が長くなることで逆に生活満足度が低下してしまう傾向にあると考えられる。そのため、義務感を考慮した統制変数を入れて分析を行う。

・仮説②「リーダー経験がある人の方が、部活動・アルバイトの時間が長いほど生活満足度は高くなる」

部活動やアルバイトに対する意欲が高いほど、上記のメリットをより享受することができ、意欲は主体性に大きく左右されると考える。実際、横山(2012)は、「部活内で活動目標を立てている部活は部員の部活へのモチベーションが高い」ことを指摘しており、主体性が部活動の充実度に大きく影響しているといえる。

「リーダー経験がある人」は主体性が高いと考え、この仮説を立てた。また、立候補してリーダーになった場合と他薦でリーダーになった場合では主体性に差があり、時間と生活満足度との関係にも差が生じると予想する。

3. 使用変数の説明と度数

・所属の有無

Q16「あなたは部活動・サークルに所属していますか。」という質問において、学部4年生や大学院生にも回答してもらうために「すでに引退されている方は所属していたものをお答えください。」という文章を付け加えて、「部活動に所属している」「サークルに所属している」「部活動・サークルの両方に所属している」「どちらにも所属していない」の4カテゴリで調査した。「どちらにも所属していない」を選択した人はQ17～21の質問をスキップするよう設計されている。回答としては「サークルに所属している」が最も多い結果となった。

表 3.1 所属の有無

	度数	%
学友会	39	24.8
サークル	61	38.9
両方	12	7.6
無所属	45	28.7
合計	157	100.0

・部活動・サークルにかけている時間

Q17「あなたは部活動・サークルに週どのくらいの時間を費やしていますか。」という質問に対し、「0～5時間未満」「5～10時間未満」「10～15時間未満」「15～20時間未満」「20～25時間未満」「25～30時間未満」「30時間以上」「その他」の8カテゴリで調査した。「15～20時間未満」が4人、「20～25時間未満」が8人、「25～30時間未満」が0人、「30時間以上」が1人だったため、サンプルではその4カテゴリを統合して「15時間以上」とし、非該当・無回答を削除した。回答としては「0～5時間未満」が最も多い結果になった。

表 3.2 部活動・サークルにかけている時間

	度数	%
0～5時間未満	61	55.0
5～10時間未満	24	21.6
10～15時間未満	12	10.8
15時間以上	14	12.6
合計	111	100.0

・生活満足度

Q36 の満足度調査の中の学業・趣味・人間関係の3つを選択し、それぞれについて満足

しているかどうかを「満足している」「やや満足している」「どちらともいえない」「やや満足していない」「満足していない」の5カテゴリーで調査した。サンプルにおいてはそれぞれの回答で「無回答」を除外した回答を用いた。回答は、学業においては「やや満足している」が多く、趣味・人間関係は「やや満足している」「どちらともいえない」がほぼ同数であった。

表 3.3 満足度

	学業満足度		趣味満足度		人間関係満足度	
	度数	%	度数	%	度数	%
満足している	39	24.8	47	30.1	35	22.3
やや満足して	71	45.2	50	32.1	47	29.9
どちらともいえない	21	13.4	32	20.5	48	30.6
やや満足していない	18	11.5	19	12.2	19	12.1
満足していない	8	5.1	8	5.1	8	5.1
合計	157	100.0	156	100.0	157	100.0

・アルバイトの有無・かけている時間

本調査では「アルバイトをしているか」について直接的な質問を設置しなかったが、Q22「あなたはアルバイトに週どのくらいの時間を費やしていますか。」の回答の中に「アルバイトをしていない」という選択肢が存在し、それを選択した人はQ23～26をスキップするよう設計されている。そのため、「アルバイトをしていない」「0～5時間」「5～10時間」「10～15時間」「15～20時間」「20時間以上」の6カテゴリーで調査した。また、「15～20時間未満」が7人、「20時間以上」が0人だったため、サンプルではこの2カテゴリーを統合して「15時間以上」という新たなカテゴリーを作った。回答としては「アルバイトをしていない」が最も多く、アルバイトをしているの中では「5～10時間未満」が最も多い結果になった。

表 3.4 アルバイトにかけている時間

	度数	%	
している	0～5時間未満	21	13.4
	5～10時間未満	29	18.5
	10～15時間未満	24	15.3
	15時間以上	7	4.5
していない	76	48.4	
合計	157	100.0	

・部活動・サークルに追われているか、義務感

Q18「あなたは部活動・サークルに時間的に追われていると思うことがありますか。」、Q19「あなたは義務感によって部活動・サークルをしていると思うことがありますか。」という両質問において、それぞれ「あてはまる」「少しあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5カテゴリーで調査し、サンプルでは非該当・無回答を削除した。回答はともに「あてはまらない」が最も多い結果になった。

表 3.5 追われているか・義務感

	追われているか		義務感	
	度数	%	度数	%
あてはまる	12	10.8	6	5.4
少しあてはまる	24	21.6	18	16.2
どちらともいえない	9	8.1	12	10.8
あまりあてはまらない	16	14.4	21	18.9
あてはまらない	50	45.0	54	48.6
合計	111	100.0	111	100.0

・部活動・サークルの活動時間の決定

Q20「あなたは部活動・サークルにおいて自由に活動時間を決めることができますか。」という質問において、「はい」「いいえ」「その他」の3カテゴリで調査した。回答は「はい」が最も多くなり、「その他」の回答として「自分の都合に合わせて休むことはできる」とあった。サンプルでは、「その他」の回答は自由に活動時間を決められる(「はい」)に含めることにし、非該当・無回答を削除した。

表 3.6 活動時間の決定

	度数	%
はい	83	74.8
いいえ	27	24.3
その他	1	0.9
合計	111	100.0

・部活動・サークルでのリーダー経験

Q21「あなたは部活動・サークルにおいてリーダー(部長など)になったことがありますか。」という質問において、「立候補してなったことがある」「立候補以外でなったことがある」「リーダーになったことがない」「その他」の4カテゴリで調査した。回答は「リーダーになったことがない」が最も多くなり、「その他」の回答として「大学生としてはないが、高校時代にはやっていた」とあった。本調査は大学生時代を対象としているため、サンプルではその他の回答は「リーダーになったことはない」に含めた。

表 3.7 リーダー経験

	度数	%
立候補してなった	11	9.9
立候補以外でなった	22	19.8
リーダーになったことはない	77	69.4
その他	1	0.9
合計	111	100.0

4. 分析結果

4.1 仮説1

仮説1「部活動・アルバイトの時間が長いほど生活満足度が高くなる」を検証するため、従属変数を学業、趣味、人間関係の満足度に設定し、それぞれについて部活動・アルバイ

トに費やす時間を独立変数とし分析した。

まず、部活動・アルバイトに費やす時間を独立変数、学業満足度、趣味満足度、人間関係満足度を従属変数とした順序ロジスティック回帰分析を行った。満足度は高い方が上のカテゴリーになるように設定しており、係数が正に有意であれば満足度が高くなるという解釈になる。結果として、アルバイトに費やす時間を独立変数としたロジスティック回帰分析では、いずれの満足度においても有意な結果を得ることはできなかったため、今回は部活動・サークルに費やす時間を独立変数とする分析結果のみを扱う。分析結果は次の表の通りである。

表 4.1 部活・サークルの時間と満足度のロジスティック回帰分析

	学業満足度			趣味満足度			人間関係満足度		
	Estimate	Pr(> z)		Estimate	Pr(> z)		Estimate	Pr(> z)	
0~5時間未満									
5~10時間未満	-1.161	0.014	*	0.359	0.418		0.192	0.666	
10~15時間未満	-0.979	0.083	.	-0.130	0.813		0.731	0.191	
15時間以上	-1.246	0.020	*	0.267	0.618		-0.103	0.842	
閾値1	-3.225	2.026E-13	***	-2.769	5.157E-10	***	-2.967	6.483E-10	***
閾値2	-2.019	5.818E-10	***	-1.480	5.555E-07	***	-1.550	1.590E-07	***
閾値3	-1.302	5.441E-06	***	-0.508	0.045	*	-0.055	0.822	
閾値4	-0.867	0.001	**	0.780	0.003	**	1.309	2.968E-06	**

Signif. codes: 0 '***' 0.001 '**' 0.01 '*' 0.05 '.' 0.1 ' ' 1

部活動・サークルに費やす時間を独立変数にした場合、部活動・サークルに費やす時間が「0~5時間未満」の場合に比べて、「5~10時間未満」と「15時間以上」の場合は1%水準で、「10~15時間未満」の場合は5%水準でそれぞれ有意に学業満足度が低いという結果が得られた。

次に、活動に対する義務感が強かったり、自由に活動時間を決められなかったりする場合、満足度が下がってしまう可能性を考慮し、統制変数として、部活動・サークルにおいて「自由に活動時間を決めることができるか」、「活動に追われていると感じるか」、「義務感によって活動していると感じるか」の変数を加えたモデルを作成した。この分析においてもアルバイトは有意な結果が出なかったため、部活動・サークルを独立変数にした分析のみを扱う。分析結果は次の表の通りである。

表 4.2.1 部活・サークルの時間と満足度のロジスティック回帰分析
(自由に活動時間を決められるかで統制)

	学業満足度			趣味満足度			人間関係満足度		
	Estimate	Pr(> z)		Estimate	Pr(> z)		Estimate	Pr(> z)	
0~5時間未満									
5~10時間未満	-0.972	0.042	*	0.584	0.207		0.283	0.530	
10~15時間未満	-0.806	0.152		0.06	0.913		0.818	0.143	
15時間以上	-0.920	0.100		0.753	0.198		0.113	0.841	
自由に決められる									
自由に決められない	-1.034	0.015	*	-0.919	0.034	*	-0.490	0.248	
閾値1	-3.450	4.115E-14	***	-2.940	1.301E-10	***	-3.044	3.710E-10	***
閾値2	-2.264	9.974E-11	***	-1.630	1.346E-07	***	-1.622	8.796E-08	***
閾値3	-1.505	7.709E-07	***	-0.634	0.016	*	-0.122	0.630	
閾値4	0.760	0.005	***	0.696	0.008	**	1.256	9.422E-06	***

Signif. codes: 0 '***' 0.001 '**' 0.01 '*' 0.05 '.' 0.1 ' ' 1

表 4.2.2 部活・サークルの時間と満足度のロジスティック回帰分析
(追われていると感じるかで統制)

	学業満足度			趣味満足度			人間関係満足度		
	Estimate	Pr(> z)		Estimate	Pr(> z)		Estimate	Pr(> z)	
0~5時間未満									
5~10時間未満	-1.027	0.055	.	0.325	0.524		-0.071	0.887	
10~15時間未満	-0.889	0.201		-0.251	0.714		0.309	0.649	
15時間以上	-1.224	0.094	.	0.216	0.775		-0.614	0.410	
追われていない									
あまり追われていない	-0.153	0.766		0.102	0.84		-0.085	0.865	
どちらともいえない	-0.696	0.311		-0.086	0.903		0.101	0.880	
少し追われている	-0.273	0.643		0.350	0.56		0.798	0.172	
追われている	-0.046	0.952		-0.199	0.802		0.315	0.679	
閾値1	-3.348	1.833.E-12	***	-2.746	4.547.E-09	***	-2.962	4.876E-09	***
閾値2	-2.137	1.007.E-08	***	-1.451	1.180E-05	***	-1.538	6.192E-06	***
閾値3	-1.414	3.047.E-05	***	-0.473	0.111		-0.027	0.930	
閾値4	0.770	0.014	*	0.822	0.006	**	1.360	3.855E-05	***

Signif. codes: 0 '***' 0.001 '**' 0.01 '*' 0.05 '.' 0.1 ' ' 1									

表 4.2.3 部活・サークルの時間と満足度のロジスティック回帰分析
(義務感によって活動していると感じるかで統制)

	学業満足度			趣味満足度			人間関係満足度		
	Estimate	Pr(> z)		Estimate	Pr(> z)		Estimate	Pr(> z)	
0~5時間未満									
5~10時間未満	-1.161	0.016	*	0.4	0.381		0.174	0.700	
10~15時間未満	-1.071	0.066	.	-0.384	0.493		0.689	0.230	
15時間以上	-0.871	0.115		0.746	0.185		0.062	0.907	
感じていない									
あまり感じていない	-0.259	0.582		-0.264	0.571		-0.646	0.168	
どちらともいえない	-0.018	0.976		0.934	0.159		0.192	0.750	
少し感じている	-0.536	0.286		-0.621	0.208		-1.030	0.030	*
感じている	-2.130	0.011	*	-2.492	0.004	**	-1.023	0.273	
閾値1	-3.562	5.858.E-13	***	-3.138	4.221.E-10	***	-3.373	1.336E-10	***
閾値2	-2.303	2.517.E-09	***	-1.74	7.963.E-07	***	-1.946	7.145E-08	***
閾値3	-1.544	8.262E-06	***	-0.678	0.026	*	-0.402	1.910E-01	
閾値4	0.704	0.024	*	0.706	0.020	*	1.038	0.001	**

Signif. codes: 0 '***' 0.001 '**' 0.01 '*' 0.05 '.' 0.1 ' ' 1									

統制変数として「自由に活動時間を決めることができるか」を加えた場合、部活動・サークルに費やす時間が「0~5時間未満」の場合に比べて、「5~10時間未満」の場合は1%水準で有意に学業満足度が低いという結果が出た。「活動に追われていると感じるか」を加えた場合、部活動・サークルに費やす時間が「0~5時間未満」の場合に比べて、「5~10時間未満」と「15時間以上」の場合は5%水準で有意に学業満足度が低いという結果が出た。

「義務感によって活動していると感じるか」を加えた場合、部活動・サークルに費やす時間が「0~5時間未満」の場合に比べて、「5~10時間未満」の場合は1%水準で、「10~15時間未満」の場合は5%水準で有意に学業満足度が低いという結果が出た。

また、「自由に活動時間を決めることができるか」という項目については、自由に活動時間を決められない人は、自由に活動時間を決められる人に比べて1%水準で有意に学業満足度が低い結果となり、「義務感によって部活動・サークルをしていると感じるか」という項目については、義務感を感じている人は、義務感を感じていない人に比べて1%水準で有意に学業満足度が低い結果となった。

さらに、部活(学友会)とサークルの性質の違いに着目し、統制変数として「所属(部活のみに所属・サークルのみに所属・両方に所属)」の変数を加えたモデル4を作成した。所属先の性質に注目したため、「所属なし」は除いている。

表 4.3 部活・サークルの時間と満足度のロジスティック回帰分析(所属で統制)

	学業満足度			趣味満足度		人間関係満足度			
	Estimate	Pr(> z)		Estimate	Pr(> z)	Estimate	Pr(> z)		
0~5時間未満									
5~10時間未満	-1.053	0.038	*	0.268	0.569	-0.158	0.740		
10~15時間未満	-0.783	0.225		-0.304	0.628	0.232	0.712		
15時間以上	-1.018	0.115		0.152	0.813	-0.524	0.391		
部活									
サークル	0.313	0.518		-0.144	0.761	-0.527	0.252		
両方	0.162	0.798		0.340	0.583	0.904	0.136		
閾値1	-2.963	5.911E-07	***	-2.870	1.641E-06	***	-3.411	5.952E-08	***
閾値2	-1.758	6.390E-04	***	-1.584	1.543E-03	**	-1.966	5.963E-05	***
閾値3	-1.044	0.032	*	-0.605	0.200		-0.417	0.347	
閾値4	1.129	0.020	*	0.687	0.142		0.990	0.032	*

Signif. codes: 0 '***' 0.001 '**' 0.01 '*' 0.05 '.' 0.1 ' ' 1

統制変数を加えた場合、部活動・サークルに費やす時間が「0~5 時間未満」の場合に比べて、「5~10 時間未満」の場合は5%水準で有意に学業満足度が低いという結果が出た。しかし、所属先の性質では有意差が得られなかった。

4.2 仮説2

仮説2「リーダー経験がある人の方が、部活動・アルバイトの時間が長いほど生活満足度は高くなる」という仮説を検証するため、統制変数として、「リーダー経験の有無」の変数を加えたモデル5を作成した。また、自主的にリーダーになった場合と、他人の推薦によってリーダーになった場合で活動に対するモチベーションに差が生まれてしまう可能性を考慮し、回答を「立候補してリーダーになったことがある・立候補以外の方法でリーダーになったことがある・リーダーになったことはない」に分けている。アルバイトにおいてはどの満足度においても有意な結果を得ることができなかつたため、部活動・サークルの結果のみを述べる。分析結果は次の表の通りである。

表 4.4 部活・サークルの時間と満足度のロジスティック回帰分析
(リーダー経験の有無で統制)

	学業満足度			趣味満足度		人間関係満足度		
	Estimate	Pr(> z)		Estimate	Pr(> z)	Estimate	Pr(> z)	
5~10時間未満	-1.361	0.004	**	0.365	0.411	0.188	0.670	
10~15時間未満	-0.811	0.198		-0.195	0.736	0.873	0.144	
15時間以上	-1.050	0.053	.	0.252	0.648	0.067	0.902	
なっていない								
立候補してなった	-1.007	0.107		0.248	0.716	-0.487	0.404	
立候補以外でなった	-1.486	0.001	**	-0.048	0.914	-0.546	0.254	
閾値1	-3.844	1.941E-14	***	-2.767	9.933E-10	***	-3.112	3.453E-10
閾値2	-2.564	2.089E-11	***	-1.479	1.369E-06	***	-1.678	9.158E-08
閾値3	-1.790	9.415E-08	***	-0.507	0.057	.	-0.159	0.540
閾値4	0.566	0.044	*	0.784	0.004	**	1.213	2.675E-05

Signif. codes: 0 '***' 0.001 '**' 0.01 '*' 0.05 '.' 0

部活動・サークルにおいては、統制変数を加えた場合、部活動・サークルに費やす時間が「0~5時間未満」の場合に比べて、「5~10時間未満」の場合は0.1%水準で、「15時間以上」の場合は5%水準で有意に学業満足度が低いという結果が出た。また、立候補以外でリーダーになった人は、リーダーになったことがない人に比べて0.1%水準で有意に学業満足度が低い結果となった。

5. 結論と考察

仮説1について、部活動・サークルについては、趣味満足度と人間関係満足度については有意な影響を与えなかった。また、アルバイトについてはいずれの満足度においても有意な影響を与えなかった。そして、部活動・サークルについては、学業満足度について有意な影響を与えたが、「活動時間が長くなるほど学業満足度が低くなる」という結果になり、「活動時間が長くなるほど学業満足度が高くなる」という仮説とは逆の結果になった。これは、活動時間が長くなることによって、学習時間が削られてしまい、学業に満足に取り組むことができないためであると考えられる。部活動・サークル活動は、心身のリフレッシュに繋がり、学業面に良い影響を及ぼす側面もあるだろうが、過度な活動は逆影響を及ぼすようである。

また、部活動によっては一年に部活動を休める回数が決まっていたり、練習場所や外部のコーチなどとの兼ね合いがあったりと、自由に活動時間を決められない場合があるが、自由に時間を決められない人は、自由に活動時間を決められる人に比べて学業満足度が低い結果となり、義務感を感じている人は、義務感を感じていない人に比べて学業満足度が低い結果となったことから、あまりにも生活における比重が部活動・サークル活動にかなりすぎると、学業に悪影響が及ぶことがわかる。

学友会に所属している人とサークルに所属している人では学業満足度に有意差が見られなかったことは、「部活動とサークルでは活動形態に違いがあり、満足度にも差が生まれるのではないか」という直感に反する結果となった。前述の通り、東北大学には多数の学友会やサークルが存在し、それぞれの特徴も多岐に渡るため、「学友会」、「サークル」とひとまとめにすることができないということが原因として挙げられる。

アルバイトにおいては有意差が生じなかったが、「アルバイトは部活動に比べて自由度が大きい」ということが関係していると考えられる。アルバイトは部活動に比べ、やめようと思ったらやめることができ、また、忙しい時期はシフトを減らすなど、自分のライフスタイルに合わせた活動が可能である。そのため、生活満足度も個人差が大きいものになっていると考えられる。また、アルバイトを「学費を稼ぐためにやむを得ず行っている」人も一定数いると考えられる。その場合、アルバイトを「学業のため」という目的意識の

下っており、多くの時間をアルバイトに費やしていても、学習も怠らない傾向があるのではないか。

仮説 2 について、部活動・サークルについては、仮説 1 と同様に学業満足度について有意な影響を与えた。また、アルバイトについてはいずれの満足度においても有意な影響を与えなかった。また立候補以外でリーダーになった人はリーダーになったことがない人より有意に学習満足度が低いという結果になった。立候補以外でリーダーになった人は、自らリーダーになった人より主体性が低いと考えられ、「意欲がないのに、リーダーであることによって部活動に時間と(精神的な)労力を奪われている」という現象が起こっていると考えられる。そのため、学習満足度が低くなっていると推測される。

アルバイトについては、立候補の有無にかかわらず、「リーダーになったことがある」人が 9 人のみであり、サンプルに含まれるケース数が少ないため、結果の信頼性に疑問が残る。そもそもアルバイトにリーダーの制度が存在しない場合が多く、質問項目が不適切であった可能性がある。本調査において、「リーダーであること」は「主体性がある」ことを意味しているが、主体性を測る他の尺度を考えることでより信頼性のある結果が得られたかもしれない。

仮説 1・仮説 2 に共通して、「課外活動に過度に労力を費やすことはかえって悪影響である」という結論が得られる。学生の本分はあくまでも学習や研究活動であり、それを忘れずに課外活動に取り組むべきである。しかし、迫・荒井(2002)は「部活やサークルに所属している場合は大学生生活のトータル評価として満足度が高い」と指摘しており、課外活動が大学生生活を充実させることは確かである。大学生には、学業や趣味などの他の活動とのバランスを取りながら課外活動に取り組む姿勢が求められる。

引用文献

マイナビ「大学生のアルバイト実態調査(2021年)」https://career-research.mynavi.jp/research/20210428_8699/ (参照 2022-08-03)

山本幸子・江口恵里・楊玉華・甲斐美智代・佐藤正昭・白蓋真弥・山崎学・吉村耕一・増田公香・人見英里,2018,「大学生のアルバイトが健康、学習、意識変容に及ぼす影響」

『山口県立大学学術情報 第 11 号 [大学院論集 通巻第 19 号]』 127-134.

横山孝行,2012,「大学の部活・サークルにおける集団凝集性と参加率に関する研究」『東京工芸大学工学部紀要 Vol.35 No.2』 73-82.

迫俊道・荒井貞光,2002,「大学生のクラブ・サークル活動に関する研究」『広島体育学研究』,28: 11-20.

東北大生のオンライン授業と意識 ——オンライン授業の割合による意識の差に着目して——

大村朋・松浦敦士

1. 研究関心と問題提起

2019 年末より、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大が発生した。これによって多くの人びとの生活は変化を迫られることとなり、大学生もまた例外ではなかった。具体的には、感染拡大防止のため、大学での対面授業はほとんどなくなり、代わりにオンラインでの授業が導入されることになった。また、部活動やサークル活動なども停止に追い込まれることになった。

そのため、実際にコロナ禍での生活が始まり 1 年が経過した 2021 年に、全国大学生活協同組合連合会が実施した学生生活実態調査（2021）では、学生生活の充実度が例年を大きく下回り、大学 1 年生に至っては過去最低の充実度を記録することになった。特に、コロナ禍の大学生にアンケートを行なった LABOT（2021）によると、オンライン授業については、「不満」だと感じている大学生が 57.6%と、過半数を超える値を記録したという。

しかしながら 2022 年現在では、コロナ禍における感染拡大対策も段階的に緩和され始めている。コロナ禍以前ほどではないにしろ、部活動やサークル活動の解禁、対面授業の復活などが行なわれており、既に昨年度とは環境が大きく変化したと言えるだろう。中でも、大学での授業では、大学生側が対面かオンラインかを選択することが可能となり、オンライン授業に不満を抱いていた学生たちは晴れて対面授業を受講することが可能となったのである。

では、現在の環境において、いったいどのような人がオンライン授業を志向しているのだろうか。言い換えるならば、オンライン授業におけるデメリットを許容してまでオンライン授業を選択している学生には、どのような特徴があるのだろうか。

特に、株式会社ベネッセコーポレーション（2022）によると、今回統計を取り検討を行なう東北大学は、学生の学びの質や成長性に焦点を当てた”THE 世界大学ランキング 日本版”において、直近の 3 年間で 1 位を獲得しているという。このような環境の中でオンライン授業に焦点を当てその検討を行なうことは非常に意義のあることだろう。

2. 先行研究の検討

コロナ禍前後における授業形態の変化が授業満足度に与える影響を調べた鈴木(2021)によると、「「コロナ禍」における 2020 年度の方が、学習環境の影響を比較的強く受けると思われるような授業満足度は低く」なっていることが示されている。さらに、オンライン授業に関するアンケートを行なった早稲田大学(2020)のデータでは、オンライン授業によって「身体的な疲れをより感じる」人が多いことが示されている。また、コロナ禍に入学した大学一年生の心神状態を分析した黒澤・内田(2021)では、「全面オンライン授業下の大学一年生においては、身体的健康だけではなく、精神的健康も損なわれている可能性がある」と指摘されている。続けて、黒澤・内田(2021)は、「テクノ依存*1 による人間関係の希薄化、自粛生活による対人交流の制限といった諸要因と関連して精神的健康の不調が生じている」という可能性を示唆しているが、既に現在のコロナ対策の状況としては、条件的な自粛解除がなされており、後半の「自粛生活による対人交流の制限」は問題ではないと考えられる。一方、対面とのハイブリッドになったとはいえ、オンライン授業は現在も継続しており、オンライン授業によって半ば強制的にテクノ依存へ陥るといったケースは現在でも見られるものと考えられる。このように、オンライン授業によって身体的・精神的健康が損なわれているとするならば、それに伴い生活満足度も低くなっていると考えられる。また、オンライン授業によってテクノ依存が引き起こされ、対人関係を回避する傾向が見られるならば、したがって対人関係の積極性が低くなることも考えられるだろう。

3. 仮説

今回は、文部科学省が行なった調査（2021）で挙げられていたオンライン授業での不満点「対面授業より理解しにくい」「友人と受けられない」「質問等双方向のやりとりの機会が少ない」に注目し、4つの仮説を検討した。

3.1 オンライン授業の割合が高いほど満足度が高い

第一の仮説は、オンライン授業の割合が高いほど授業満足度を始めとした諸要素に対する満足度が高いというものである。これは、自らオンライン授業を志向し選択していることから、オンライン授業に対する授業満足度の高さが予想されるためである。また、それに従って、オンライン授業の割合の増減に応じて授業全体に対する満足度も同様の変化をすると考えられるのである。

3.2 オンライン授業の割合が高いほど学習意欲が低い

第二の仮説は、オンライン授業の割合が高いほど、学習意欲が低いというものである。これは、上述（3.仮説）の文部科学省での調査より、オンライン授業が「対面授業より理解しにくい」ことから、オンライン授業は対面授業より学習の質が低いと考えられるためである。つまり、学習の質が対面授業より低いオンライン授業を選択している学生は、授業自体への関心があまりなく、学習意欲も低いのではないかということである。

3.3 オンライン授業の割合が高いほど対人関係積極性が低い

第三の仮説は、オンライン授業の割合が高いほど、対人関係を積極的に拡大しようとする意識が低いというものである。これは上述（3.仮説）の文部科学省での調査より、「友人と受けられない」「質問等双方向のやりとりの機会が少ない」ことから、オンライン授業は対面授業より人との関わりがないと考えられるためである。従って、オンライン授業を選択するという事は、進んで人との関わりを減らしていると捉えられるのではないかということである。

3.4 オンライン授業の割合が高いほど将来設計の明確性が低い

第四の仮説は、オンライン授業の割合が高いほど、目標とする職業やそれに付随する努力などが行なわれていないのではないかというものである。これは第二、第三の仮説から導かれるもので、学習意欲が低く、対人関係の積極性も低いのであれば、将来（就職・大学院進学）のための行動や、そもそも目標とする将来設計も明確に定まっていけないかというものである。

4. 変数の設定と基本統計量

・q05 オンライン主体の授業の割合

「あなたが今セメスターに受けている授業のうち、オンライン主体のものほどの程度ありますか。」という質問に対し、「2割未満」「2割以上4割未満」「4割以上6割未満」「6割以上8割未満」「8割以上」の5カテゴリーで調査した。

表 4.1. オンライン主体の授業の割合

	度数	%
2割未満	85	54.1
2割以上4割未満	27	17.2
4割以上6割未満	21	13.4
6割以上8割未満	8	5.1
8割以上	16	10.2
合計	157	100

・q06 授業への満足度

仮説 1 の満足度を測定する変数として用いた。「あなたは現在の授業にどの程度満足していますか。」という質問に対し、「満足している」「やや満足している」「どちらともいえない」「やや満足していない」「満足していない」の5カテゴリで調査した。

表 4.2 授業への満足度

	度数	%
満足している	48	30.6
やや満足している	91	58.0
どちらともいえない	10	6.4
あまり満足していない	4	2.5
満足していない	4	2.5
合計	157	100

・q07 一週間あたりの授業時間外学習時間

仮説 2 の学習意欲を測定する変数として用いた。「今semesterでは、ふだんどれくらいの時間を授業外学習（授業の課題や、レポート作成にかける時間、資格試験に向けた学習など）に使っていますか。1週間あたりの合計時間をお答えください。」という質問に対し、「1時間未満」「1～3時間未満」「3～5時間未満」「5～7時間未満」「7～9時間未満」「9～11時間未満」「11～13時間未満」「13時間以上」の8カテゴリで調査した。

表 4.3 一週間あたりの授業時間外学習時間

	度数	%
1時間未満	3	1.9
1~3時間未満	9	5.7
3~5時間未満	24	15.3
5~7時間未満	25	15.9
7~9時間未満	21	13.4
9~11時間未満	17	10.8
11~13時間未満	15	9.6
13時間以上	43	27.4
合計	157	100

・q08 授業参加への意識、学習意欲の高さ

仮説 2 の学習意欲を測定する変数として用いた。q08 において「今semesterのあなたの学習活動に関する以下の項目について、もっともあてはまるものをそれぞれひとつずつ選んでください。」として、「授業には意欲的に参加している」「単位さえ取ればよいと考えて授業に参加している」「自分は学習意欲が高い方だと思う」という 3 つの項目について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の 5 カテゴリーで調査した。当初は、q08 の全ての質問で合成得点を作成し分析に用いる予定であったが、信頼性係数 α 値が 0.7 以下となり、合成に適さないことがわかったため、それぞれを個別に分析に用いることとした。

そのため、今回は特に、この 3 つの項目「授業には意欲的に参加している」「単位さえ取ればよいと考えて授業に参加している」「自分は学習意欲が高い方だと思う」を個別の変数として利用した。

表 4.4 授業に意欲的に参加している

	度数	%
そう思う	65	41.4
どちらかといえばそう思う	61	38.9
どちらともいえない	18	11.5
どちらかといえばそう思わない	10	6.4
そう思わない	3	1.9
合計	157	100.1

表 4.5 単位さえ取ればよいと考えて授業に参加している

	度数	%
そう思う	16	10.3
どちらかといえばそう思う	46	29.7
どちらともいえない	34	21.9
どちらかといえばそう思わない	42	27.1
そう思わない	17	11.0
合計	155	100.0

表 4.6 自分は学習意欲が高い方だと思う

	度数	%
そう思う	22	14.2
どちらかといえばそう思う	57	36.8
どちらともいえない	48	31.0
どちらかといえばそう思わない	21	13.5
そう思わない	7	4.5
合計	155	100.0

・ q12 学部を修了した後の進路

「学部を修了した後の進路についてどのように考えていますか。」という質問に対し、「就職を考えており、興味のある職業が具体的にある」「就職を考えているが、興味のある職業は具体的に決まっていない」「内定を得ているなどすでに進路が決まっている」「大学院への進学（すでに大学院に進学している場合を含む）」「わからない」「その他」（＝自由記述）の6カテゴリで調査した。

これを分析で使用する過程で、その他を NA とし、「就職を考えており、興味のある職業が具体的にある」「内定を得ているなどすでに進路が決まっている」「大学院への進学（すでに大学院に進学している場合を含む）」を「進路が明確である」というカテゴリに統合し、「就職を考えているが、興味のある職業は具体的に決まっていない」「わからない」を「進路が決まっていない」というカテゴリに統合した。

表 4.7 学部を修了した後の進路

	度数	%
就職を考慮しており、興味のある職業が具体的にあり	26	16.6
就職を考慮しているが、興味のある職業は具体的に決まっていない	25	15.9
内定を得ているなどすでに進路が決まっている	0	0.0
大学院への進学（すでに大学院に進学している場合を含む）	92	58.6
わからない	11	7.0
その他	3	1.9
合計	157	100

表 4.8 加工後のカテゴリー変数

	度数	%
進路が明確である	118	76.6
進路が決まっていない	36	23.4
合計	154	100

・ q36_1, q36_4 学業への満足度, 将来設計への満足度

q36 において「あなたは以下の項目についてどのくらい満足していますか。もっとも近いものを 1 つずつ選んでください。」として、「学業」と「将来設計」について、「満足している」「やや満足している」「どちらともいえない」「やや満足していない」「満足していない」の 5 カテゴリーで調査した。当初は、q36 の全ての質問で合成得点を作成し分析に用いる予定であったが、信頼性係数 α 値が 0.7 以下となり、合成に適さないことがわかったため、q36_1 と q36_4 を取り出し、個別に分析で用いることとした。

表 4.9 学業への満足度

	度数	%
満足している	39	24.8
やや満足している	71	45.2
どちらともいえない	21	13.4
あまり満足していない	18	11.5
満足していない	8	5.1
合計	157	100

表 4.10 将来設計への満足度

	度数	%
満足している	7	4.5
やや満足している	44	28.0
どちらともいえない	58	36.9
やや満足していない	31	19.7
満足していない	17	10.8
合計	157	99.9

・q54_3 自身が社交的な人間だと思うか

仮説3の対人関係積極性を測定する変数として用いた。q54において、「自分が社交的な人間だと思う」という項目について、「あてはまる」「少しあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5カテゴリーで調査した。当初は、q54の全ての質問で合成得点を作成し分析に用いる予定であったが、信頼性係数 α 値が0.7以下となり、合成に適さないことがわかったため、q54_3のみを分析に用いることとした。

表 4.11 自身が社交的な人間だと思うか

	度数	%
あてはまる	15	9.6
少しあてはまる	39	24.8
どちらともいえない	34	21.7
あまりあてはまらない	43	27.4
あてはまらない	26	16.6
合計	157	100

・q55_1 自信のコミュニケーション能力が高いと思うか

q55において、「自分はコミュニケーション能力が高い方だ」という項目について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4カテゴリーで調査した。

表 4.12 自信のコミュニケーション能力が高い方だと思うか

	度数	%
そう思う	22	14.0
どちらかといえばそう思う	47	29.9
どちらかといえばそう思わない	47	29.9
そう思わない	41	26.1
合計	157	100

5. 分析結果

5.1 仮説1の分析結果

仮説1「オンライン授業の割合が高いほど満足度が高い」を検証するため、従属変数として「授業への満足度」と「学業への満足度」を設定し、それぞれ独立変数をオンライン授業の割合とした順序ロジスティック回帰分析を実行した。

従属変数を「授業への満足度」に設定した分析では、有意な結果を得ることはできなかった。

従属変数を「学業への満足度」に設定した分析でも、有意な結果を得ることはできなかった。

5.2 仮説2の分析結果

仮説2「オンライン授業の割合が高いほど学習意欲が低い」を検証するため、従属変数として「一週間あたりの授業時間外学習時間」と「授業には意欲的に参加している」、「単位さえ取ればよいと考えて授業に参加している」、「自分は学習意欲が高い方だと思う」を設定し、それぞれ独立変数をオンライン授業の割合とした順序ロジスティック回帰分析を実行した。

従属変数を「一週間あたりの授業時間外学習時間」に設定した分析では、有意な結果を得ることはできなかった。

従属変数を「授業には意欲的に参加している」に設定した分析でも、有意な結果を得ることはできなかった。

従属変数を「単位さえ取ればよいと考えて授業に参加している」に設定した分析でも、有意な結果を得ることはできなかった。

従属変数を「自分は学習意欲が高い方だと思う」に設定した分析では、オンライン授業の割合8割以上を基準としたときに、オンライン授業の割合6割以上8割未満のグループにおいて5パーセント水準で1.866という有意な結果が得られた。従って、オンライン授業の割合が8割以上の学生に比べて、6割以上8割未満の学生は、学習意欲が高い方だと思いきや解釈できる。

5.3 仮説3の分析結果

仮説3「オンライン授業の割合が高いほど対人関係積極性が低い」を検証するため、従属変数として「自身が社交的な人間だと思うか」と「自信のコミュニケーション能力が高いと思うか」を設定し、それぞれ独立変数をオンライン授業の割合とした順序ロジスティック回帰分析を実行した。

従属変数を「自身が社交的な人間だと思うか」に設定した分析では、有意な結果を得ることはできなかった。

従属変数を「自信のコミュニケーション能力が高いと思うか」に設定した分析では、オンライン授業の割合2割未満を基準としたときに、オンライン授業の割合4割以上6割未満のグループにおいて、5パーセント水準で-0.957という有意な結果が得られた。従って、オンライン授業の割合が2割未満の学生に比べて、4割以上6割未満の学生は自分のコミュニケーション能力が低いと思いきや解釈できる。

5.4 仮説4の分析結果

仮説4「オンライン授業の割合が高いほど将来設計の明確性が低い」を検証するため、従属変数として「学部修了後の進路が確定しているかどうか」と「将来設計への満足度」を設定し、それぞれ独立変数をオンライン授業の割合とした順序ロジスティック回帰分析を実行した。

従属変数を「学部修了後の進路が確定しているかどうか」に設定した分析では、有意な結果を得ることはできなかった。

従属変数を「将来設計への満足度」に設定した分析でも、有意な結果を得ることはでき

なかった。

6. 結論と考察

仮説 1

有意な結果は得られなかった。

これは、仮説の前提として、全ての学生は授業形態を選択可能であるとしていたが、実際には、学生側が授業形態を選択していないケースが多かったことが挙げられる。特に理系学生は、必修授業だけで時間割が埋まってしまうことが多く、仮説設定の前提に問題があったと考えられる。

授業選択の自由度を交絡変数とするなど、より多角的な分析が求められる。

仮説 2

仮説は部分的に支持された。

具体的には、オンライン授業の割合が8割以上の学生に比べて、6割以上8割未満の学生は、学習意欲が高い方だと思いやすいという結果が得られた。これは、仮説1で述べた前提に関する問題点から、オンライン授業の割合が低い学生の統計はばらつきが大きかった一方で、オンライン授業の割合が比較的高い学生は授業形態の選択が可能であり、統計の一部でのみ有意な差が得られたからだと考えられる。

しかし、他のオンライン授業の割合の間では有意な差が得られなかった。また、オンライン授業と学習意欲や授業外学習時間との間にも有意な差は得られなかった。これは、前提に関する問題点の他に、オンライン授業を選択した理由が、想定した消極的な理由のみではなく、積極的な理由でオンライン授業を選択した学生がいたためだと考えられる。つまり、自分のペースで学習できるオンライン授業を選択し、計画的に学習を進める学生も一定数存在したため、統計にばらつきが出てしまったのではないだろうか。

仮説 3

一部有意な結果が得られたが、設定した仮説とは反するものであった。

具体的には、オンライン授業の割合が2割未満の学生に比べて、4割以上6割未満の学生は自分のコミュニケーション能力が低いと思にくいという結果が得られた。これは、特に対面授業の割合が高い理系学部において、対面が必須である授業が多く、学生が自由に形態を選択できる授業が少なかったことによると考えられる。対面授業の割合が高かったとしても、それはその学生の選択によるものではないため、コミュニケーション能力を反映したものでなかったのではないかと考えられる。これはまた、他の割合グループの間で有意な差が見られなかったことの一因ではないかと考えられる。

他方で、なぜ上記のような有意な結果が得られたのか。これは、理系学部と文系学部の学生の気質の違いが表れたのではないかと考えられる。

仮説 4

有意な結果は得られなかった。

これは、理系学部の学生の多くが大学院への進学を前提として大学進学をしているという背景によるのではないかと考えられる。また、オンライン授業を選択した理由が、消極的な理由ではなく、資格の取得や就職活動に時間を充てるためといった積極的な理由であった学生がいたのではないかと考えられる。

6.1 まとめ

東北大生のオンライン授業の割合と意識には、直接的な関連がほとんど見られないということが分かった。これは、オンライン授業が多いからといって、学習意欲が低かったり、対人関係の積極性が低かったりするわけではないことを示している。つまり、オンライン

授業の割合が、受講している学生の内面を写しているとは限らないのである。勿論、授業形態の選択ができなかったことなども、統計にばらつきが出た要因ではあるだろう。しかし、授業形態から講義を選ぶのではなく、単純に自分自身の興味関心で講義を選択しているというケースもある。東北大学という教育の質が全体的に高い大学では特に、授業形態よりも授業内容で授業を選択する学生が多いという理由も考えられるだろう。

6.2 考察の補足

今回の分析では、前提に大きな問題があったのではないかというのは前述の通りである。そこで実際に、学部ごとにオンライン授業の割合に差があるのかどうかは確かめた。その結果が下の図である。

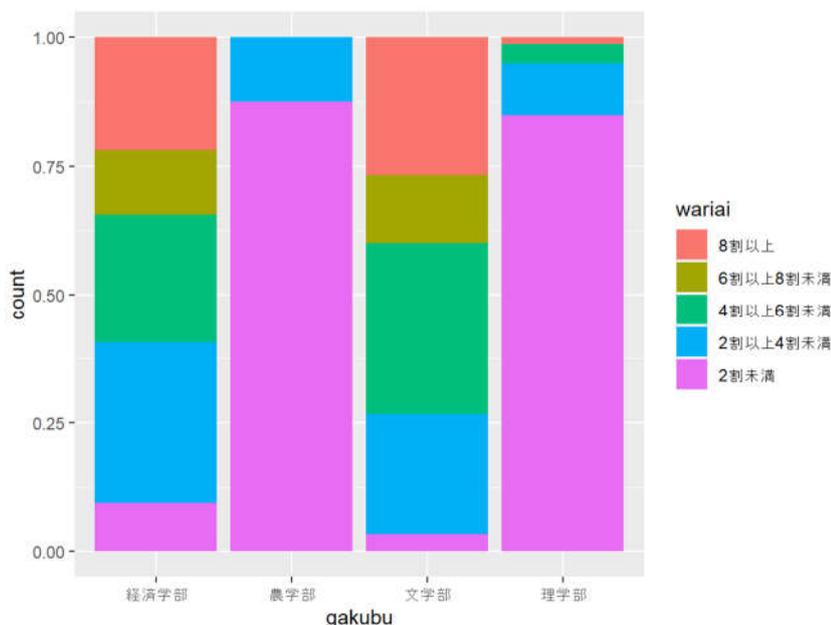


図 1

横軸が学部で、縦軸がオンライン授業の割合を度数で示したものである。これによると、理系にあたる農学部と理学部ではほとんどオンライン授業の割合がなく、文系にあたる文学部と経済学部では全体的なばらつきが見られることになった。

そこで、オンライン授業の割合に偏りがある理系をデータから除き、全体 157 名のうち文系学生 62 名を取り出した新たな変数を作成し、q08”学習意欲”と q36_1”学業満足度”の分析を行なった。

しかしながら、q08 は本文での分析と同様、信頼性係数 α 値が 0.7 以下であり、合成に適さなかった。また、q36_1 も本文と同様に、統計的に有意な差は得られなかった。

これはつまり、文系と理系でのオンライン授業の割合が分析結果に影響を与えているのではないことを示している。つまり、授業形態を自由に選択できる学生において、オンライン授業を志向している人間に当てはまると考えられた特徴は、統計的には見られなかったということである。

ではなぜ、昨年までの統計では見られていた傾向が、今年では見られなくなったのだろうか。これは、コロナ禍という特殊な状況下に、学生たちが順応し始めたからだと考えられる。今回の調査に協力していただいた 2~4 年生は、既にコロナ禍での生活を 1 年以上経験しており、コロナ禍での生活に慣れてきているのである。また、1 年生は、入学時には既に大幅に感染拡大対策が緩和されていたため、コロナ禍以前にほとんど近い生活環境にあると考えられる。つまり、「オンライン授業が特殊なもの」であった時代から、「オン

ライン授業は当たり前なもの」として生活に浸透し始めたことが、今回の分析から推測できる現在の潮流なのではないだろうか。

本研究の課題としては、仮説の設定の段階において既に、「オンライン授業は特殊なものである」というバイアスが掛かっていたことが挙げられる。また、授業形態を選択可能であるかを交絡変数へと組み込むことで、より意図した統計に近づく可能性も考えられる。また、合成得点を作成しようとした問い全てにおいて、信頼性係数 α が 0.7 以下となってしまうことから、調査票での質問項目の設定にも問題があったと考えられる。

引用文献

株式会社ベネッセコーポレーション,2022,『THE 世界大学ランキング 日本版』

<https://japanuniversityrankings.jp/rankings/total-ranking/> (2022年8月3日参照)

LABOT, 2021,『コロナ禍の大学生 238 人に調査。オンライン授業について「不満」

57.6%、「学費が高い」73.3%、「孤独を感じた」76.7%と回答。また経済的な影響があった学生が 83.5%、10 人に 1 人は「困窮」』

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000015.000049664.html> (2022年8月2日参照)

文部科学省, 2021,『新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査(結果)』 https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf
(2022年8月2日参照)

鈴木賢男, 2021,『オンライン授業の導入による授業満足度への影響 2018~2020 年における半期授業全体に関する調査の年度比較』

https://www.jstage.jst.go.jp/article/pamjaep/63/0/63_443/_pdf/-char/ja (2022年7月13日参照)

早稲田大学, 2020,『オンライン授業に関する調査結果(2020年度春学期)』

<https://www.waseda.jp/top/news/70555> (2022年7月13日参照)

全国大学生生活協同組合連合会, 2021,『大学1年生「充実度」過去最低...学生生活実態調査』 <https://resemom.jp/article/2021/03/09/60867.html> (2022年8月2日参照)

東北大学生の就職開始時期に関する社会調査 ——個人の持つ「多様性」が与える影響——

菊地庸太・高橋冬馬・古谷涼風・鍾婧雯・劉峰

1. 問題設定

近年、大学生の就職活動に大きな変化が出ている。内閣府(2021)によると、企業説明会やセミナー等について最初に参加した時期が早い学生の割合が増えているということが把握できる。学部3年次の9月以前に説明会等に参加した学生の割合は2017年では13%ほどだったのに対し、2021年では55%にまで上がっている。

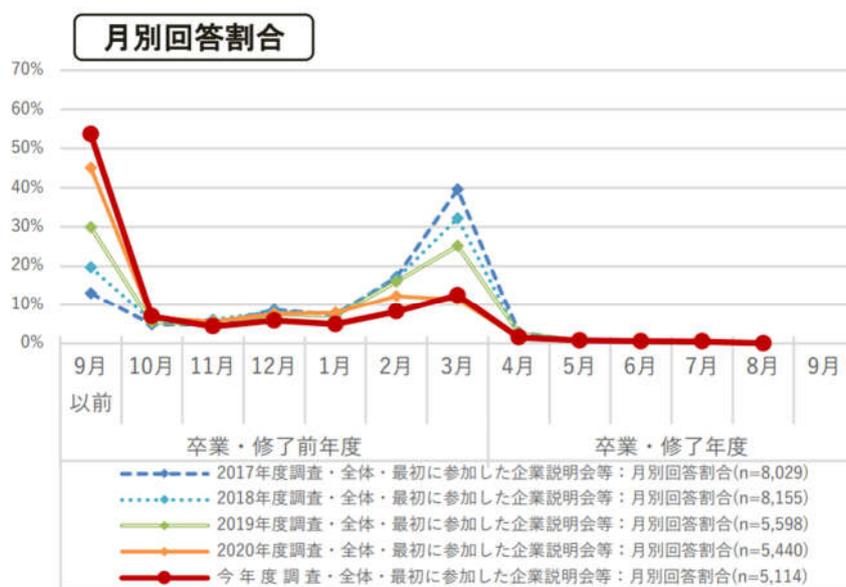


図1 企業説明会やセミナー等の参加時期
出典：内閣府（2021）

一方で、説明会やセミナーへの参加が遅い学生も存在する。図1において、学部4年次3月で初めてセミナーに参加する学生も2021年に10%ほどおり、そのような学生はエントリーシートや面接の対策があまり進んでおらず自分の望んだ就職先につけない可能性がある。この時期に就職活動を開始する学生は年々大幅に減っているが、なおも存在することから何か要因があると考えられる。

また、近年の就職活動においては就活アプリの活用が普及して久しい。新型コロナウイルスの影響によりオンラインの使用が一般的になると、企業へのエントリーだけでなく説明会やイベントなども就活アプリを通して申し込みや参加を行うことが増えた。今の大学生にとってこういったアプリは必須なものとなってきている。

どのような学生が、就職活動を「有利に」進めることができるのだろうか。つまり、就職活動において、より望ましい結果を手にするにはどのような要因が影響を及ぼしているのか。このことを明らかにすることは、大学におけるキャリア支援の在り方を模索する上でも、より効果的な施策の検討に資する観点を提供するという意味で重要である。本稿では、就職活動で望ましい結果を得ることができるかを測る指標として、就職活動の開始時期を設定する。より望ましい結果を得るということは、本人が希望する就職先への内定を獲得するということだが、そのためには早期に就職活動を開始することがどの学生にも必要である。早く就職活動を始めるほど、自分が望む進路について考える時間や、内定獲得

のために必要な準備のための時間を十分に取ることができる。したがって、就職活動の開始時期を代替指標と設定して、分析を進める。

就職活動の開始時期が早い学生にはどんな特徴がみられるか。このことを明らかにするために、本稿では東北大生の就職開始時期に影響を与えている要因について焦点を当てた。就活開始時期は自己分析または業界分析を始めた時期と定義している。さらに今回は個人の「多様性」に要因を絞っている。「多様性」はすなわち、自身が身を置いた環境がいかに多様であるかということである。例えば OB・OG との関わりが就職活動の結果に良い影響をもたらすことが考えられる。

また、補足的な調査として、同様の意義のもと、就活アプリに焦点を当ててそれが職業の決定にどれほど影響を与えているのかについても調べる。就活アプリは大多数の就活生が利用しており、なくてはならない媒体であるが、その利用がどのように就職活動に結びついているのか十分に明らかにされていない。よって、本稿ではこれについても注目する。

2. 先行研究の検討

2.1 中高生時代の職業に関する生活経験

就職活動の動機や背景となる職業への関心・知識は、大学に入る以前の時期においても蓄積される。しかしながら、大学生の就職活動に対して中学生や高校生の頃につちかわれた職業への関心がどのように影響を与えているか、この観点から取り組まれた研究はみられない。大学生の就職活動に関する研究は多くなされているが、職業への関心は中高生の頃などからつちかわれていることを踏まえるならば、大学進学以前の生活経験も考察する必要性がある。

中学生および高校生の職業関心を調査した吉中・石井・下村・高綱・若松(2003)の研究によれば、中学・高校生の職業関心は、全体としては多様化の傾向がみられるが、個々人の関心に絞ると局所的な関心の集中が確認されている。この研究では中高生の職業への関心は職業名を知っているかどうかにあらわれていると指摘され、より詳細な調査の必要性が一部認められるものの、それら職業に関する知識は生活の経験から得られていることが示唆されている。

大学生の就職活動開始時期を左右する要因として星野(2018)では、友人関係や非計画的動機などの観点から考察が成されているが、就職活動に積極的な学生がどのような動機にもとづいているかについては考察が成されていない。また、浦上(2015)は中高生の生活経験が職業観の形成に影響を与える関連性を明らかにしたが、実際の就職活動にどのような影響を与えるかについては検討がなされていない。

以上から、本稿では中高生時代の職業に関連する生活経験と、大学生における就職活動の開始時期との間にある関係性を検討する。

2.2 大学生の所属する組織における人材の多様性

就職活動において周りからの情報提供は重要なものであるが、大学生の情報源として考えられるのはサークルの OB・OG やアルバイト先といった組織である。OB・OG からの情報について下村・堀(2004)の研究結果から上首尾な就職活動に結びつきやすいことが分かっており、その背景として「企業社会」に対するリアリティを早い段階で形成できることがあると思われる、と論じている。このことから OB・OG との関わりが学生の企業理解を早め、それと同時に就職活動開始時期を早めると考えられる。また、矢崎・斎藤・高井(2007)では、就職や就職活動の経験に関する情報を多く収集した者ほど、卒業後の進路を決定している場合が多いと述べられている。このように就職活動で望ましい結果を得る上

で、所属する組織を構成する人材の多様性が情報収集の面で影響を与えていることが指摘されている。そのため、就職活動の開始時期の早さと、組織の人材の多様性が関連していると考えられる。

以上より、本稿では学生の就職活動開始時期と所属する組織のメンバーの多様性との関連性を検討する。

2.3 インターネットにおける就活の動向

21世紀以降、就職活動とインターネットの研究において、新たな動向が生まれた。例えば、下村・堀(2001)は就活サイトの頻繁な利用が、「就職活動が進展している」という意識に繋がっていないことを論じた。すなわち、「就職サイトの利用が、かえって進路選択過程を混乱させてしまった可能性がある」ことを指摘した。この認識を継続的に研究し、下村・堀(2004)は就職サイト情報が就活の初期段階で積極的な影響に与え、就職活動の全体像を把握できるという利点を指摘した。一方で、就職活動の後半に伴って、就職サイト情報の利点は急速に減少し、就職活動の結果には直接的な影響がなかったとも述べている。むしろ、「OB・OG情報によって就職活動を上首尾に進められなかった場合に、やむをえず活用し続けなければならない情報である可能性が高い」(下村・堀, 2004)と推測している。

既存の研究は、就職活動とインターネットの関連性を重視する一方で、就活サイトの消極的な影響を強調した。しかし、それはモバイルの普及によって、多くの学生が就活アプリを利用してきて、職業を探すという常識的な考えに対して矛盾している。また、モバイル・インターネットの発展、および新型コロナウイルスの大流行に伴い、インターネットを利用して就活情報を入手する新たな動向を生じるかもしれないと考える。よって、本稿では、学生の就活アプリの使用の頻度と、就きたい職業を早く明確することの間にある関係性を検討したいと考えられる。

3. 仮説

仮説①：中高生時代の職業に関する生活経験

高校までの学生生活で職業や社会問題に関心を抱いていた学生ほど、就活開始時期が早い。

仮説②：大学生の所属する組織における人材の多様性

バックグラウンドの多様性がある組織や、OB・OGとの交流が豊かな組織に所属している学生ほど、就活開始時期が早い。

仮説③：インターネットにおける就活の動向

就活アプリを積極的に利用している学生ほど、就きたい職業が明確に決まっている。

4. 変数の設定・及び基本統計量

本研究では、調査により得られたデータを用いて、新変数を作成し分析を行なった。以下、それら新変数の内容・加工の有無・加工の過程を表 4.1 に示す。また、図 2 では、回答者の就活開始時期がいつからであったかについてのヒストグラムである。

表 4.1 分析に用いた変数の項目と新変数への加工内容

元番号	質問内容	加工	加工の過程
q03	学年	有	「院生」以降をNAに
q10	高校生までに保護者と、保護者の仕事について話したことはあるか ⇒「保護者との会話経験」と表記、oya変数として分析する	有	「よくあった」を4、「覚えていない」をNAで値の再割り当て
q11	高校生までに、社会問題に関する学外団体の活動に自発的に参加した経験はあるか ⇒「学外団体への参加経験」と表記、shakai変数として分析する	有	「その他」を「あった」に含め、「あった」を1、「なかった」を0に加工
q12	学部を修了した後の進路についての考え	有	スキップする項目を消去、「興味ある企業がある」に1、「興味ある企業がない」に0を割り当て
q13	就職活動をいつ始める予定か	有	「2年後期より前」を6、「その他」をNAに再割り当て
q15	就活用のアプリ・ウェブサイトの1週間あたりの利用頻度 ⇒「就活アプリの利用頻度」と表記、q15として分析する	無	無
q28_1	もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバーについて：出身地にばらつきがある ⇒「出身地の多様性」と表記、baratsuki1として分析する	有	各項目について、チェックの有無で0/1のダミー変数に加工
q28_2	もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバーについて：公立高校・私立高校出身者がどちらもいる ⇒「公立/私立高校出身者の有無」、baratsuki2として分析する	有	各項目について、チェックの有無で0/1のダミー変数に加工
q28_3	もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバーについて：所属（出身）学部にはばらつきがある ⇒「所属学部の多様性」と表記、baratsuki3として分析する	有	各項目について、チェックの有無で0/1のダミー変数に加工
q28_4	もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバーについて：学生だけでなく社会人もいる ⇒「社会人の有無」と表記、baratsuki4として分析する	有	各項目について、チェックの有無で0/1のダミー変数に加工
q28_5	もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバーについて：留学生がいる ⇒「留学生の有無」と表記、baratsuki5として分析する	有	各項目について、チェックの有無で0/1のダミー変数に加工
q28_6	もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバーについて：あてはまるものはない ⇒「該当なし」と表記、baratsuki6として分析する	有	各項目について、チェックの有無で0/1のダミー変数に加工
q29	もっとも積極的に関わっている組織・団体には、OB・OGとの交流がある	有	「当てはまる」を5、と値を再割り当て

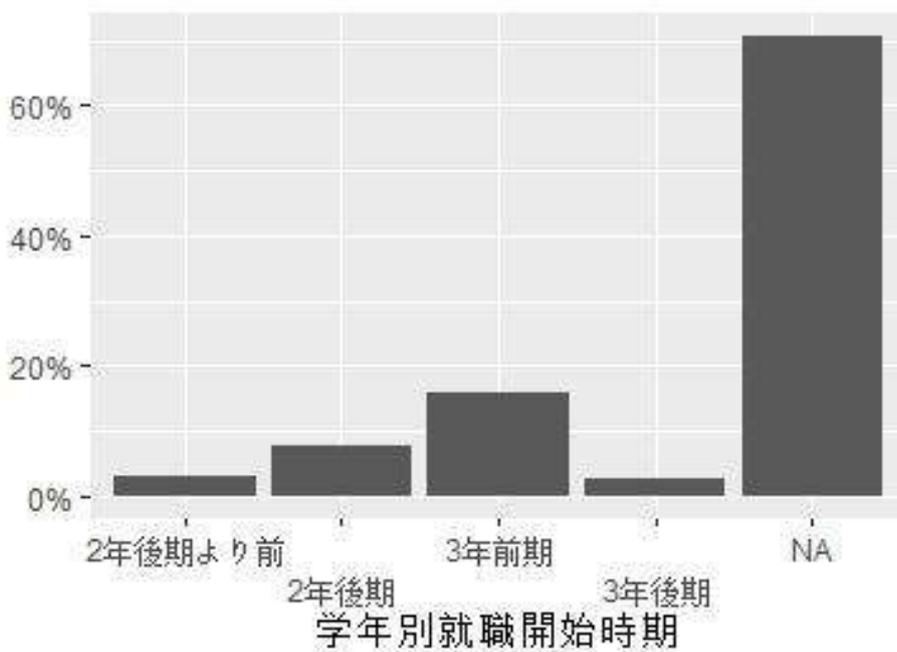


図 2 回答者の就活開始時期

5. 分析結果

5.1 仮説 1 の分析結果

仮説 1「高校までの学生生活で職業や社会問題に関心を抱いていた学生ほど、就活開始時期が早い」では、高校生の時期に保護者との会話で職業に関する話が十分になされたか

ということと、職業や社会問題に関する課外活動に参加したかどうか、これらの生活経験と大学生における就活開始時期との間に関連性が認められるかどうかを検討した。この分析で用いる変数は q10「高校生までに保護者と、保護者の仕事について話したことはあるか」及び q11「高校生までに、社会問題に関する学外団体の活動に自発的に参加した経験はあるか」である。この2つが就職活動開始時期と関連性があるかどうかを確かめる。ここで、就職開始時期は連続変数として扱い、係数が正の増加を見せるとき、就職開始時期がより早くなることを意味する。連続変数として就職開始時期を扱い、これを従属変数として重回帰分析による検討を行なった。その結果は、表 5.1 に示されている。

検討の結果、2つの変数ともに就活開始時期との有意な関連性は認められなかった。q10を示す「保護者との会話経験」について、係数は-0.035であり、q11を示す「学外団体への参加経験」の係数は0.138である。両変数とも有意水準を満たしていないことからこれらの変数が就活開始時期に有意な影響を持っているとはいえない。また、この仮説を示す回帰式の調整済み決定係数は-0.042である。

表 5.1 職業に関する保護者との対話、学外活動への参加状況と
就活開始時期との重回帰分析

仮説1		
	係数	標準誤差
(Intercept)	4.47966 ***	0.42705
oya	-0.0355	0.13795
shakai	0.1386	0.36236
調整済みR2		-0.042
N		46

† p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

5.2 仮説 2 の分析結果

仮説 2「バックグラウンドの多様性がある組織や、OB・OG との交流が豊かな組織に所属している学生ほど、就活開始時期が早い」では、最も積極的に関わっている組織・団体のメンバーに多様性があるかどうかと OB・OG との交流があるかという人的つながりと大学生における就活開始時期との間に関連性が認められるかどうかを検討した。この分析で用いる変数は q28「もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバーについて」及び q29「もっとも積極的に関わっている組織・団体には、OB・OG との交流があるか」である。また、q28 においては各項目をそれぞれ1つの変数とした。この7つが就職開始時期と関連しているかどうかを確かめるため、重回帰分析による検討を行った。

検討の結果、7つの変数すべてにおいて就活開始時期との有意な関連性は認められなかった。q28 の「もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバーについて」の回答の係数は「出身地の多様性」から「該当なし」までで、-0.022,-0.247,0.035,0.249,0.231,-0.08 であり、q29「もっとも積極的に関わっている組織・団体には、OB・OG との交流があるか」の回答の係数は 0.040 である。すべての変数において有意水準を満たしていないことからこれらの変数が就活開始時期に有意な影響を持っているとはいえない。また、この仮説を示す回帰式の調整済み決定係数は-0.107である。

表 5.2 所属する団体のバックグラウンドの多様性、OB・OG との交流と就活開始時期との重回帰分析

仮説2		
	係数	標準誤差
(Intercept)	4.2421 ***	0.58023
baratsuki6	-0.0824	0.69964
baratsuki5	0.23105	0.29947
baratsuki4	0.24959	0.37589
baratsuki3	0.35371	0.39947
baratsuki2	-0.2477	0.36298
baratsuki1	-0.2257	0.54552
ob	0.04011	0.09661
調整済みR2		-0.1072
N		45

† p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

5.3 仮説3の分析結果

仮説3「就活アプリを積極的に利用している学生ほど、就きたい職業が明確に決まっている」では、普段就活アプリやウェブサイトよく使用するかということと、興味のある職業が具体的にあるかということとの間に関連性が認められるかどうかを検討した。この分析で用いる変数は、q12「学部を修了した後の進路についてどのように考えていますか」及びq15「あなたは、“encourage”のような就活イベントや、面接の案内や社会人との面談のために用いるアプリやウェブサイトを、1週間あたりどの程度使用していますか」である。この関連性を確かめるため、「興味ある企業がある」に1、「興味ある企業がない」に0を割り当て、二項ロジスティック回帰分析による分析を行った。その結果は、表5.3に示されている。

分析の結果、就活アプリやウェブサイトの使用状況と就きたい職業の明確かどうかに関連性は認められなかった。「就活アプリの使用頻度」を示す変数の係数は0.072となっているが有意水準を満たしていないことから、就きたい職業が明確かどうかに関連性を与えているとはいえない。また、この仮説を示す回帰式の疑似決定係数は0.023である。

表 5.3 就活アプリやウェブサイトの利用頻度と就きたい職業の
関連の二項ロジスティック回帰分析

仮説3		
	係数	標準誤差
(Intercept)	0.409 ***	0.10495
q15	0.07241	0.05602
McFadden		0.0231
N		51

† p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

6. 結論と考察

6.1 仮説 1 の考察

仮説 1 では大学進学以前の学生生活と就活開始時期との関連性を分析した。まず「保護者との会話経験」に注目すると、係数が-0.035という値を示しており、高校生までの時期に保護者と職業や仕事について話をした学生ほど、就活開始時期が遅くなるという解釈が考えられる。次に「学外団体への参加経験」については、係数が 0.138 であることから、高校生までに学外団体の活動を通じて社会問題への関心を深めた学生ほど、就活開始時期が早まるという解釈が考えられる。

しかしながら、本稿の分析では有意な関係があると示すことができなかったため、これらの解釈を採用することは難しい。代わりに上記変数が就活開始時期の早晚化に影響を及ぼさないとするならば、以下の理由が考えられる。例えば、「保護者との会話経験」に対しては「就活慣行や就職状況の世代による違いから、保護者と仕事について話す機会があったとしても就活の進め方に有益な情報を得ることが難しい」「東北大学は総合大学であり、保護者の社会的地位や職業に関わらず学部や自身の進路を選択することから、関連性がみられない」といった理由が考えられる。「学外団体への参加経験」については、「スポーツ・文化芸術等のクラブ活動に課外時間を費やす学生が一般的であり、学外団体の活動に参加する学生はまれである」などの理由が考えられた。加えて、サンプルサイズが小さいなども併せて、本稿の分析では有意な結果を導き出すことが困難であったといえる。

以上、仮説 1 について考察を試みた。サンプルサイズの不足があるものの、大学生の就活活動開始時期を考える上で、保護者との対話や課外活動の内容からは、職業観や就業意識、つきたい職業を考えるための有益な情報を獲得することにあまり期待できないと述べられる。

6.2 仮説 2 の考察

「もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバー」について見てみると「出身地の多様性」の係数は-0.225、「公立/私立高校出身者の有無」の係数は-0.247、「所属学部の多様性」の係数は 0.353、「社会人の有無」の係数は 0.249、「留学生の有無」の係数は 0.231、「該当なし」の係数は-0.082 となり、もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバーについて出身地にばらつきがある、公立高校・私立高校出身者がどちらもいる、もしくはあてはまるものがない学生ほど就活開始時期が遅くなると解釈する。また、所属

(出身)学部にはばらつきがある、学生だけでなく社会人もいる、もしくは留学生がいる学生ほど就活開始時期が早まると解釈する。「もっとも積極的に関わっている組織・団体には、OB・OGとの交流があるか」について見ると係数は0.040となり、OB・OGとの交流がある学生は就活開始時期が早まると解釈する。

しかし、分析からこれらの係数について有意性を示すことができなかつたため、これらの解釈を採用することは難しい。これらの変数について就職開始時期との関連性がないとするなら、それには次のような理由が考えられる。まず、「もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバー」について、積極的に関わる組織・団体が文化系や体育会系かなどその特徴が所属しているメンバーとのつながり方に影響を及ぼす可能性があるという点である。この分析では所属する組織の特徴について細かく追求はしなかつた。そのため、バックグラウンド自体に多様性があつたとしても、そのメンバーから就職活動を早める動機になるほどの影響を受けたかどうかは不明である。次に、「もっとも積極的に関わっている組織・団体には、OB・OGとの交流があるか」について、OB・OGからの情報が必ずしも就職活動を早めるとは言いがたい点である。本調査を行う際に、OB・OGは就職活動についての豊富な情報をもっており、それが学生に早期の就職活動を促すという仮定をしていたが、実際には就職活動を遅くに開始した学生も存在し、「なんとかなつた」経験を聞いて就活開始時期を意識しない学生もいたと考えられる。

以上が仮説2の結果に対する考察である。

6.3 仮説3の考察

就活アプリやウェブサイトの利用状況という変数の係数は0.072という値を示しており、そういったアプリを頻繁に使用した学生ほど、就きたい職業がより明確になるという解釈が考えられる。

しかしながら、分析結果から見ると、統計的な有意性を示すことができなかつたため、これらの解釈を採用することは困難である。就活アプリの使用状況と就きたい職業の明確かどうかには関連がないとするなら、以下の理由が考えられる。まず、「就活アプリとは就きたい職業が決まってから使うものだ」といった理由が考えられる。すなわち、就きたい仕事が決まった後、その仕事に関するアプリや企業のホームページなどを利用し、情報を取得する考えは合理的である。次に、学生たちは「encourageのような就活イベント、就活アプリやウェブサイト」を使っていることに満足を感じていなく、漠然と使っていたかもしれない。いまの段階でやりたい仕事がないから、とりあえず就活アプリやウェブサイトに登録しようと思う人が少なくないからだ。最後には、サンプルサイズの不足も合わせ、アプリを使ったことがある人が9人しかおらず、本稿の分析では有意な結果を導き出すことが困難であつたといえる。

以上、仮説3について考察を試みた。サンプルが十分に大きくないため、就活アプリの使用状況と就きたい職業の明確かどうかには関連がないということがうかがわれる。

6.4 全体を通しての結論

これまで、仮説1~3までの検討を行なつた。検討の結果、どの仮説においても有意な関連性を認めることはできなかつた。

仮説1については、職業に関する保護者との対話、学外活動への参加状況と就活開始時期との関連性を検討した。大学進学以前の学生生活を通して以下に職業意識や希望する就職先について考えた涵養されるかという問いに対して、保護者との対話や学外活動への参加状況からは直接的な影響を受けたとはいえない。しかしながら、大学生の就職活動を調査するときに、大学進学以前の学生生活が与える影響を分析することは、政府や自治体の中学・高校における教育政策の効果を測定する上でも重要である。したがって、別の観点から、大学進学以前の学生生活が与える影響を考える必要がある。例えば、中学・高校の総合の時間で行なった社会科見学が学生に与える影響を考察することが案として挙げられる。また、家庭での会話が職業について考えを深めるか本稿では調査したが、近年小学生のなりたい職業に YouTuber が挙げられているように、テレビをはじめとしたメディアとの接し方を問うことも有益であると考えられる。

仮説2については、大学生が所属するコミュニティ(サークル、アルバイトなど)の持つ多様性と就活開始時期との関連性を検討した。分析の結果から、提示した質問の範囲内でコミュニティの多様性やOB・OGとのつながりが就職活動開始時期に影響を与えると言うことは難しい。しかし、就職活動を行う大学生にとってサークルの友人やアルバイト先の先輩などの人的つながりは情報を収集するのに重要であり、少なからず影響を与えるものだと考える。そして、この関連性を認めることが出来れば、大学生活における課外活動のさらなる重要性を示すことができる。そのためには、大学生が所属するコミュニティについてより詳細に問う必要がある。例えば、活動頻度はどのくらいかやメンバーとのつながりが強い方であるかどうかなどである。また、OB・OGについては交流の有無の他に、実際に就職活動に関する情報を聞いたことがあるかやOB・OGと進路の話をしたことがあるかなどが挙げられる。コミュニティの特性を問い、そのメンバーやOB・OGの影響力を測っていくことで仮説により近い結果を得られる可能性が高まると考えられる。

仮説3については、就活アプリの使用状況と志望する就職先が明確かどうかについて関連性を検討した。分析結果からみると、頻繁に就活アプリを使用した人が就職を希望する企業を決めるとは言えないことが分かった。しかしながら、モバイル・インターネットの発展に伴い、就活アプリの上で業界の動向、企業情報、就職活動体験などの利用が不可欠となっている。また、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、他人との接触機会も大幅に減少し、以前の就活情報を入手する方法が変わるかもしれないと考える。そして、就活アプリをはじめ、インターネットを通じて、就職活動に参加する動向を注目する必要がある。したがって、まずサンプルサイズの増加を工夫し、質問の聞き方も調整する必要がある。例えば、「encourageのような」という具体的なアプリの種類を指定しなく、ある程度曖昧にモバイルやインターネットの機能の使い方を問うこともより有力な結果を得ると考える。

以上、全体的な結論としてそれぞれの仮説の改善点を検討した。就職活動の開始時期はどのような要因に影響を受けるのかについて、それぞれ検討したい仮説を今回のものとは異なる観点から質問を考えることによって、有意な関連性を表すことができるよう、改善を試みる必要がある。

6.5 今後の課題

今後の課題として、一つ目にサンプルに含まれるケース数の増加が挙げられる。今回の調査では、就職活動に関する分析を学部生に向けて試みるため、学部卒から就職へと進路を選ぶ文系学部の学生から回答を集める必要があった。つまり、文系学部の4年生から十

分な量のサンプルを集める必要があった。集められたサンプルは全体が 153 名であるのに対し、文系学部の学生である文学部と経済学部の学生は 60 名である。しかしながら、60 名のうち多くは学部 2~3 年生であり、就活活動を開始している学生がほとんどいないことが問題であった。学部 3 年生になればインターンをはじめる学生も現れるが、調査時期が 6 月ということもあって、「就職活動の開始時期」として定義づけに用いられた自己分析ないし業界分析をはじめた時期に相当する学生から回答を得ることは難しかったと推察される。さらに、調査時期が 6 月であることを考えると、学部 4 年生の中には卒業要件に必要な単位を取り終えて講義を受講していない学生も多く、回答を集めることは難しいと推測される。以上をふまえると、今後就職活動をテーマに調査を行なうにあたって、回答者の多くが学部 2~3 年生から構成されるが、就職活動の開始時期を自己分析や業界分析の開始として位置づけたままでは十分なサンプルサイズを集めることが困難であることが推測される。

したがって、今後の調査において十分なサンプルサイズの確保という問題を解決するためには、「就職活動の開始時期」の定義づけを見直すことが挙げられる。例えば、自己分析や業界分析をはじめる前に就職活動に学生が関わる機会として、説明会やインターンシップの紹介といったイベントに参加し始めた時期を就活開始時期と定義づけるならば、そのような学生は学部 2~3 年生にも多く存在すると考えられるため、分析に耐えうる十分なサンプルサイズの確保が期待できる。そのほかに考えられる対策としては、調査の依頼数を増加することが挙げられる。本稿で行った調査では、文学部、経済学部、理学部、農学部で開講されている講義を通して調査を依頼したが、依頼数を増加することによっても改善が期待される。また、教育学部や法学部といった文系学部へ調査対象を拡大させることも同様に改善が期待できる。これらの対策を講じてサンプルに含まれるケース数を増加させることが、今後の課題として必要である。

二つ目に調査の設計の仕方が挙げられる。質問文の途中にて、回答者の回答で分岐する箇所があったが、これによって本当に聞きたい質問におけるサンプル数がさらに小さくなってしまった。前述の通りそもそも文系の学生が少なかった上に、調査の設計でさらにサンプル数を絞ってしまったので、本当に意味のあるデータを集めることができなかつた可能性がある。6.4 で述べたような質問文の改善に加え、調査書の構造についても変更が必要だと考えられる。

以上、本稿では東北大学生を対象に、就職活動の開始時期に影響を与える学生の特徴について調査を行なった。サンプルサイズや調査の設計上改善すべき点は認められるものの、より多くの学生が就職活動で望ましい結果を得るためにも、またその支援のためにも、学生の特徴が及ぼす影響について分析を行なう必要性は依然として残っている。今後の調査では、本稿で明らかになった点をもとに調査を改善することによって、就職活動の開始時期に影響を与える要因を明らかにすることが求められる。

引用文献

星野雄介, 2018, 「大学生の意識と就職活動開始のタイミング 第一報」

『武蔵野大学政治経済研究所年報』 16: 249-273.

内閣府, 2021, 『令和 3 年度学生の就職・採用活動開始時期等に関する調査報告書』.

下村英雄, 堀洋元, 2001, 『インターネット上の「就職サイト」利用が大学生の就職活動に与える影響』『日本教育心理学会第 43 回総会発表論文集』 460.

下村英雄, 堀洋元, 2004, 「大学生の就職活動における情報探索行動」

- 情報源の影響に関する検討」『社会心理学研究』20(2): 93-105.
- 浦上正則, 2015, 「中高校生時代のどのような生活経験が大学生の職業観に影響するのか」『南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編』10: 31-44.
- 矢崎裕美子, 斎藤和志, 高井次郎, 2007, 「就職に関する情報探索行動尺度の作成」『Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences)』54:127-134.
- 吉中淳・石井徹・下村英雄・高綱睦美・若松養亮, 2003, 「中学生・高校生の職業知識の広がりとは職業関心に関する研究」『進路指導研究』22(1): 1-12.

東北大生の容姿への関心についての調査

——自己評価との関連から——

赤城みう・松浦和貴・村上愛理

1. 研究関心と先行研究

大学生になると周りの環境が大きく変化し、その変化にともなって生活や関心、価値観などにも様々な変化が現れることが考えられる。

その例として、容姿への関心の高まりが挙げられる。大学では身だしなみに関する校則がなくなり、自由度が高くなることが一般的である。髪の毛のセットや化粧をする機会が増え、これまでより一層容姿が自分のアイデンティティを表現するものになる。すなわち、身だしなみが社会生活を営む上で重要な要素に変化すると言える。

また、大学では様々な価値観を持つ人との関わりが増え、それに伴って自分自身を見つめる機会が増える。さらには、高校までと異なり、偏差値や順位といった数値で評価される機会も少なくなるため、自分で自分自身を評価する機会が増えると考えられる。

平松(2008)は、大学生を対象に質問紙調査を行うことで、『自己価値』の形成要因としての自己認知について『容姿』が最も高い影響力をもっていることを明らかにした。これは性別や年齢に関わらないという結果となっている。これを踏まえると、自己評価に関しては容姿が最も強い影響を与えていると言えるだろう。また、第8回世界青年意識調査(内閣府,2009)によると、「日本の青年の現在の悩みや心配ごと」という項目において、「容姿のこと」と回答した者の割合は、2004年の第7回調査より高くなっている(第7回:6.3%→第8回:11.1%)。この結果から、大学生を含む現代の青年における、容姿への関心はますます高まってきていることがうかがえる。

そこで本稿では、自己評価と容姿への関心について分析することで、容姿への気配りが自己評価にどのように影響しているのかということについて理解し、自己評価を左右する要因としての容姿の存在について考察する。また、東北大生が自らの容姿についてどの程度関心をもっているのかということに関して、容姿にまつわる様々な行動に基づく分析を行うことで、東北大生の容姿に関する捉え方をより総合的に把握することを目指した。

ただし留意点として、容姿への関心や自己評価は、性別や学部の文理の影響を受ける可能性がある。Clifford(1971)は、女性は男性に比べて自分自身や自分の身体に対して不満を持っていることを指摘している。また、山本(2010)によると、大学生において、全体的自己価値について、男子と比較して女子は否定的に評価していることが明らかになっている。そのため、性別や学部の分離の影響を考慮して分析を行う。

また、本稿において「容姿」とは、先天的・遺伝的な要素を含むものではなく、身だしなみやファッションなど、自分の意識次第で変えることが可能な範囲を指すこととする。

2. 分析にあたって

2.1 仮説

仮説1: 容姿に気を使った行動をとっている人ほど、自己評価が高い。

仮説2: 性別が、容姿に気を使った行動と自己評価に影響を及ぼしている。

仮説3: 文系学部か理系学部かという違いが、容姿に気を使った行動に影響を及ぼしている。

平松(2008)は、自己評価に関して容姿が最も強い影響を与えているという結果を表している。この先行研究における「容姿」とは、「自分の姿が今と違うといいのと思う」、「自分の姿に満足している」、「自分はハンサム・美人だと思う」など、自分の容姿に関

する主観的な好ましきによって構成された変数であった。しかし、この研究では容姿に気を使った行動が自己評価に与えている影響については言及されていない。

そこで本研究では、美容院に行く頻度や準備にかかる時間など、容姿に気を使った行動をどれくらいとっているかという点に着目し、主観的な好ましきではなく、容姿への努力が自己評価に影響を与えているのかについて、仮説1として分析する。

また、一般に化粧をするかどうかや身支度にかかる時間には性差があると考えられる。そのため、仮説2として性別を統制変数として考え、性別の影響を排除した上で、容姿に気を使った行動をとっている人ほど自己評価が高いという仮説について検証する。

仮説3では、文系学生と理系学生では容姿に気を使っている程度が異なるのではないかという予測のもと、文理によって容姿に気を使った行動に差が出るのかということについて分析する。また、文理には性別が大きく関係しているため、性別を交絡変数として考えて媒介分析を行うことで、性別の影響を取り除いた状態で、文理が容姿への気を使った行動にどのくらい影響を与えるかについて分析する。

2.2 変数の説明

〈容姿行動〉

美容院に行く頻度

q30「あなたはどのくらいの期間に1度、美容院または理容室を利用しますか」という質問に対し、3週間未満、3～5週間未満、5～8週間未満、8～12週間未満、12週間～半年未満、半年以上・または行かないという6つのカテゴリで調査した。

美容室へ行き散髪をしたり髪を染めたりすることは、理想の髪型に近づくための行動であるので、容姿に気を使った行動として変数群に含めた。

身支度にかかる時間

q31_1「あなたは授業だけがある場合、どれほど身支度(メイク、ヘアメイク、服選び)に時間をかけますか」、q31_2「あなたは大人数での食事会に行く場合、どれほど身支度(メイク、ヘアメイク、服選び)に時間をかけますか」という質問に対し、それぞれ5分未満、5～15分未満、15～30分未満、30～60分未満、60～90分未満、90分以上という6つのカテゴリで調査した。

身支度に時間をかければかけるほど、服装やメイクに強いこだわりを持っていると言えるので、容姿に気を使った行動として変数群に含めた。また、シチュエーションによっては身支度にかかる時間が異なるだろうとの考えから、条件を設定することでばらつきが大きくなることを防いだ。

マスクを購入する際のこだわり

q32「以下のマスクの見た目に関する項目のうち、あなたがマスクを購入する際にこだわる点をすべて選んでください」という質問に対し、色、形、素材、大きさ、あてはまるものはない、その他の6つのカテゴリで調査し、色、形、素材、大きさ以外の項目は欠損値とした。

コロナ禍においてマスクは日常に欠かせないものとなっており、今やファッションの一部であると言えるので、容姿に気を使った行動として変数群に含めた。特に、マスクの色と形にこだわってマスクを選択することは、容姿への気配りとして捉えられるだろう。

半年間で購入した服の数

q33「冬シーズンを含む半年間で平均して何着ほど服(トップス、ボトムス、アウターのみを含める)を購入しますか」という質問に対し、0着、1～2着、3～4着、5～7着、8着以上という5つのカテゴリで調査した。

購入した服が多いほど、服装のコーディネートや流行に注意を払っていることが予測されるので、容姿に気を使った行動として変数群に含めた。また、季節によって購入する服の数が異なると考えられるので、冬シーズンという限定を設けた。

半年間で購入したコスメの数

q34「半年間で平均して何点ほどコスメを購入しますか」という質問に対し、0点、1~3点、4~6点、7~10点、11点以上という5つのカテゴリで調査した。

コスメは主に顔を理想に近づけるための製品であるので、容姿に気を使った行動として変数群に含めた。

過去1ヶ月で使用したスキンケア商品

q35「過去1ヶ月の間にスキンケアとして使ったことがあるものをすべて選んでください」という質問に対し、導入液、化粧水、パック、乳液・クリーム、オールインワン、あてはまるものはないという6つのカテゴリで調査し、あてはまるものはないという選択肢は欠損値とした。

スキンケアは肌のコンディションを整えるための製品であるので、容姿に気を使った行動として変数群に含めた。

これらの容姿に気を使った行動の変数群（以下、容姿行動の変数とする）の基本統計量を表1にまとめた。

表 1 容姿に気がつかった行動の変数群の基本統計量

変数名	有効度数 (人)	項目	度数	%
美容院に行く頻度	157	3週間未満	1	0.64
		3~5週間未満	24	15.29
		5~8週間未満	34	21.66
		8~12週間未満	49	31.21
		12~半年未満	37	23.57
		半年以上、または行かない	12	7.64
身支度にかかる時間 (授業だけがある場合)	157	5分未満	50	31.85
		5~15分未満	53	33.76
		15~30分未満	34	21.66
		30~60分未満	18	11.46
		60~90分未満	2	1.27
		90分以上	0	0.00
身支度にかかる時間 (大人数での食事会に行く場合)	156	5分未満	33	21.15
		5~15分未満	39	25.00
		15~30分未満	44	28.21
		30~60分未満	33	21.15
		60~90分未満	5	3.21
		90分以上	2	1.28
マスクを購入する際のこだわり (複数選択)	155	色	73	47.10
		形	64	41.29
		素材	81	52.26
		大きさ	93	60.00
半年間で購入した服の数	157	0着	11	7.01
		1~2着	51	32.48
		3~4着	50	31.85
		5~7着	33	21.02
		8着以上	12	7.64
半年間で購入したコスメの数	156	0点	69	44.23
		1~3点	56	35.90
		4~6点	24	15.38
		7~10点	6	3.85
		11点以上	1	0.64
過去1ヶ月で使用した スキンケア用品 (複数選択)	156	導入液	12	7.69
		化粧水	95	60.90
		パック	29	18.59
		乳液、クリーム	87	55.77
		オールインワン	19	12.18

これらの変数について、各設問ごとに容姿に気を使っているといえる項目が点数が高くなるように1点から5点、または6点の点数をつけた。q32のマスクについての質問は「色」と「形」の選択肢が他の選択肢よりも容姿への意識が強いと判断し、各1.5点とした。他の選択肢を1点とすることで、選択肢間に傾斜をかけた。q35のスキンケア用品についての質問は、各選択肢1点とした。次に、各設問の選択肢の数が異なっていたため、それぞれ標準化の操作を行った。点数が高いほど、容姿に気を使っているということになるようにした(美容院に行く頻度についての質問のみ選択肢の順番が早い方が点数が高くなるようにした)。その後、全ての質問の点数を標準化し、足し合わせる作業を行った。7つの質問について信頼性係数が $\alpha = 0.776$ だったため、内的整合性があると判断し7つの

質問項目を足し合わせ、容姿行動得点とした。図1のヒストグラムがその分布を示している。

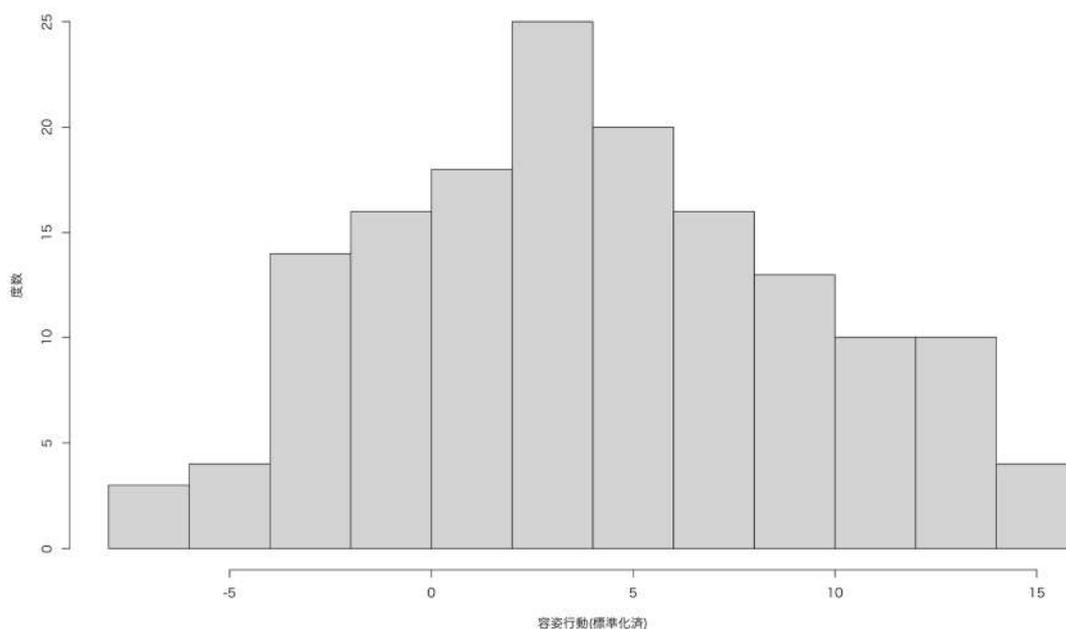


図1 標準化した容姿行動の変数のヒストグラム

〈自己評価〉

q55_1「自分はコミュニケーション能力が高い方だ」、q55_2「自分の容姿に自信がある方だ」、q55_4「自分は周囲の人に好かれやすい」という質問に対して、そう思う、どちらかといえばそう思う、どちらかといえばそう思わない、そう思わない、という4カテゴリで調査した。

自らのコミュニケーション能力や周囲の人に好かれているかどうかを評価することは、自己評価の変数群として相応しいと考えられる。また、容姿行動とは別に自分の容姿に自信があるかどうかを質問に含め、客観的に評価できる容姿行動の変数のみならず、主観的な自分の容姿への自信の程度についても調査を行った。

そう思うを4、そう思わないを1として、3つの回答の合成得点を作成した。信頼係数は $\alpha=0.721$ であったため内的整合性があると判断し、3つの質問項目を足し合わせた。その後、平均を取って自己評価得点を作成した。記述統計量は以下の通りである。

表2 自己評価の変数に関する基本統計量

変数名	有効度数 (人)	項目	度数	%
自分はコミュニケーション能力が高い方だ	157	そう思う	22	14.01
		どちらかといえばそう思う	47	29.94
		どちらかといえばそう思わない	47	29.94
		そう思わない	41	26.11
自分の容姿に自信がある方だ	156	そう思う	10	6.41
		どちらかといえばそう思う	29	18.59
		どちらかといえばそう思わない	72	46.15
		そう思わない	45	28.85
自分は周囲の人に好かれやすい	156	そう思う	10	6.41
		どちらかといえばそう思う	67	42.95
		どちらかといえばそう思わない	52	33.33
		そう思わない	27	17.31

〈性別・学部〉

q01「あなたの性別をお答えください」という質問において、男性、女性、その他というカテゴリで調査を行い、その他は欠損値とした。また、q04「あなたの所属学部を教えてください」という質問において文学部、経済学部、理学部、農学部というカテゴリで調査を行った。学部を文系と理系に分けて基本統計量を示すと、文系は 62 (39.49%)、理系は 95 (60.51%) となる。

表3 性別と学部の基本統計量

変数名	有効度数 (人)	項目	度数	%
性別	151	女性	101	66.89
		男性	50	33.11
学部	157	文学部	30	19.11
		経済学部	32	20.38
		理学部	79	50.32
		農学部	16	10.19

2.3 分析方法

仮説1：容姿行動得点を独立変数、自己評価得点を従属変数として単回帰分析を行う。

仮説2：性別を統制し、容姿行動得点を独立変数、自己評価得点を従属変数として単回帰分析を行う。

仮説3：文理を独立変数、容姿行動得点を従属変数として単回帰分析を行う。その後、性別を統制し、分析を行う。

3. 結果

3.1 仮説1

容姿行動と自己評価についての単回帰分析を行った。その結果を表4に示す。

表 4 容姿行動得点を独立変数、自己評価得点を従属変数とする単回帰分析

	係数	標準誤差
容姿に気を使った行動	0.1505***	0.0408
切片	1.7896***	0.1333
調整済みR2乗	0.0776	
N	153	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

容姿行動得点が1点上がると自己評価得点が0.15点上がり、容姿に気を使った行動を取っている方が自己評価が高いということが0.1%水準で有意に認められた。ゆえに、仮説が支持されたと言える。

3.2 仮説 2

仮説 1 の結果を受けて、性別を統制する。

表 5 性別を独立変数、容姿行動得点を従属変数とした回帰分析

	係数	標準誤差
性別(基準：男性)	1.7386 ***	0.2015
切片	0.6429 *	0.2864
調整済みR2乗	0.3348	
N	153	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

表 6 容姿行動得点と性別を独立変数、自己評価得点を従属変数とした回帰分析

	係数	標準誤差
容姿に気を使った行動	0.1489 **	0.0512
性別(基準：男性)	0.0501	0.1528
切片	1.7361 ***	0.1805
調整済みR2乗	0.0787	
N	153	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001



図 2 容姿行動得点と自己評価得点の関係性

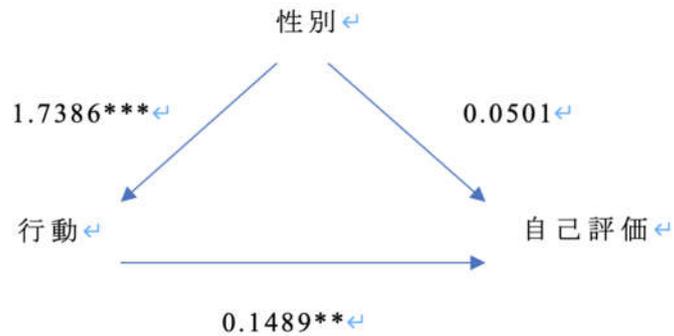


図3 性別を統制変数とした際の容姿行動得点と自己評価得点の関係性

表5、表6から、図3が導かれた。図3より、容姿行動得点と性別には関連があるが、自己評価得点と性別には関連がなかったことが分かる。よって、容姿に気を使った行動と自己評価の関連について、性別は影響を及ぼさないとと言える。

3.3 仮説3

文理と容姿行動得点についての単回帰分析を行った。その結果を表7に示す。

表7 文理を独立変数、容姿行動得点を従属変数とした回帰分析

	係数	標準誤差
文理(基準：文系)	-0.6324 **	0.2289
切片	3.9931 ***	0.3833
調整済みR2乗	0.0418	
N	153	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

文系を基準として、理系の方が容姿に気を使った行動を行わない傾向があるということが1%水準で有意に認められた。

ここで、文理によって学部の性別構成割合が異なる傾向があることから、性別を統制変数として分析を行う。

表8 文理を独立変数、性別を従属変数とした回帰分析

	係数	標準誤差
文理(基準：文系)	-0.1596 *	0.0775
切片	1.5858 ***	0.1294
調整済みR2乗	0.0212	
N	153	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

表 9 文理、性別を独立変数、容姿行動を従属変数とした回帰分析

	係数	標準誤差
文理(基準：文系)	-0.3446 .	0.1954
性別(基準：男性)	1.6801 ***	0.2027
切片	1.2697 **	0.4552
調整済みR2乗	0.3443	
N	153	

tp < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

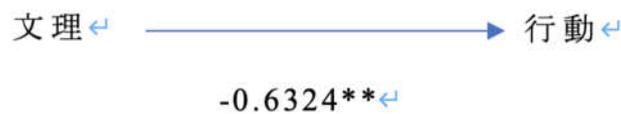


図 4 文理と容姿行動得点の関係性

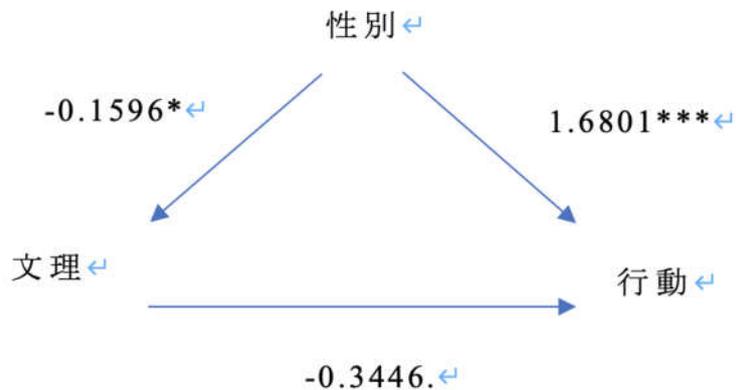


図 5 性別を統制変数とした際の文理と容姿行動得点の関係性

性別の影響を文理と容姿行動得点の関係性から除いた際に、文系を基準として、理系の方が容姿に気を使った行動を行わない傾向があるということが 10%水準で有意に認められた。

4. 結論と課題

容姿に気を使った行動を取っている人ほど、自己評価が高いことが分析結果から得られた。容姿は他人から見られる部分であるため、他人に自分をどう見せるかを追求することであるとも言える。また、服装や髪型、化粧は自己表現の手段の一つでもある。これらのことから、自らの容姿を理想に近づけるために時間やお金を割くことで、コミュニケーション能力や周囲からの評価に自信を持つことができるのだと考えられる。本稿では、容姿を磨くための行動に注目することで、実際の行動が自己評価の向上に繋がっていることを

明らかにすることができた。

これらの結果から、容姿や身だしなみに対して努力をすることで、自分を高く評価することができると言えるだろう。自己評価が高い方が充実した生活を送ることができることを考えると、容姿を磨くことは充実した生活につながるかもしれない。ただし、容姿を磨くことは、充実した生活を送るための一要因でしかないということには留意する必要がある。持って生まれた見た目を否定するのではなく、あくまでも自己評価向上の手段として化粧やファッションなどを楽しむことが重要であると言える。

性別を統制した際に、容姿行動には関連性が見られた一方、自己評価には関連性が見られなかった。

性別と容姿行動に関連性が見られたことは、行動と関心という違いはあるものの、Clifford(1971)の性別間で容姿に対する関心や不満に差があるという研究結果を裏付けることになった。

また、性別という要因によって自己評価に有意な差は見られなかったことは、山本(2010)の研究と異なる結果である。この理由として、対象とした大学の違いが挙げられる。山本(2010)は愛知県内の私立大学4大学を調査対象としている一方、本調査では東北大学を対象としている。この違いによる結果に関連する可能性が高いこととして、東北大学の女子学生は、性別が原因となり、家庭や学力面で困難に直面した経験が少ない傾向にあることが考えられる。

また、文系学生と理系学生で容姿に気を使った行動について差が生じた理由として、学問として扱う対象が異なることが考えられる。文系学生は人に関する事象を扱うため他者や人間関係により強い関心をもっており、そのことが容姿という他人から見られる部分に気を使うことにつながっているのではないだろうか。

本稿の課題は主に2つ挙げられる。1つ目は、容姿行動の変数群の中で自己評価得点との関連の強弱を変数ごとに分析できなかった点である。容姿行動の変数によっては、自己評価得点との関連が他の変数よりも強いものや弱いものがあつた可能性がある。2つ目は、容姿に気を使った行動よりも、より自己評価に影響を及ぼしている変数が存在する可能性がある点である。本稿では容姿に気を使った行動に注目をしたが、2変数に影響を及ぼしている他の変数があつた可能性は否めない。例としては、経済的余裕、成績、出身地等の変数が考えられる。

引用文献

Edward Clifford, 1971, 「Body Satisfaction in adolescence」 perceptual and motor skills, 33, 119-125,(2022年7月20日取得,

<https://journals.sagepub.com/doi/pdf/10.2466/pms.1971.33.1.119>)

内閣府, 2009, 「第8回世界青年意識調査」, 内閣府ホームページ, (2022年7月20日取得,<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/mokuji.html>)

平松隆円, 2008, 「SPPCモデルによる大学生の自己概念の検討」, (2022年7月20日取得, <https://archives.bukkyo-u.ac.jp/rp-contents/DO/0036/DO00360L077.pdf>)

山本ちか, 2010, 「大学生の全体的自己価値の検討」, (2022年7月20日取得, https://www.jstage.jst.go.jp/article/nbukiyou/10/0/10_KJ00006080819/_pdf)

東北大生の社会意識

——結婚意欲・友人関係の自己効力感・自己責任論の選好に着目して——

森坂太一・門間晴風・汪寧

1. はじめに

本稿では東北大学の学生の社会意識について記述する。対象となる社会意識は、結婚意欲、友人関係における自己効力感、自己責任論の選好の3つである。

3つの対象について、ややまとまりのなさも感じられるだろうが、そもそも社会意識論は特定の対象を分析するという制約は課されていない(吉川, 1996)。社会意識論は、社会学の各領域¹で研究されていることに作用している社会意識を、社会学的要因で検討することを目的としている(吉川, 2014)。本章で扱う社会意識は、以下に示す通りそれぞれが社会的な意義を有しており、社会調査によって検討するに値する。

結婚意欲については、晩婚化が進む日本社会において、結婚意欲の実態を把握するという点で意義がある。特に本調査は、高学歴者を対象としたものであるため、社会の中で活躍する可能性が高い人々の結婚に関する意識を知ることができる。このことはライフ・ワークバランスや働き方改革といった昨今社会問題視されている文脈にも援用可能な情報だ。

友人関係の自己効力感については、コミュニケーション力が重視される現代において、何をする際にも重要な資本となりうる。そこで、どのような友人関係を築いている人が、自己効力感を高く持つ傾向にあるのかを示すことで、よりよいコミュニケーションを育む知見が得られると考える。

自己責任論については、エリート大学の一つである東北大学の学生がどのようにとらえているのか、といったことを明らかにすることに意義がある。これまで自己責任論は高学歴者や高所得者、ホワイトカラー層が好むイデオロギーであるとされてきた。しかし、学校歴まで踏み込んで分析している研究は行われていない。今後より高い階層に位置づけられるであろう、東北大学の学生が自己責任という価値観をどのようにとらえているのか、といったことを明らかにすることで、将来の高階層に共有されるイデオロギーを予測することができる。

以下では結婚意欲、友人関係の自己効力感、自己責任論の選好について順にまとめる。それぞれの対象に対して、課題設定、分析方法、分析結果、考察を示す。

本章の最後には、3つの社会意識を分析した結果を再確認した上で、東北大学の学生の社会意識についてまとめたい。

2. 結婚意欲

2.1 研究関心

近年晩婚化に対して、若年世代の結婚に関する研究が多く見られる。ここで本節では高学歴者に注目したい。特に難関大学に在籍する女性のキャリアは、これまでの主婦を前提とした女性のキャリアとは異なる。このとき、これまでの結婚観とは異なるものになっていることが予想される。

そこで本節では、「高学歴である若年者は、結婚に対してどのような意見を持つのか」といった問いを設定する。さらに「結婚意欲に影響を与える要因」も検証したい。

2.2 先行研究

2.2.1 自己肯定感と結婚意欲

中谷(2018)によると、親しい友人を多く持つほど、結婚意欲が高まる。社交的な性格を持つ人はより良好な人間関係を築くことができ、結婚意欲が高くなると考察されている。

¹ 家族社会学や政治社会学、環境社会学など、様々な領域を含む

2.2.2 出身と結婚意欲

佐々木（2016）によると、日本では性別を問わず非正規雇用者は正規雇用者と比べて、結婚時期がより遅く、結婚率もより低いという結果が発見された。非正規労働者は、所得の低さと雇用の不安定さを持つため、婚活市場に不利な状況になることが要因だ。中谷（2018）も男女を問わず自身の経済的な安定と結婚意欲の高さに繋がりががあると提示した。しかし今回の調査対象は収入が少ない学生であるため、出身家庭の豊かさが個人の結婚意欲にどんな影響を与えるのか検証する。

2.3 仮説

仮説 1：東北大学の学生は自己肯定感が高くなると結婚意欲が高まる

仮説 2：東北大学の学生は出身家庭が豊かになると結婚意欲が高まる

2.4 分析方法

2.4.1 分析に用いる変数

本節では、調査により得られたデータを用いて作成した変数を用いた。以下、それらの変数の概要・作成方法・項目を記す。

表 2-1 変数の説明

変数	備考
性別	男性を 0、女性を 1 としたダミー変数
年齢	回答者の年齢
学部	経済学部・文学部を「文系」、理学部・農学部を「理系」とした離散変数
自分はダメだと思う	問 54-4 「自分はダメな人間だと思うことがある」という問いに対して、「あてはまる」を 5、「どちらかというにあてはまる」を 4、「どちらともいえない」を 3、「あまりあてはまらない」を 2、「あてはまらない」を 1 とするダミー変数
自分は好かれやすいと思う	問 55-4 「自分は周囲の人に好かれやすい」という問いに対して、「あてはまる」を 5、「どちらかというにあてはまる」を 4、「どちらともいえない」を 3、「あまりあてはまらない」を 2、「あてはまらない」を 1 とするダミー変数
世帯収入	問 52 「あなたのご家庭の最近 1 年間の所得はおよそいくらですか。」の質問項目の中央値から作成。300~500 万円未満は 400、500~700 万円未満は 600 という具合である。なお 300 万未満は 300、1500 万円以上は 1500 である
父の学歴	問 49 「あなたのお父さんが最後に行かれた学校は次のうちどれにあてはまりますか。」という問いに対して、大卒は 1、それ以外は 0 とするダミー変数
母の学歴	問 50 「あなたのお母さんが最後に行かれた学校は次のうちどれにあてはまりますか。」という問いに対して、大卒は 1、それ以外は 0 とするダミー変数
性別 x 母の学歴	性別によって母の学歴の効果が異なるかを検証する変数

2.4.2 分析枠組み

結婚意欲を従属変数に、統制変数と自己肯定感、世代収入、親の学歴を独立変数として二項ロジスティック回帰分析を行う。なお、仮説を検証するために以下の通り段階的に変数を投入する。

モデル1：統制変数のみを投入する。

モデル2：モデル1と自己肯定感変数1、2を投入。

モデル3：モデル2と世代収入、親の学歴を投入。

モデル4：モデル3に加えて、母の学歴の交互作用効果を投入する。

2.5 結果

2.5.1 記述統計量

変数	カテゴリ	度数	%
性別	男性	101	64.3
	女性	50	31.8
	その他	3	1.9
	無回答	3	1.9
	合計	157	100
学部	文学部	30	19.1
	経済学部	32	20.4
	理学部	79	50.3
	農学部	16	10.2
	合計	157	100
年齢	18歳	28	17.83
	19歳	22	14.01
	20歳	61	38.85
	21歳	29	18.47
	22歳	9	5.73
	23歳	4	2.55
	24歳	1	0.64
	25歳	3	1.91
	合計	157	100
結婚意欲	そう思う	41	26.11

	どちらかといえばそう 思う	39	24.84
	どちらとも言えない	39	24.84
	どちらかといえばそう 思わない	23	14.65
	そう思わない	15	9.55
	合計	157	100
自分はダメだと思う	あてはまる	54	34.39
	少しあてはまる	55	35.03
	どちらとも言えない	23	14.65
	あまりあてはまらない	16	10.19
	あてはまらない	9	5.73
	合計	157	100
自分は好かれやすいだと思う	あてはまる	10	6.37
	少しあてはまる	67	42.68
	どちらとも言えない	52	33.12
	あまりあてはまらない	27	17.20
	あてはまらない	1	0.64
	合計	157	100

2.5 分析結果

まず仮説 1 について、モデル 2 の自己肯定感変数 2 は 1%水準で正の有意な結果が見られた。つまり、自分は周囲に好かれやすいと思う人は将来結婚対象と良好な夫婦関係を築くことに自信を持ち、結婚に対する意欲も高い。これは先行研究で述べた、親しい友人を持つと結婚意欲に正の影響を与えるということと一致している。更に、有意な結果ではないが、自己肯定感変数 1 から見ると自分はダメだと思うほど結婚に負の影響を与えることが見られる。ここからもある程度、大きな目で見ると、自己肯定感と結婚意欲に関連があることを説明できる。

次に仮説 2 について、出身家庭と結婚意欲の関連性を検証するため、世代収入と親の学歴変数を投入し、モデル 3 を作成した。モデル 3 から見ると母親の学歴が子供の結婚意欲に 5%水準で有意な影響を与えている。更にモデル 2 と比べて、母親の学歴を投入することによって自己肯定感変数 2 は相関を持ちながら、係数は 0.650 から 0.945 に増えた。これは母の学歴は直接子供の結婚意欲に影響を与えていると同時に、子供の性格にも間接的な影響を与え、結果として子供の結婚意欲を上げると考える。

更に性別によって母の学歴の効果を見るために交互作用ダミーを投入しモデル 4 を作成した結果、交互作用ダミーで有意な結果が見えなかった。しかし交互作用を投入することによって母の学歴と結婚意欲の相関がなくなり、母の学歴の結婚意欲への効果は、性別が入ることで過大評価される可能性があると考えられる。

仮説以外に、今回の分析では年齢が高いほど結婚意欲が下がる結果も見られる。モデル1から見ると年齢と結婚意欲はまったく相関がないが、モデル2、4ではわずかな相関を持ち、モデル3では自己肯定感変数と出身変数を投入すると5%水準で有意な負の効果が見られる。

表 2-2 結婚意欲に関する二項ロジスティック分析

	モデル1		モデル2		モデル3		モデル4	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
切片	0.664	0.543	-0.172	1.011	-0.541	1.660	-0.263	1.691
年齢	-0.332	0.222	-0.421	0.235	-0.711 *	0.334	-0.627	0.344
学部 (ref : 文)	-0.234	0.358	-0.405	0.378	-0.238	0.513	-0.242	0.520
性別 (ref : 男)	0.573	0.361	0.349	0.378	-0.056	0.532	-0.744	0.701
自己肯定感変数1			-0.106	0.152	-0.106	0.219	-0.158	0.226
自己肯定感変数2			0.650 *	0.223	0.945 *	0.317	0.974 *	0.325
世帯収入					0.000	0.001	-0.001	0.001
父の学歴					0.344	0.575	0.414	0.585
母の学歴					1.142 *	0.525	0.561	0.636
性別 x 母の学歴							1.858	1.203
McFadden	0.025		0.076		0.193		0.213	
N	157		157		157		157	

*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05, . p<0.1

2.6 考察

結婚は人生の重要な段階として、高学歴者の結婚意欲と選択に関する研究からは、彼らのキャリア・ライフが垣間見られるだろう。今回の分析では、高学歴者としての東北大学生の結婚意欲はわずかに強い方に偏り、「どちらとも言えない」人数は四分の一を占めることになる。今回の研究対象になる東北大学の生徒にとっては結婚はまだ先のこととしてあまり考えていない、もしくは結婚に対する興味はそれほど強くないと考えられる。先行研究における、高学歴者は結婚に対してあまり興味がないという結論が、今回の分析で再

び検証された。

また、今回の分析では、結婚意欲と個人の性格が強く関連していることが検証された。明るくて自信を持つ人は日常生活で良い人間関係を築くことができ、将来の結婚生活に対してより楽観的になれる。この結果は今後の学校教育や社会教育の参考になると考える。

更に、結婚意欲は母親の学歴との関連が見られた。日本家庭における母親は大抵子育ての役目を務め、子供の性格や振る舞いは母親の影響を受けやすい。母親が高学歴者なら子供の教育方法を重視し、より良い家庭環境を提供できるだろう。そして良い家庭環境と子供の性格にもよい影響を与え、結果として子供の結婚意欲に影響することになるのではないかと考えた。

3. 友人関係の自己効力感

3.1 研究関心

本節の目的は、友人関係を自分の努力で改善できると考える「友人関係の自己効力感」を高く持つ人は、どのような特徴を持つのかを、築いている友人関係に着目して明らかにすることである。

誰もが生活する上で、他者とコミュニケーションをはかり、協力して何かに取り組む。日本経済団体連合会のアンケート調査によると、採用の観点で大卒者に特に期待する資質として、76.9%の企業が「チームワーク・リーダーシップ・協調性」を挙げた(日本経済団体連合会 2022)。人間関係ではそれぞれの意見が対立するなど円滑に行かない場合必ずあるだろう。特に、同質な価値観を持つ傾向にある親族というコミュニティではなく、異なるバックグラウンドをもって育った親族以外の他者(以下、友人と呼ぶ)とコミュニケーションを図るにあたってそのような場面は増えると考えられる。そこで、関係性を自分の努力で改善できると考えること(以下、友人関係の自己効力感と呼ぶ)は、コミュニケーションを図るにあたって重要な要素であると考えられる。考え方や性格の異なる他者と意見をまとめて共同するにあたって、対立を避けて同調するだけのコミュニケーションをとったり、諦めから関係性を絶ってしまえば、発展的な考えは生まれず良い関係を築くことも難しいであろう。考え方や性格が違う場合に、その人間関係を改善できるという考えを持つことで、初めて行動に移すことができ、実際に改善できる可能性が生まれる。それゆえ、人とぶつかり、交わることを避けられない社会において、友人関係の自己効力感を持つことは、人間関係を改善させ、価値観の異なる他者同士の交流を促進することで、新たなアイデアの創出などにも寄与する重要な鍵であると考えられる。

内田・遠藤・柴内(2012)において、「身近な人間関係」に限定してはいるが、人間関係の質と幸福度に正の相関がみられた。一方、友人の数は幸福度への影響が見られなかった。この知見を参考にし、友人関係を関係性の深さの違いで分類した場合、その違いが友人関係の自己効力感にどう影響するのかを分析してゆく。

どのような友人関係を築いている人が友人関係の自己効力感が高いのかを知ることは、コミュニケーションがより重要視されている現代において、関係性をよりよくするための重要な知見を得ることにつながると考える。

3.2 先行研究

内田・遠藤・柴内(2012)において、身近な人間関係を想定した場合、人生の満足感や人間関係の数は関係していないが、質とは正の関連がみられることが分かった。ここにおいて、「質」とは、主体が関係しているグループの親しさ、一緒にいるときの感情等から構成されたものである。一方、より一般的な人間関係に拡張した場合は、質のみではなく、数にも正の関連がみられた。

本節で定義する友人関係の自己効力感がどのような要素と関連が深いのかについて、陳(2011)では、ストレスフルな人間関係に対して、その関係を積極的に改善、維持しようとする方略である「ポジティブ関係コーピング」は、「対人スキルへの自信」、「友人からの信頼」という要素が正の影響を与えていることが分かった。「対人スキルへの自信」

は友だちの数が多いことと親友の数が多いことの双方に影響するように思われる一方、「友人からの信頼」を得ていることを感じる関係性は、深い友人関係において育まれるものだと考える。

3.3 仮説

深い友人関係を築いている人ほど、人生の満足度が高いという結果が得られたことは3.2. 先行研究で述べたとおりである。友人関係において、意見の衝突やトラブルなどが起こった場合、それを自分の努力で改善できるという自己効力感は、友人関係を肯定的にとらえていると解釈できる。そのポジティブな志向は、人生に対するポジティブな志向と親和性が高いのではないかと考える。加えて、陳（2011）にあるように、「ポジティブ関係コーピング」は深い友人関係を築いていることと関係が深いのではないかと予測した。そのため、本節における仮説は以下のように設定する。

仮説： 深い友人関係を築いている人ほど友人関係に対して自己効力感を抱く。

3.4 分析方法

3.4.1 分析に用いる変数

ここにおいて、分析に用いる変数を調査で得られたデータからどのように加工したかを説明する。

まず、統制変数についてだ。性別は、男性を0、女性を1としたダミー変数とした。学年は学部1~4年生はその学年をそのまま変数とし、大学院生は5とした。学部は経済学部・文学部を「文系」、理学部・農学部を「理系」とした。

次に、モデル1で用いた変数について説明する。自己効力感ダミーは、「人間関係(親族との関係を除く)が円滑にいかない場合、自分の努力で改善できると思いますか」という問いに対して、「そう思う」・「どちらかといえばそう思いとを1、「そう思わない」・「どちらかといえばそう思わない」・「どちらともいえない」を0として作成した。友だちの数は、「あなたがLINEでプライベートな話をする親族以外の人は1週間あたりどのくらいですか」という問いに対して、0人を1、1~5人を2、6人以上を3として作成した。親友の数は、「あなたには大きな悩みや不安を相談できる人が、親族を除いて何人いますか。」という問いに対して、0人を1、1人を2、2人を3、3人を4、4人以上を5として作成した。ここにおいて、質問文の対象となる人物は友人ではない場合もありうるが、大学生の人間関係としては友人であることが多いと考え、本節では「親友」と定義づける。

最後に、モデル2で独立変数とした2つの変数について説明する。部活ダミーは、部活に入っている場合を1、入っていない場合を0とし、サークルダミーはサークルに入っている場合を1、入っていない場合を0として作成した。

表 3-1 変数の説明

変数	備考
自己効力感ダミー	問 39 「人間関係を自分の努力で改善できるか」という問いに対して、「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」を1、「そう思わない」・「どちらかといえばそう思わない」・「どちらともいえない」を0とするダミー変数
友だちの数	問 37 「1週間において、LINEでプライベートな話をする親族以外の人」を尋ねる問いに対して、0人を1、1~5人を2、6人以上を3とした連続変数
親友の数	問 38 「悩み等を相談できる親しい友人の数」を尋ねる問いに対して、0人を1、1人を2、2人を3、3人を4、4人以上を5とした連続変数
性別	男性を0、女性を1としたダミー変数

学年	学部 1~4 年までを 1~4、大学院生を 5 とした連続変数
学部	経済学部・文学部を「文系」、理学部・農学部を「理系」とした離散変数
部活	部活に入っている場合を 1、入っていない場合を 0 としたダミー変数
サークル	サークルに入っている場合を 1、入っていない場合を 0 としたダミー変数

次に記述統計量である。

最初に統制変数について、その分布を見ていく。性別は男性が 64.3%、女性が 31.8%と男性の方が女性よりも 2 倍近く多くなっている。学部は、文系学部が合計 39.5%、理系学部が合計 60.5%と理系学部の割合が高い構成となっている。学年は、学部 3 年が 6 割近くを占めており、学部 4 年以上はごく少数となっている。

次に、モデル 1、2 で使用した変数について見る。自己効力感「ややそう思う」が 4 割近くで一番割合が多くなっている。自己効力感が低い度合いを x 軸にとった際に、以下の図 3-1 のように、対数正規分布の様相をした分布となった。友だちの数は、1~5 人が 64.3%と最も多く、人数の多さを x 軸に取った際に、自己効力感と同様、対数正規分布の様相をした分布になる。親友の数は 2 人が 25.5%と最も多いが、0 人も 24.2%と多い。5 人以上も 15.3%であることから、ばらつきが大きいといえる。最後に、部活・サークル所属であるが、どちらにも所属している人は 1 割未満と少数であり、部活よりもサークルに所属している人の方が多い。また、どちらにも所属していない人は、部活に所属している人よりも多い分布となった。

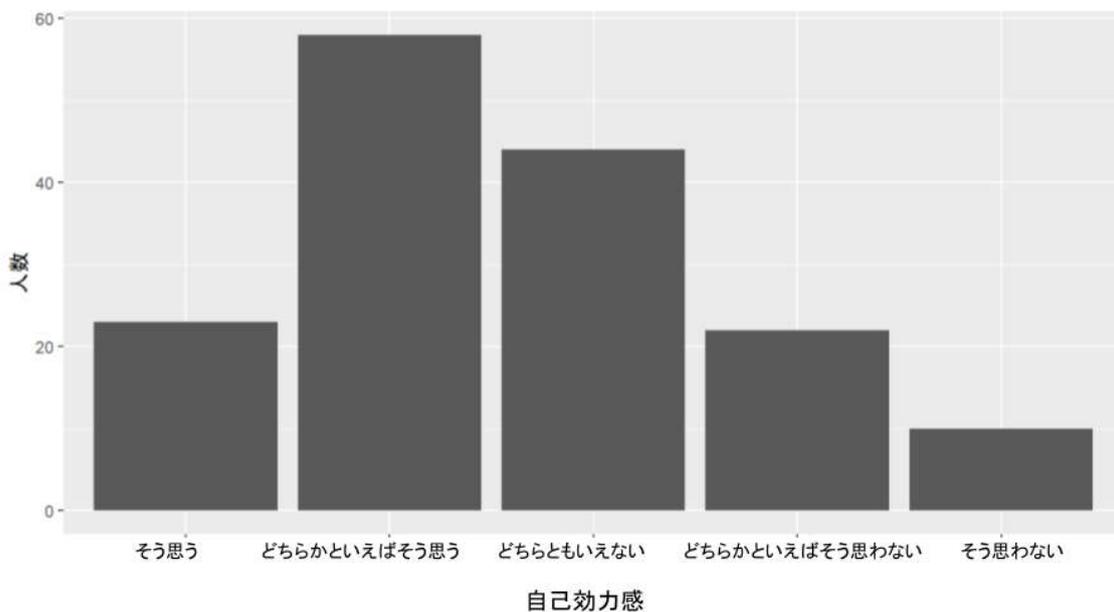


図 3-1 自己効力感の分布の図

表 3-2 記述統計量

変数	カテゴリ	度数	%
性別	男性	101	64.3
	女性	50	31.8
	その他	3	1.9
	無回答	3	1.9
	合計	157	100
学部	文学部	30	19.1
	経済学部	32	20.4
	理学部	79	50.3
	農学部	16	10.2
	合計	157	100
学年	学部 1 年	45	28.7
	学部 2 年	10	6.4
	学部 3 年	90	57.3
	学部 4 年	2	1.3
	大学院生	8	5.1
	研究生	1	0.6
	無回答	1	0.6
	合計	157	100
自己効力感	そう思う	23	14.6
	ややそう思う	58	36.9
	どちらともいえない	44	28.0
	あまりそう思わない	22	14.0
	そう思わない	10	6.4
	合計	157	100
友だちの数	0 人	35	22.3
	1～5 人	101	64.3
	6～10 人	16	10.2
	11～15 人	3	1.9

	16人以上	2	1.3
	合計	157	100

親友の数	0人	38	24.2
	1人	23	14.6
	2人	40	25.5
	3人	26	16.6
	4人	6	3.8
	5人以上	24	15.3
	合計	157	100

部活・サークル所属	部活動に所属	39	24.8
	サークルに所属	61	38.9
	部活動・サークルの両方に所属	12	7.6
	どちらにも所属していない	45	28.7
	合計	157	100

3.4.2 分析枠組み

モデル 1 では、自己効力感を示す変数を従属変数に、関係性の深さを考慮しない友だち、関係性が深い友人を示す親友を独立変数として二項ロジスティック回帰分析を行った。

加えて、深い友人関係を持つ人は、部活動やサークルの学内課外活動においてその関係を築いているのかを検証するため、モデル 2 で分析を行った。モデル 2 は独立変数に部活ダミーとサークルダミーの二つを投入したものである。モデル 2a は従属変数が友だちであり、モデル 2b は従属変数が親友である。

3.5 結果

ここでは、3.5.1. において記述統計量の確認をする。モデルで使用した変数について、従属変数に対し独立変数と統制変数それぞれにおいてクロス集計表を作成し、 χ^2 、p 値、クラメールの相関係数を確認する。また、3.5.2. において、重回帰分析の結果を確認する。

3.5.1 記述統計量

ここにおいて、モデルの従属変数に対し、独立変数と統制変数それぞれとの関連をみる。クロス集計表を作成し、関連性を調べるため検定を行った。

なお、具体的には自己効力感という従属変数に対し、統制変数として、性別、学部、学年、独立変数として友だちの数、親友の数と設定した。加えて、LINE の人数を従属変数に、独立変数としてサークル所属、部活所属と設定した。最後に、親友の数を従属変数、独立変数として、サークル所属、部活所属と設定した。

最初に自己効力感と性別についてである。クロス集計表からは男女でほぼ同じような分布をしていることが分かる。p 値も有意とならず、自己効力感と性別はほぼ関連がないと

いえる。

表 3-3a 自己効力感と性別のクロス集計表

自己効力感 (%)			
性別	そう思わない	そう思う	合計 (人)
男性	47.5	52.5	101
女性	46.0	54.0	50
合計	48.4	51.6	151

$$\chi^2 = 0.031, p = 0.860, \text{Cramer's } V = 0.014$$

次に、自己効力感と学部についてである。文系では自己効力感が高い人の方が多い傾向にある一方、理系では自己効力感が低い人の方が若干多い傾向がみられた。 χ^2 の値からは、自由度 1 において 5%水準で有意となるものの、p 値では有意という結果が得られなかった。

表 3-3b 自己効力感と学部のクロス集計表

自己効力感 (%)			
学部	そう思わない	そう思う	合計 (人)
文	38.7	61.3	62
理	54.7	45.3	95
合計	48.4	51.6	157

$$\chi^2 = 3.859, p = 0.495, \text{Cramer's } V = 0.157$$

次に、自己効力感と学年についてである。1 年生、2 年生は自己効力感が高い人の割合の方が多い一方、3 年生以上において、自己効力感が低い人の割合の方が若干多い傾向がみられた。しかし、p 値は有意な値をとらず、自己効力感と学年に関しては関連がないといえる。

表 3-3c 自己効力感と学年のクロス集計表

自己効力感 (%)			
学年	そう思わない	そう思う	合計 (人)
1 年生	40	60	45
2 年生	40	60	10
3 年生以上	52	48	100
合計	48.4	51.6	155

$$\chi^2 = 2.048, p = 0.359, \text{Cramer's } V = 0.115$$

次に、自己効力感と友だちの数についてである。友だちの数と自己効力感の分布は、0人において、低い人の方が多し一方、複数人いる人は高い人の方が多し傾向がみられた。しかし、p値は有意とはならなかつたため、自己効力感と友だちの数についてはそれほど関連がないといえる。

表 3-3d 自己効力感と友だちの数のクロス集計表

友だちの数	自己効力感 (%)		合計 (人)
	そう思わない	そう思う	
0人	60	40	35
1~5人	44.6	55.4	101
6人以上	47.6	52.4	21
合計	48.4	51.6	157

$$\chi^2 = 2.489, p = 0.288, \text{Cramer's } V = 0.126$$

次に、自己効力感と親友の数についてである。分布から、親友の数が増えてゆくほど自己効力感が高い人の割合が増えてゆくことが見受けられる。χ²値、p値ともに10%水準で有意な結果を示し、親友の数が増えてゆくほど、自己効力感が高い人が増える傾向にあるといえるだろう。

表 3-3e : 自己効力感と親友の数のクロス集計表

親友の数	自己効力感 (%)		合計 (人)
	そう思わない	そう思う	
0人	60.5	39.5	38
1人	52.2	47.8	23
2人	55.0	45	40
3人	38.5	61.5	26
4人以上	30	70	30
合計	48.4	51.6	157

$$\chi^2 = 8.161, p = 0.086, \text{Cramer's } V = 0.228$$

次は、LINEの人数とサークル所属である。サークルに所属している方がしていないよりも友だちの数が増加する傾向にあるように見える。一方、p値は有意な値を示していない。そのため、LINEの人数とサークル所属には関連があるとはいえない。

表 3-4a 友だちの数とサークル所属のクロス集計表

サークル	友だちの数 (%)			合計 (人)
	0人	1~5人	6人以上	
入っている	16.4	65.6	18	61
入っていない	26	63.5	10.4	96
合計	22.3	64.3	13.4	157

$\chi^2 = 3.199, p = 0.202, \text{Cramer's } V = 0.143$

次に、友だちの数と部活所属である。こちらは、所属の有無によって分布はそれほど違わないように見受けられる。p 値も有意な値をとっておらず、友だちの数と部活所属には関連があるとはいえない。

表 3-4b 友だちの数と部活所属のクロス集計表

部活	友だちの数 (%)			合計 (人)
	0人	1~5人	6人以上	
入っている	25.6	59	15.4	39
入っていない	21.2	66.1	12.7	118
合計	22.3	64.3	13.4	157

$\chi^2 = 0.649, p = 0.723, \text{Cramer's } V = 0.064$

次に、親友の数とサークル所属についてである。所属している方が所属していない方よりも、若干親友の数が多い傾向にあるように見受けられるが、p 値は有意な値を示しておらず、関連があるとはいえない。

表 3-5a 親友の数とサークル所属のクロス集計表

サークル	親友の数 (%)					合計 (人)
	0人	1人	2人	3人	4人以上	
入っている	24.6	9.8	27.9	14.8	23	61
入っていない	24	17.7	24	17.7	16.7	96
合計	24.2	14.6	25.5	16.6	19.1	157

$\chi^2 = 2.775, p = 0.596, \text{Cramer's } V = 0.133$

最後に、親友の数と部活所属についてである。所属している方が所属していないよりも親友の数が多いように見受けられる。しかし、p 値は有意な値を示しておらず、親友の数と部活所属に関連があるとはいえない。

表 3-5b 親友の数と部活所属のクロス集計表

部活	親友の数 (%)					合計 (人)
	0人	1人	2人	3人	4人以上	
入っている	15.4	12.8	28.2	17.9	25.6	39
入っていない	27.1	15.3	24.6	16.1	16.9	118
合計	24.2	14.6	25.5	16.6	19.1	157

$\chi^2 = 3.157, p = 0.532, \text{Cramer's } V = 0.142$

3.5.2 分析結果

表 3-6a モデル 1 結果

モデル 1		
	係数	標準誤差
切片	-0.305	0.795
友だちの数	0.0873	0.339
親友の数	0.321 *	0.135
性別(ref:男)	-0.079	0.369
学年	-0.136	0.164
学部(ref:文)	-0.352	0.361
McFadden	0.0562	
N	149	

† $p < 0.1$, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

モデル 1 において、親友と外出時間が有意に正の係数となった。一方で、友人においては有意な結果が得られなかった。

ここにおいて、まず、友人、親友の結果について考える。関係性の深さを考慮しない友人は、友人関係の自己効力感に関係しない。他方、親友の係数からは、関係性の深い友人が多いほど、友人関係を自分の力で改善できると思う傾向にあることが分かった。

加えて、深い友人関係を持つ人がどの組織においてその関係性を築いているのかを検証するために作成したモデル 2 の結果は以下のようになった。

表 3-6b モデル 2 結果

モデル2a			モデル2b		
	係数	標準誤差		係数	標準誤差
切片	1.807	0.078	切片	2.579 ***	0.187
部活	0.090	0.122	部活	0.677 *	0.294
サークル	0.209 †	0.109	サークル	0.437 †	0.261
調整済み決定係数	0.011		調整済み決定係数	0.024	
N	157		N	157	

† p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001 † p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

この結果から、サークルに所属している人は、友だちの数に加え、親友の数も増える傾向にある。そして、部活動に所属している人は、友だちの数が増える傾向が見られない一方、親友の数は増える傾向にある。加えて、モデル 2b の係数に着目すると、部活に所属している方が、サークルに所属しているよりも、親友の数が増えることに大きく寄与すると考えられる。

3.6 考察

ここにおいて、まず仮説の検証結果についてまとめる。次にその考察に加え、友人関係の深さと課外活動参加の関係について考察する。そして最後に本節に残された課題に言及する。

本節では、友人関係を自分の努力で改善できると考える「友人関係の自己効力感」を高く持つ人は、どのような特徴を持つのかを、築いている友人関係に着目して明らかにすることであった。そこで、友人関係の深さに着目して立てた仮説が以下のものである。

仮説： 深い友人関係を築いている人ほど友人関係に対して自己効力感を抱く。

友人関係に着目し、自己効力感を高く持つ人はどのような特徴を持つのかを検証したモデル 1 において、友人では有意な結果が得られなかったが、親友においては有意な結果が得られたことから、この仮説は支持されたといえる。繰り返しになるが、人とぶつかり、交わることを避けられない社会において、友人関係の自己効力感を持つことは、新たなアイデアを生み出し、良い人間関係を築く重要な鍵であると考えられる。そして、その友人関係の自己効力感は、深い友人関係を持つほど高くなるという結果が得られた。つまり、人と関わることが得意でないならば、広い友人関係ではなく、深い関係を持てる友人関係を築こうと試み、関係性を強く持つことで、友人関係に対してポジティブな指向を育み、広く深い友人関係を持つことに寄与するかもしれないということだ。加えて、価値観の異なる他者との交流が増えることで、物事に対する新たな知見や視野が広がると考えられる。本節における仮説が支持されたことで、良い友人関係を持つためには「小さな一歩を深めること」が重要なことであると示唆された。

加えて、深い友人関係を持つ人は、部活動やサークルの学内課外活動においてその関係性を築いているのかを検証したモデル 2 から、サークルに所属している人は、友だちの数・親友の数共に増加する傾向にあることが分かった。また、部活に所属している人は、友だちの数には寄与しないものの、親友の数が増加傾向にあることが分かった。このことから、サークルに所属することは、広く浅い友人関係と深い友人関係の双方の構築に寄与すると解釈できる。一方で、部活動に所属することは、広く浅い友人関係を構築することには寄与しないものの、深い友人関係を構築するのに、サークル所属よりも大きく寄与すると解釈できる。日常の多くの時間を費やす部活動において、人々の友人関係の構築は、

関係を「広げる」よりも部活内での関係を「深める」傾向にあるのかもしれない。

最後に本節の課題についてだ。本節のモデル 2 において、深い友人関係を持つ人は学内課外活動においてその関係性を築いているのかを検討した。しかし、研究室やアルバイト、学外の活動においてその関係性を築いている可能性がある。学内課外活動のみではなく、他の活動やコミュニティに着目して検討する必要があるようだ。

4. 自己責任

4.1 研究関心

本節では、いわゆるエリート大学の学生が自己責任という考えについて、どのようにとらえているのかを明らかにすることを目的とする。

自己責任とは、個々人の社会経済的現状は個人の選択の結果なのだから、その結果がすぐれたものでなかったとしても個人の責任として受け入れるべき、という考え方だ（桜井, 1998）。一見もっともな主張であると思うが、社会経済的地位の達成は個人の責任に帰せられない不条理が存在している。それは生まれによる不平等である。

どのような家庭に生まれるかによって、本人のその後の人生は定まっている。身もふたもない話ではあるが、生まれによる不平等は社会学の古典的課題とされ、これまで非常に多様な研究がなされてきた。この時の生まれについては、どのような資本をどれだけ有しているかという意味であり、専門的な言葉では出身 SES（Socioeconomic Status）と表現する。

では日本社会はどのようなかという、諸外国と同様、生まれによって達成学歴がことなる、不条理な社会なのである。その事実を示す研究を確認しよう。ここでは現代の生まれの不平等についてまとめた松岡（2019）から、出身 SES と大卒割合について確認する。以下の通り、親の学歴によって本人の学歴は大きく異なる。その理由について、松岡（2019）は幼児期からの意図的教育や教育投資の違いなど、さまざまに論じ、不平等である事実を提示している。

表 4-1 2015 年 SSM 調査・20 代男性の親大卒別・地域別本人大卒割合

大卒割合		大卒割合	
父大卒	80	三大都市	58
父非大卒	35	非三大都市	45

出典) 松岡（2019 ; 33-44）より筆者作成

このような学術的な事実について、非学術的な文脈ではどのようにとらえられているのだろう。言い換えると、一般的に出身 SES による不平等は浸透しているのだろうか。この問いについて、一つの回答となる興味深い言説がある。「親ガチャ」という概念だ。

親ガチャとは、生まれてくる家庭は個人では選択することができないという状況をおもちゃ売り場やソーシャルゲームのガチャガチャに例えた言葉で、昨年（2021 年）、若年層を中心に反響を有し、話題になった²。この言葉は、表現の斬新さからその是非をめぐって、活発な議論がなされた。ただし、ここではその是非については問題ではなく、出身

² NHK 「「親ガチャ」話題のことばをぶつけてみたら」

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210924/k10013272271000.html>

Yahoo news 「「親ガチャ」は努力したくない若者の言い訳か？ 親に人生を左右される若者のリアル」 <https://news.yahoo.co.jp/byline/konnoharuki/20210925-00259912>

現代ビジネス 「「親ガチャ」という言葉が、現代の若者に刺さりまくった「本質的な理由」」 <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/87010?page=4>

SES の不平等という課題が広く浸透してきている可能性が示唆されている、そういった課題に関心もたれる社会になりつつあるということを確認したいのだ。

もちろん、親ガチャという記事が取り上げられたことをもって、そのまま出身 SES による不平等の浸透を証明することはできない。しかし、近年の傾向として、この不平等が認知され始めているということは言えるだろう。

このような不条理に対して、人々はどのようにとらえているのだろうか。上記の例で、生まれによる不平等の認知は広まってきている可能性は示唆されたが、認知が広まることと、意見を持つかどうかは異なる。このような不条理に対して、人々はよくないものとして抵抗するのか、あるいは仕方がないことだと受け入れるのか。もしくは不条理そのものに対して、自身の経験と異なる意見であるとして、反対意見、すなわち自己責任論を展開するのだろうか。

さらに社会的属性による違いも加味しなければならない。自己責任論は一種の勝者の論理だ。様々な資本を持つものから、それらを持たざる者に向けた言葉である。したがって、意見を発する主体の属性が重要になる。もし生まれによる不平等が浸透し、よくないものであるという価値観が広まったとしても、その広がり方によって意味が異なる。あらゆる階層に不平等の公正という価値が広まるなら、社会問題としてのインパクトが大きくなるだろう。しかし、もし低階層にのみ受け入れられ、高階層では受け入れられない場合、階層によって社会的な分断が生じるだろう。

この時、エリート大学生がどのような意見を持っているのかという点を明らかにすることの意味が浮かび上がる。なぜならエリート大学生はこれからの日本のかじ取りを任せられる可能性が高いからだ。

もちろん、話はそう単純ではない。現代社会は一部の層による独断では動きえないし、複数の集団が複雑に絡み合っている。しかし、自己責任という考え方は勝者の論理のようなニュアンスを持つ。そのような中、相対的により高い階層に位置づけられるであろうエリート学生が、この自己責任という考え方についてどのようにとらえているのかという点を明らかにすることは、今後の日本社会の傾向の一つを示すことになるだろう。

よって本節では、いわゆるエリート大学の学生が自己責任という考えについて、どのようにとらえているのかを明らかにすることを目的とする。

4.2 先行研究

ここではエリートと自己責任論の選好に関する先行研究を概観する。自己責任論そのものを標榜して行われた研究は多くないが、自由な競争のためなら格差が広がってもよいとする「新自由主義的価値観」、努力すれば何とかなるという価値観がどれだけ一般化されているか、という「メリトクラシーの浸透」と重なる概念である。

よって以下では階層によって異なる価値意識を論じた研究と、日本における自己責任論の展開理由について考察した先行研究を取り上げ、本節の課題を設定する。その内容を先取りするなら、学校歴という細かい変数を用いて行われた研究は少なく、またいわゆるエリート大学の学生を対象とした研究は少ないため、本節は一定の社会的意義があるといえる。

4.2.1 階層と自己責任論

階層とは資本の多寡によって位置づけられる序列のことであるが、資本の多寡で区別された層は、考え方についても一定の傾向を有する。この意味で、広義の階層意識と呼ばれることもある（原，1986）。

自己責任論についても階層によって異なる傾向を有している。一言でまとめるならば、より高い階層にいる者ほど世の中の格差について認知しておらず（神林，2018）、自己責任論的な価値観を選好しやすい（吉川，2011；土場，2011；松谷，2015）。そしてその傾向は高学歴者ほど顕著に表れており、高学歴者の自己責任的価値観が近年高まってきている（濱田，2021）。

ただし、学歴ごとの自己責任論選好の偏りについては大卒か非大卒か、という大きい区別であり、学校歴といった細かい区別は行われていない。大学進学率が 60%に迫っている昨今においては、大卒/非大卒といった区別に加えて、大学の難易度である学校歴を加味した分析が行われる必要がありそうだ。

そこで本節の課題の一つ目を、学校歴別で見たときも同様の傾向がみられるのか、と設定する。先行研究では学歴の高さが自己責任論を好む傾向が見出されているが、学校歴を加味してもそのような傾向が見出されるのか、検証することとしよう。

4.2.2 競争条件と自己責任論

上記において、自己責任論の選好には階層による傾き、特に学歴による傾きがあることを確認してきたが、このメカニズムをどう説明するか。世の中の格差について知らないから、自己責任論を好む、ということは示されたが、なぜ格差について認識しづらいのか。

この点について、戦後日本社会の仕組みから興味深い考察を行った 2 つの研究を確認しよう。一つ目は苅谷剛彦による教育とメリトクラシーの関係を説明する『大衆教育社会のゆくえ』だ。二つ目は竹内洋による選抜方法から階層的な不平等を隠蔽する仕組みを暴いた『日本のメリトクラシー』だ。

はじめに、苅谷(1995)の主張を確認する。氏は、機会の不平等が問題にならず、メリトクラシーが浸透している原因を、学歴主義への信仰と能力主義(差別教育)への忌避感と主張する。高い学歴を有した者が社会的に高い地位に立つ、という学歴主義が浸透することにより、努力次第で誰でもエリートになれるという平等感が芽生えた。そして平等な一習熟度別教育を避ける、過度に能力主義に忌避的な態度を持つ—教育を行うことで、学歴獲得のための平等な競争条件が成立した。

他方、竹内(1995)は学歴や就職、職場内の達成における選抜の方法に日本のメリトクラシーの特徴があることを指摘する。その選抜の方法とは、日本では日本人らしさ(国民文化)を身に着けているかどうかを重視され、階級による機会の不平等を感じにくいことである。これはフランスやイギリスでは選抜に際して、階級が重視されることとは対照的である。

では日本人はどこに不平等を感じるのかというと、増幅効果の不平等が論点になる。増幅効果の不平等とは、社会における地位獲得競争をトーナメント型の競争だとすると、一時点の競争の勝者の利益と敗者の不利益が増幅することに不平等を感じることを意味する。よって日本社会で平等感を感じるためには、生まれによる不平等感というより、選抜による増幅効果を小さくすることである。開かれた選抜を教育段階から、職場内における昇進まで継続的に実施することで、人々は機会が開かれた、平等な社会であると認識する。

以上をまとめると、現代社会ではメリトクラシーが浸透しているかのように見える。なぜなら、地位獲得までの競争が平等に行われているように見えるため、努力による地位達成に正当性がもたらされるからだ。特に日本の場合、努力次第で誰でも取得可能な学歴によって、評価が決まるという前提に特徴がある。

つまり、競争の条件が平等なものである、と認識されているならば、世の中の不条理は認知されず、ゆえに自己責任論を好むことになる。

翻って、本節では銘柄大学に属する大学生に注目する。現時点ではエリート大学に在籍する彼らも、出身 SES は個々人によって千差万別だ。両親とも大卒の教育熱心な家庭に生まれた者もいれば、そうでない者もいる。あるいは偏差値の高い高校から入学した者もいれば、偏差値の低い高校からの御破算型入学を行ったものもいるだろう。

そこで本節の課題の二つ目を、競争条件が平等であったものは自己責任論を好むのかどうかという点を検証する。これまでの研究では確認されることのなかった、学歴を獲得するまでの経路に注目することで、自己責任論の構造により細やかな考察を含めることが狙いだ。

4.3 仮説

ここでは本節における仮説を設定する。ここまで、本節の課題を以下の二つに設定した。

課題1：学校歴別で見たときも同様の傾向がみられるのか

課題2：競争条件が平等であったものは自己責任論を好むのか

上記2つについて、先行研究から導かれる仮説は以下の通りとなる。以下2つの仮説について、以下では検証することとする。

仮説1：エリート大学生はそうでない大卒者と比べて自己責任を好む

仮説2：エリートコースを歩んできた学生ほど、自己責任を好む

他方、本節では上記2つの課題および仮説とは異なるものを設定する。それは出身SESの不平等を示す情報を提示することで、人の価値判断は変化するのか、というものである。先行研究レビューでは高い階層ほど不平等について認知していないため、自己責任的な価値観を抱くことが示されていることを確認した。そこで、不平等に関する情報開示を行うことで、自己責任という価値観に変化が生じるのか、というものを検証する。

もっとも、情報開示を行うことによる回答者の格差の認知は、あまり深いものではないだろう。しかし情報開示によってわずかでも自己責任論に関する意見が異なるのか、あるいはある特定の層で意見が異なるのか、大まかな傾向を見ることはできるだろう。よって、本節の3つ目の課題として、出身SESの不平等を示す情報を提示することで、人の価値判断は変化するのか、といったものを設定し、仮説は以下の通りとする。

仮説3：情報開示によって自己責任の選好は変化する

4.4 分析方法

ここでは分析方法について論じる。具体的には分析に用いる変数、それらの記述統計量、最後に分析枠組みについて述べる。

4.4.1 分析に用いる変数

分析に用いる変数は「学歴の自己責任論の選好」「社会的地位の自己責任論の選好」「偏差値」「母難関大卒ダミー」「政令ダミー」「地方ダミー」「女性ダミー」「理系ダミー」「学年」「開示ダミー」の10つである。親学歴について母親に注目した理由は、東北大学の学生の父親の学歴は同質的であり、母親の学歴の方が分散が大きいと考えたからだ。

それぞれの変数の説明を表4-2を提示すると同時に、文章でも以下で行う。はじめに従属変数である「学歴の自己責任論の選好」および「社会的地位の自己責任論の選好」についてである。「学歴の自己責任論の選好」については「個人の学歴は、家庭の豊かさや親の社会的地位で決まっている」との質問について「そう思う」を1、「ややそう思う」を2、「どちらともいえない」を3、「あまりそう思わない」を4、「そう思わない」を5とする5段階評価であった。なお、分析に際して「あまりそう思わない」および「そう思わない」を1、それ以外を0とする2値変数を作成した。また「社会的地位の自己責任論の選好」についても学歴の場合と同様のカテゴリで質問を行った。

次に独立変数についてである。「偏差値」については50未満から70以上について、5単位ずつのカテゴリで質問した。50未満、50～55...70以上といった具合である。「偏差値」変数は、こちらのカテゴリの中央値をとり、量的変数とした。また「母難関大学ダミー」については、母親の学歴を質問し、「難関大卒（旧帝大、一橋大、東工大、神戸大、慶応大、早稲田大）」と回答した場合を1、それ以外を0とするダミー変数を作成した。さらに「開示ダミー」については、教育格差の情報をランダムに開示し、開示された場合を1、されなかった場合を0とするダミー変数を作成した。なお、ランダム割り付けについては

2つの質問紙を作成し、ウェブページ「allocate monster（入手先 URL：<https://www.allocate.monster/>）」で作成した2つの質問紙をランダムに割り振る URL を作成した。

最後に統制変数である。統制変数としては「出身地」「性別」「学部」「学年」である。「出身地」については「政令指定都市」「20万人以上の市部」「10万人以上20万人以下の市部」「10万人未満の市部」「郡部」の5つのカテゴリで質問した。なお分析に際して「政令市」を選択した場合を1、それ以外を0とする「政令ダミー」を作成した。加えて「郡部」を選択した場合を1、それ以外を0とする「地方ダミー」を作成した。「女性ダミー」については「女性」を1、「男性」を0とするダミー変数を作成した。「理系ダミー」については学部の回答より、「理学部」および「農学部」を1、それ以外を0とするダミー変数を作成した。「学年」については回答者の学年を量的変数とした。

表 4-2 変数の説明

変数	備考
学歴の自己責任論の選好	「個人の学歴は、家庭の豊かさや親の社会的地位で決まっている」との質問について「そう思う」を1、「ややそう思う」を2、「どちらともいえない」を3、「あまりそう思わない」を4、「そう思わない」を5とする5段階評価 分析に際して、4、5を1、1～3を0とする2値の変数を作成
社会的地位論の選好	「個人の社会的地位は、家庭の豊かさや親の社会的地位で決まっている」との質問の自己責任論について「そう思う」を1、「ややそう思う」を2、「どちらともいえない」を3、「あまりそう思わない」を4、「そう思わない」を5とする5段階評価
偏差値	出身高校の偏差値について、50未満、50～55、55～60、60～65、65～70、70以上で質問し、それぞれの中央値を量的変数とした
母難関大学ダミー	母親の学歴についての質問で、難関大卒（旧帝大、一橋大、東工大、神戸大、慶応大、早稲田大）を1、それ以外を0とする難関大卒ダミーを作成
政令ダミー	政令指定都市を1、それ以外を0とする政令ダミーを作成
地方ダミー	郡部出身を1、それ以外を0とする地方ダミーを作成
女性ダミー	女性を1、男性を0とする女性ダミーを作成
理系ダミー	理系を1、文系を0とする理系ダミーを作成
学年	回答者の学年を量的変数とした
開示ダミー	教育格差の情報を開示された場合1、開示されなかった場合0とする開示ダミーを作成

次に以上に確認した変数の記述統計量を確認する。表 4-3 で各変数のカテゴリごとの度数および割合を示した。

はじめに従属変数である「学歴の自己責任論の選好」および「社会的地位の自己責任論の選好」については、多くの学生が出身で決まっていると解答している。なお2つの変数の分布の違いを見ると、学歴と比べて社会的地位の方が生まれによって決まると回答するものが少なかった。このことを以下の通り解釈できそうだ。一般的に学歴は人生初期で決定するものに対し、社会的地位は人生の長いスパンで決定する。社会的地位の方が生まれによらず、努力によって達成可能であるととらえているのかもしれない。

次に独立変数である。はじめに高校の偏差値については、60以上に偏った結果となった。難関大学に進学する学生は出身高校偏差値も高いという結果を再確認することとなった。

また母学歴も 8 割強が高等教育を受けており、半数弱が大卒であった。東北大学の学生の出身 SES の高さを確認できる結果だ。さらに情報開示についてであるが、こちらは注意が必要な結果となった。情報開示の割り付けは前述の通りランダムになるように操作しているが、情報提示なしに偏ってしまった。こちらはサンプル数が 157 と少ないことが原因であるかもしれない。

最後に統制変数についてである。出身地については政令市が 25%、市部が 70%と、都市からの進学者が多い傾向がみられた。また性別については男性が 64%と高く、東北大学の男女構成の傾向を反映している。また学年については1年生と3年生が多い傾向であった。

表 4-3 記述統計量

変数	カテゴリ	度数	%
学歴は出身で決まっている	そう思う	33	21
	ややそう思う	86	54.8
	どちらともいえない	16	10.2
	あまりそう思わない	18	11.5
	そう思わない	4	2.5
	合計	157	100
社会的地位は出身で決まっている	そう思う	26	16.6
	ややそう思う	72	45.9
	どちらともいえない	26	16.6
	あまりそう思わない	26	16.6
	そう思わない	7	4.5
	合計	157	100
高校偏差値	50 未満	1	0.6
	50 以上 55 未満	5	3.2
	55 以上 60 未満	17	10.8
	60 以上 65 未満	35	22.3
	65 以上 70 未満	45	28.7
	70 以上	47	29.9
	その他	4	2.5
	無回答	3	1.9
合計	157	100	
母学歴	高校以下	24	15.3
	短大・高専・専門学校	55	35

	難関大学 (旧帝大、一橋大、東工大、 神戸大、慶応大・早稲田大)	12	7.6
	国立大学・難関私立大学 (上記以外の国立大学・ GMARCH・関関同立)	30	19.1
	上記以外の大学	31	19.7
	母はいない	1	0.6
	わからない	3	1.9
	無回答	1	0.6
	合計	157	100
出身地	政令市	39	24.8
	20万人以上の市部	48	30.6
	10万人以上の市部	26	16.6
	10万人未満の市部	35	22.3
	郡部(町村など)	3	1.9
	日本以外	6	3.8
	合計	157	100
性別	男性	101	64.3
	女性	50	31.8
	その他	3	1.9
	無回答	3	1.9
	合計	157	100
学部	文学部	30	19.1
	経済学部	32	20.4
	理学部	79	50.3
	農学部	16	10.2
	合計	157	100
学年	学部1年	45	28.7
	学部2年	10	6.4
	学部3年	90	57.3

	学部 4 年	2	1.3
	大学院生	8	5.1
	研究生	1	0.6
	無回答	1	0.6
	合計	157	100

教育格差の情報提示	情報提示なし	93	59.2
	情報提示あり	64	40.8
	合計	157	100

4.4.2 分析枠組み

自己責任を好む確率を従属変数に、高校偏差値、親学歴を独立変数として分析を行った。なお、それぞれの変数を確認するために、以下の通り段階的に変数を投入した。

自己責任モデル 1：偏差値、親学歴、統制変数のみを投入

自己責任モデル 2：モデル 1 と、教育不平等を示す図表を提示した情報（図表開示ダミー）を投入

自己責任モデル 3：モデル 2 に加え、偏差値と図表開示ダミーの交互作用を投入

モデル 3 で偏差値と図表開示ダミーの交互作用を投入したのは、教育不平等の情報提示が自己責任意識に及ぼす影響は、属性によって異なると考えたためである。

具体的には、エリートコースを歩んだ学生（高偏差値校出身者）は情報提示による影響を受けづらいと考え、投入した。

4.5 結果

ここでは分析結果についてまとめる。はじめに基礎分析として、2 変数の関連を確認する。具体的には自己責任論の選好と独立変数、統制変数の関連を確認する。次に共変量を統制するために多変量解析を行う。

4.5.1 分析結果：基礎分析

ここでは基礎分析として自己責任論の選好と独立変数、統制変数の関連を確認する。具体的には自己責任論の選好を従属変数に、独立変数として偏差値、母学歴、出身地、性別、学部、学年、情報開示を設定する。そして基礎分析に際して、クロス集計表を用いた独立性の検定を行う。

はじめに偏差値との関連である。分布を確認し、極端に少ないセルが存在しないよう、55 未満、55 以上 65 未満、65 以上でカテゴリを作成した。表 4-4a の通り、p 値は有意水準を満たしておらず、両者に関係があるとは言えない状態であった。

表 4 - 4a 自己責任論の選好と偏差値のクロス集計表

偏差値	学歴は出身で決まっている (%)		合計 (人)
	そう思う	そう思わない	
55未満	66.7	33.3	6
55以上65未満	88.5	11.5	52
65以上	85.9	14.1	92
合計	86	14	150

$$\chi^2 = 2.126, p = 0.345, \text{Cramer's } V = 0.119$$

次に母学歴との関連である。分布を確認し、極端に少ないセルが存在しないよう母学歴を大卒、非大卒でカテゴリを作成した。表 4-4b の通り、p 値は有意水準を満たしておらず、両者に関係があるとは言えない状態であった。

表 4 - 4b 自己責任論の選好と母学歴のクロス集計表

母学歴	学歴は出身で決まっている (%)		合計 (人)
	そう思う	そう思わない	
大卒以下	84.8	15.2	79
大卒	87.7	12.3	73
合計	86.2	13.8	152

$$\chi^2 = 0.26, p = 0.61, \text{Cramer's } V = 0.041$$

さらに出身地との関連である。分布を確認し、極端に少ないセルが存在しないよう政令市、10 万人以上の市部、10 万人未満の市部及び郡部でカテゴリを作成した。表 4-4c の通り、p 値は有意水準を満たしておらず、両者に関係があるとは言えない状態であった。

表 4 - 4c 自己責任論の選好と出身地のクロス集計表

出身地	学歴は出身で決まっている (%)		合計 (人)
	そう思う	そう思わない	
政令市	87.2	12.8	39
都市 (10万人以	86.5	13.5	74
市部・郡部	81.6	18.4	38
合計	85.4	14.6	151

$$\chi^2 = 0.615, p = 0.735, \text{Cramer's } V = 0.064$$

また、性別との関連についてである。表 4-4d の通り、p 値は有意水準を満たしておらず、両者に関係があるとは言えない状態であった。

表 4 - 4d 自己責任論の選好と性別のクロス集計表

性別	学歴は出身で決まっている (%)		合計 (人)
	そう思う	そう思わない	
男性	86.1	13.9	101
女性	84	16	50
合計	85.4	14.6	151

$$\chi^2 = 0.123, p = 0.726, \text{Cramer's } V = 0.029$$

加えて専攻との関連である。専攻は文理別に確認する。表 4-4e の通り、p 値は有意水準を満たしておらず、両者に関係があるとは言えない状態であった。

表 4 - 4e 自己責任論の選好と文理のクロス集計表

文理	学歴は出身で決まっている (%)		合計 (人)
	そう思う	そう思わない	
文系	80.6	19.4	62
理系	89.5	10.5	95
合計	86	14	157

$$\chi^2 = 2.427, p = 0.119, \text{Cramer's } V = 0.124$$

さらに学年との関連である。こちらは変数の分布を確認し、極端に少ないセルが存在しないよう 2 年生以下および 3 年生以上でカテゴリを作成した。表 4-4f の通り、p 値は 10% 水準で有意であり、両者に関係があることが示唆された。また Cramer の V は 0.141 であることから、弱い関連が見られた。

表 4 - 4f 自己責任論の選好と学年のクロス集計表

学年	学歴は出身で決まっている (%)		合計 (人)
	そう思う	そう思わない	
2年以下	80	20	55
3年以上	90.1	9.9	101
合計	86.5	13.5	156

$$\chi^2 = 3.118, p = 0.077, \text{Cramer's } V = 0.141$$

最後に情報開示の有無によって自己責任の選好が変化するかどうかを確認しよう。表 4-4g の通り、p 値は 0.988 と非常に大きく、有意にはならなかった。この結果は、情報開示と自己責任論という 2 変数の関連を確認した場合、教育格差を図時するだけでは人々の意識は変化しないことを意味する。

表 4 - 4g 自己責任論の選好と情報提示有無のクロス集計表

提示有無	学歴は出身で決まっている (%)		合計 (人)
	そう思う	そう思わない	
情報提示なし	86	14	93
情報提示あり	85.9	14.1	64
合計	86	14	157

$$\chi^2 = 0.000, p = 0.988, \text{Cramer's } V = 0.001$$

しかし、この結果から仮説 3 が棄却されたとは言い切れない。何らかの交絡が存在しているため、関連が見えなくなっている可能性があるし、特定の変数のカテゴリを選択した人にもみ関連がみられる可能性もある。よって本節 3 項では共変量で統制したり、交互作用項を投入することで、情報開示の効果および先に見た変数の効果を吟味することにした。

だがまずは次項で東北大学の学生が一般的な人々と比べて自己責任論を好むのか、あるいは好まないのか、という点について確認しよう。

4. 4. 2 分析結果：東北大学の学生の自己責任論の相対位置

東北大学の学生は一般の大学生と比較して自己責任論を好むのだろうか。以下では SSP2015 をもちいて東北大学の学生との比較を行おう。

SSP2015 とは現代日本の階層・階層意識に関する全国調査であり、対象は日本に住む 20 歳～65 歳であり、サンプルサイズは 3575 である。

今回 SSP2015 を用いる理由は 2 つある。一つ目に、東北大学の学生は現代日本の人々と比べて相対的にどこに位置するのか、といったことを明らかにしたいため、全国調査である必要があるからだ。二つ目に、SSP2015 は階層意識に注目した面接調査であり、社会意識を分析するに際して信頼性が高いからだ。

2015 年の日本全国の 20～65 歳の人々と大学生は単純比較はできない。しかし大まかな比較を行うことはできると考え、表 4-5a、表 4-5b および図 4-1 を作成した。なお、SSP については大卒者の結果を示している。

早速データを確認しよう。分析結果より明らかなおお、東北大学の学生は、平均的な日本の大卒者に比べて、自己責任論をあまり好まない。具体的には東北大学の学生の方がわずかに社会的地位は家庭によって決まっているととらえており、自己責任論に比較的親和的ではないことがわかる。

先述の通り、2 データを単純比較することはできない。しかし、大まかな傾向として、東北大学の学生は全国の人々よりも「社会的地位は家庭によって決まっている」ととらえていることが確認できた。

表 4-5a 「社会的地位は家庭により決まっている」に対する 2 データの回答

	SSP2015		行動科学実習調査2022	
	度数	%	度数	%
そう思わない	48	5.3	7	4.5
あまりそう思わない	169	18.5	26	16.6
どちらともいえない	279	30.6	26	16.6
ややそう思う	380	41.7	72	45.9
そう思う	33	3.6	26	16.6
合計	909	99.7	157	100

表 4-5b 「社会的地位は家庭により決まっている」に対する 2 データの平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
SSP2015	3.2	0.96
行動科学実習調査2022	3.545	1.089

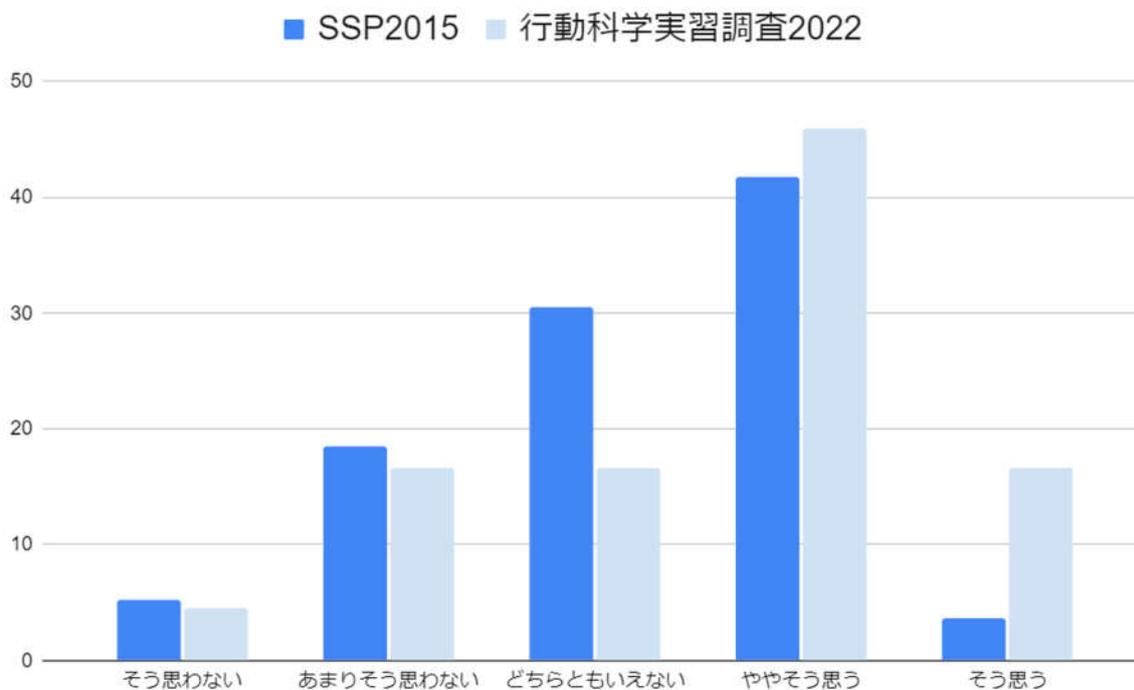


図 4-1 「社会的地位は家庭により決まっている」に対する 2 データの比較 (%)

ここまでの分析は様々な共変量を統制できていない。2変量で確認することや2データの分布を確認することにとどまっている。以下では変数を統制して、どのような経路をたどった学生が自己責任論を好む傾向にあるのか確認しよう。

4.5.2 分析結果：多変量解析

表 4-3 「学歴獲得の自己責任に関する規定要因」の分析結果

	モデル1	モデル2	モデル3
	対数オッズ比	対数オッズ比	対数オッズ比
切片	4.912	4.855	6.975 †
偏差値	-0.092 †	-0.093 †	-0.125 *
母難関大ダミー	-0.277	-0.320	-0.350
政令ダミー	-0.777	-0.797	-0.801
地方ダミー	0.470	0.556	0.548
女性ダミー	0.294	0.214	0.155
理系ダミー	-0.714	-0.773	-0.858
学年	-0.209	-0.214	-0.229
図表開示ダミー		0.404	-5.921
偏差値× 図表開示ダミー			0.098
N	132	132	132
MacFadden の疑似決定係数	0.096	0.100	0.108

*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05, † p<0.1

モデル1、モデル2では偏差値が有意に負の係数となったが、それ以外の変数では有意にならなかった。このことから以下の2つのことがわかる。

一点目に、東北大学の学生の自己責任意識を規定する要因は、本分析から偏差値であることが分かった。モデル1からわかる通り、性別、学年、学問分野、出身地といった人口学的な変数のみならない一方、高校トラックがすぐれたものであるほど、自己責任を好まない傾向にある。このことから、仮説「恵まれている者はそうでない者に厳しい」は棄却され、仮説とは逆の状態にあることが分かった。

二点目に、情報開示によって自己責任意識が変動することはないことが分かった。モデル2において図表提示ダミーが有意でないことから、教育格差の情報を提示しても、自己責任意識は変わらない。

他方、偏差値と図表提示ダミーの交互作用項を投入したモデル3では、交互作用項は有意にならず、偏差値が有意に負の影響があることが分かった。

交互作用項を投入した場合、元の変数（偏差値）は情報提示なし、交互作用（偏差値×情報提示ダミー）は情報提示ありの効果を確認することができる。もし元の変数（偏差値）のみ有意であれば、ダミー変数の効果がない場合（情報提示ダミー=0）、元の変数（偏差値）が影響を及ぼしていることになる。逆に交互作用項（偏差値×情報提示ダミー）のみ有意であれば、ダミー変数の効果がある場合（情報提示ダミー=1）、元の変数（偏差値）が影響を及ぼしていることになる。

モデル3の結果では、交互作用項を投入した結果、偏差値のみ依然有意であった。したがって、情報開示がない場合、偏差値が高くなるほど自己責任を好まない傾向にあるが、情報開示を行うと、偏差値と自己責任意識の関係は見えなくなるという結果である。

4.6 考察

ここまで、いわゆるエリート大学の学生が自己責任という考えについて、どのようにとらえているのかを明らかにすることを目的として、分析を行った。ここでは本節のまとめを行ったうえで、分析結果を踏まえた考察、そして最後に本節に残された課題についてまとめる。

本節のまとめを行おう。本節では出身SESによる不条理を人々がどのようにとらえているのか、特にエリート大学の学生はどのようにとらえているのか、という関心のもと、分

析を行ってきた。先行研究から導かれた仮説は、以下の3つであった。

仮説1：エリート大学生はそうでない大卒者と比べて自己責任を好む

仮説2：エリートコースを歩んできた学生ほど、自己責任を好む

仮説3：情報開示によって自己責任の選好は変化する

この仮説を検証するため、東北大学で社会調査を実施した。分析としては2つ行い、一つは東北大学の学生のデータと全国調査のデータの比較を行うこと、もう一つは「自己責任論の選好」を従属変数とし、「出身SES」「高校トラック」を独立変数とする二項ロジスティック回帰分析を行うことであった。

その結果、仮説1・仮説2は棄却され、仮説3は部分的に支持された。この事実をどうとらえるか。以下では考察を行う。

はじめに仮説1について、東北大学の学生は全国的な平均と比べて、自己責任論を好まない傾向にあった。全国における一般的な大卒者に比べて、「社会的地位は生まれによる」という宿命的な価値観を有している傾向が確認された。このことから東北大学に所属する学生は学歴獲得という点では成功している人が多いにもかかわらず、一方で生まれによる不平等を認識しているという現実的な価値観を有する人が多い結果であった。この傾向は大学教育による啓蒙効果によるものであるかもしれない。

ただし、本調査の回答者は大学1年生および3年生が多い。大学の啓蒙効果について厳密な分析を行うためには、大学卒業直後あるいは就職後の東北大学の学生の意識と、全国調査の意識を比較する必要がある。繰り返しになるが、本結果は東北大学に在学している人の傾向であるということに留意が必要である。

次に、仮説2について、先行研究から導かれるものとは全く逆の結果であった。つまり偏差値が低い高校から進学した学生ほど、自己責任論を好む傾向にあった。このことは偏差値の低い高校、つまり身近な競争相手の平均学力が低く、学内での競争が不均一であるほど、より強く努力による達成を選好するということだ。逆に、学内での競争がある程度均一である高偏差値高校出身であると、自己責任を選好しない傾向にある。この結果は、荻谷（1995）や竹内（1995）の競争条件の均一さが不平等に気づかない構造を作り出している、とする考察とは一致しないものであり、興味深い。

ただし、東北大学レベルの大学に進学した集団であるという点と、サンプルサイズについては考慮しなければならない。はじめに、本調査における回答者の偏差値は以下のとおりである。

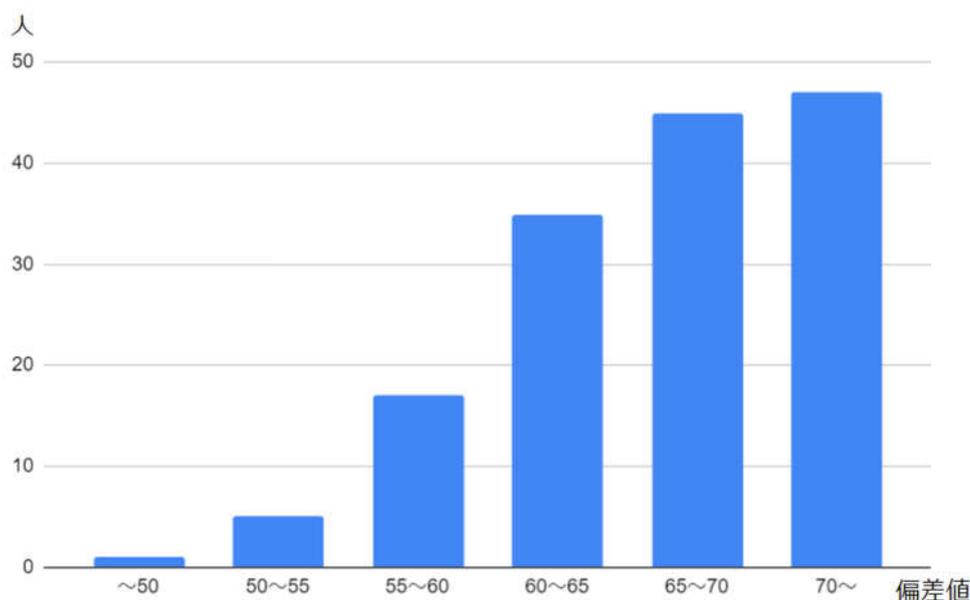


図 4-2 本調査の回答者の出身高校の偏差値分布

平均が 50、標準偏差が 10 である偏差値の特性を考慮するまでもなく、東北大学の偏差値は非常に偏りのある集団であることがわかる。したがって、「偏差値の低い高校ほど」が意味するものは、70 と比べて 60 ほどの偏差値では、自己責任論を好まない、という非常に特殊な状況下での分析となっていることには注意が必要である。また、本調査のサンプルサイズは 156 と、決して大きくはない。低偏差値高校出身者を十分にサンプリングできていない可能性も留意するべきである。

また、仮説 3 について、情報開示による自己責任論の選好は出身高校の偏差値によって異なるという興味深いものであった。つまり、低偏差値高校出身者は、情報開示によって自己責任論に否定的な意見を持ちうる可能性が示された。このことは——東北大学における学力を有するものであればという制約の下では——偏差値の低い高校出身であっても意見を変えることができるかもしれない。教育の啓蒙効果が一部立証されることとなった。

最後に、本節に残された課題について述べる。本節における課題はサンプリングによるデータの偏りがある可能性が否定できないことだ。

はじめに本節のデータのサンプルサイズは、繰り返しになるが 156 と決して大きくはない。これが原因かどうかはわからないが、偏差値の分布が偏ったものになってしまった。出身高校の偏差値が 50 未満の学生が 1 人しか抽出されなかったが、東北大学全体ではもう少し確認できそうである。不利な状況から大学に進学した学生の傾向について確認するためにはサンプルサイズを拡大し、少ない人数であっても見られるかどうか、検討する必要がある。

しかし、逆に言えば本調査のサンプルサイズでも自己責任に関する偏差値の傾向が見えたということは、教育による競争の影響が、学生の社会意識に根深く存在しているということだ。大学という学力競争の一つの到達地点においても、それまでの競争状況が影響するという事は興味深い。

人々の意識を形成する大きな要因として、履歴書的な意味の学歴が及ぼす影響に注目する必要があるようだ。

5. まとめ

本章では東北大学の学生の社会意識を記述することを目的として、結婚意欲、友人関係の自己効力感、自己責任論の選好について扱ってきた。

その結果を端的にまとめると、以下の通りであった。

第一に結婚意欲については、自己肯定感が高い人ほど結婚意欲が高いということだ。このことは晩婚化が進む中、人々の自己効力感を向上させていくかが課題になるだろう。

第二に友人関係の自己効力感については、深い友人関係を持つことで、友人関係を改善できるという自己効力感が高まる傾向にあることが分かった。より良い友人関係を持ち、イノベティブな考えを創出できるようにするためには、少数の友人でも丁寧に向き合い、信頼や関係を深めてゆくことが重要であることが分かった。

第三に自己責任論の選好については、社会のエリートは自己責任論に近い価値観を有しているという仮説に反し、「社会的地位は生まれによる」といった宿命論的な価値観を有していること、出身高校の偏差値が低い学生を非エリートととらえるならば、非エリートほど自己責任論に近い価値観を有していることが分かった。このことは大学の啓蒙効果を示すものであるかもしれない。

以上の通り、本章では学生の社会意識を記述することを目的としていたが、課題も残されている。それは東北大学の学生特有の特徴を示したい場合、他大学の学生を対象とする調査を行う必要もある。本稿で得られた東北大学の学生の社会意識に関する傾向が、同じような銘柄大学にも援用できるのか、あるいは本大学に特異的な傾向であるのか。今後の大学生を対象とした大規模調査が望まれる。

引用文献

- 内田由紀子・遠藤由美・柴内康文, 2012, 「人間関係のスタイルと幸福感——つきあいの数と質からの検討」『実験社会心理学研究』52 (1) : 63-75
- 片瀬一男・天童睦子, 2022, 「宮城学院卒業生の初期ライフコース——女性の高等教育とキャリア展開への社会学的アプローチ」『キリスト教文化研究所研究年報』民族と宗教 55, 7-39.
- 苅谷剛彦, 1995, 『大衆教育社会のゆくえ』中公新書.
- 神林博史, 2018, 「「社会の形」から考える格差社会——階層イメージを手がかりに」数土直紀編『格差社会のなかの自己イメージ』勁草書房:3-21.
- 吉川徹, 1996, 「社会意識論再考：理論と展望」『人文論集』47 (1) : 96-117.
- , 2011, 「階層意識の現在とゆくえ」斎藤友里子・三隅一人編『現代の階層社会 3——流動化のなかの社会意識——』東京大学出版会:63-78.
- , 2014, 『現代日本の「社会の心」——計量社会意識論』有斐閣.
- 佐々木昇一, 2016. 日本における若年層の雇用環境の悪化と結婚行動に関する実証分析 43 巻 pp. 31-41.
- 竹内洋, 1995, 『日本のメリトクラシー——構造と心性』東京大学出版会.
- 陳香蓮. 2011. 在日中国人留学生における対人的自己効力感が対人ストレスコーピングに及ぼす影響. 九州大学心理学研究, 12: 113-120.
- 土場学, 2011, 「格差と政治的価値——メリトクラシー社会の理念と市民社会の理念」斎藤友里子・三隅一人編『現代の階層社会 3——流動化のなかの社会意識』東京大学出版会:205-218.
- 中谷奈津子, 2018. 未婚男女における結婚意欲の関連要因——家族形成意識に関する福井・大阪における調査から 日本家政学会誌 69 (2), 105-114.
- 日本経済団体連合会「採用と大学改革への期待に関するアンケート調査」(<https://www.keidanren.or.jp/policy/2022/004.html>)
- 原純輔, 1986, 「階級・階層意識——解説」直井優・原純輔・小林甫編『リーディングス日本の社会学(8)社会階層・社会移動』東京大学出版会: 245-247.
- 疋田京子, 2008. 大学生の恋愛観・結婚観に関する意識調査. 鹿児島県立短期大学紀要. 人文・社会科学篇 紀要編集委員会 編 59 107-124.
- 松岡亮二, 2019, 『教育格差』ちくま新書.
- 松谷満, 2015, 「どうして「社会は変えられない」のか——政治意識と社会階層」数土直

紀編『社会意識からみた日本——階層意識の新次元』有斐閣.
NHK「“親ガチャ”話題のことばをぶつけてみたら」
(<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210924/k10013272271000.html>)
Yahoo news「「親ガチャ」は努力したくない若者の言い訳か？ 親に人生を左右される若者のリアル」(<https://news.yahoo.co.jp/byline/konnoharuki/20210925-00259912>)
現代ビジネス「「親ガチャ」という言葉が、現代の若者に刺さりまくった「本質的な理由」」(<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/87010?page=4>)

東北大学生の生活と意識に関する調査（2022年）

この調査は、東北大学の学生の皆様の現在の生活の様子や意識について、おウかがいするものです。東北大学の学部の授業をシラバスから無作為に抽出し、選ばれた授業を受講していらっしゃる学生の皆様にご協力をお願いしております。

この調査は、文学部の授業「行動科学基礎実習」の一環として実施しております。できるだけ多くの方のご意見を反映した調査を目指しておりますので、ご協力いただければ幸いに存じます。

- 調査の中で、回答者の皆様の名前やメールアドレスなどの個人情報は収集いたしません。回答はすべてコンピュータで集計して処理するため、どなたの回答かわかるようなことは決してありません。また、ご回答いただいた内容は、授業における学生教育以外の目的には使用いたしません。

- 回答に要する時間は、おおむね10分前後です。

- 各質問には、あなたのご意見にもっとも近い回答をお選びください。

- どうしても答えたくない質問には、無理にご回答いただく必要はございません。空欄のまま、次の質問にお進みください。

- 調査結果に基づいた報告書を下記のページで10月頃に公開を予定しております。

[http://www2.sal.tohoku.ac.jp/behavsci/wiki.cgi?](http://www2.sal.tohoku.ac.jp/behavsci/wiki.cgi?page=%B4%F0%C1%C3%BC%C2%BD%AC%CA%F3%B9%F0%BD%F1)

[page=%B4%F0%C1%C3%BC%C2%BD%AC%CA%F3%B9%F0%BD%F1](http://www2.sal.tohoku.ac.jp/behavsci/wiki.cgi?page=%B4%F0%C1%C3%BC%C2%BD%AC%CA%F3%B9%F0%BD%F1)

- この調査に関するお問い合わせは、下記までお願いいたします。

東北大学文学部行動科学研究室

准教授 小川和孝

TEL：022-795-6038

E-mail：katsunori.ogawa.b1@tohoku.ac.jp

はじめに、あなた自身のことについておウかがいします。

1. あなたの性別をお答えください。

1 つだけマークしてください。

男性

女性

その他: _____

2. あなたの現在の年齢はおいくつですか。

1 つだけマークしてください。

18歳

19歳

20歳

21歳

22歳

23歳

24歳

25歳以上

3. あなたは現在、何年生ですか。

1 つだけマークしてください。

学部1年

学部2年

学部3年

学部4年

大学院生

研究生

その他: _____

4. あなたの所属学部を教えてください。

1 つだけマークしてください。

文学部

経済学部

理学部

農学部

その他: _____

次に、あなたの今セメスターの学習活動についておうかがいします。

5. あなたが今セメスターに受けている授業のうち、オンライン主体のものはどの程度ありますか。

1 つだけマークしてください。

- 2割未満
 2割以上4割未満
 4割以上6割未満
 6割以上8割未満
 8割以上

6. あなたは現在の授業にどの程度満足していますか。

1 つだけマークしてください。

- 満足している
 やや満足している
 どちらともいえない
 あまり満足していない
 満足していない

7. 今セメスターでは、ふだんどれくらいの時間を授業外学習（授業の課題や、レポート作成にかかる時間、資格試験に向けた学習など）に使っていますか。1週間あたりの合計時間をお答えください。

1 つだけマークしてください。

- 1時間未満
 1～3時間未満
 3～5時間未満
 5～7時間未満
 7～9時間未満
 9～11時間未満
 11～13時間未満
 13時間以上

8. 今セメスターのあなたの学習活動に関する以下の項目について、もっともあてはまるものをそれぞれひとつずつ選んでください。

1 行につき 1 つだけマークしてください。

	そう思う	どちらかと言えば そう思う	どちらともい えない	どちらかといえば 思わない	そう思わ ない
授業には意欲的 に参加している	<input type="radio"/>				
単位さえ取れれ ばよいと考えて授 業に参加している	<input type="radio"/>				
自分は学習意欲 が高い方だと思う	<input type="radio"/>				

9. 今セメスターにおける登校頻度（部活動・サークル含む）は1週間あたりどのくらいですか。

1 つだけマークしてください。

- 0日
 1～2日
 3～4日
 5～6日
 7日

進路や就職活動についておうかがいします。

10. 高校生までに保護者の方と、保護者の方のお仕事について話したことはありますか。

1 つだけマークしてください。

- よくあった
 たまにあった
 あまりなかった
 まったくなかった
 覚えていない

11. 高校生までに、社会問題（環境、震災などを含む）に関する学外団体（NPO、企業、自治体など）の活動に自発的に参加した経験はありましたか。

1 つだけマークしてください。

- あった
 なかった
 その他: _____

12. 学部を修了した後の進路についてどのように考えていますか。

1 つだけマークしてください。

- 就職を考えており、興味のある職業が具体的にある
 就職を考えているが、興味のある職業は具体的に決まっていない
 内定を得ているなどすでに進路が決まっている 質問 16 にスキップします
 大学院への進学（すでに大学院に進学している場合を含む）
質問 16 にスキップします
 わからない 質問 16 にスキップします
 その他: _____

13. あなたは就職活動をいつ始める予定ですか。すでに始めている人はその開始時期を教えてください。

就職活動の開始時期は、自己分析や業界分析を始めた時期とします。前期終わりの休みは前期、後期終わりの休みは後期に含めてお考えください。

1 つだけマークしてください。

- 2年後期より前
 2年後期
 3年前期
 3年後期
 4年前期
 4年後期
 その他: _____

14. あなたの就職活動の現在の状況は、以下のどれにあてはまりますか。

1 つだけマークしてください。

- 最終面接に進んでいる企業がある
 ES（エントリーシート）を出したことがある
 ESを出したことはない

15. あなたは、"encourage"のような就活イベントや、面接の案内や社会人との面談のために用いるアプリやウェブサイトを、1週間あたりどの程度使用していますか。

1 つだけマークしてください。

- 使用していない
 1～2日
 3～4日
 5～6日
 7日

あなたの課外活動への取り組みについておうかがいします。

16. あなたは部活動・サークルに所属していますか。すでに引退されている方は所属していたものをお答えください。

1 つだけマークしてください。

- 部活動に所属している
 サークルに所属している
 部活動・サークルの両方に所属している
 どちらにも所属していない 質問 22 にスキップします

部活動・サークルに所属されていた方におうかがいします。すでに引退されている方は所属していた時のことについてお答えください。

17. あなたは部活動・サークルに週どのくらいの時間を費やしていますか。

1 つだけマークしてください。

- 0～5時間未満
 5～10時間未満
 10～15時間未満
 15～20時間未満
 20～25時間未満
 25～30時間未満
 30時間以上
 その他: _____

18. あなたは部活動・サークルに時間的に追われていると思うことがありますか。

1 つだけマークしてください。

- あてはまる
 少しあてはまる
 どちらともいえない
 あまりあてはまらない
 あてはまらない

19. あなたは義務感によって部活動・サークルをしていると思うことがありますか。

1 つだけマークしてください。

- あてはまる
 少しあてはまる
 どちらともいえない
 あまりあてはまらない
 あてはまらない

20. あなたは部活動・サークルにおいて自由に活動時間を決めることができますか。

1 つだけマークしてください。

- はい
 いいえ
 その他: _____

21. あなたは部活動・サークルにおいてリーダー（部長など）になったことがありますか。

1 つだけマークしてください。

- 立候補してなったことがある
 立候補以外でなったことがある
 リーダーになったことはない
 その他: _____

22. あなたはアルバイトに週どのくらいの時間を費やしていますか。

1 つだけマークしてください。

- アルバイトをしていない 質問 27 にスキップします
 0～5時間未満
 5～10時間未満
 10～15時間未満
 15～20時間未満
 20時間以上

23. あなたはアルバイトにおいて自由に労働時間を決めることができますか。

1 つだけマークしてください。

- はい
 いいえ
 その他: _____

24. あなたはアルバイトに時間的に追われていると思うことがありますか。

1 つだけマークしてください。

- あてはまる
- 少しあてはまる
- どちらともいえない
- あまりあてはまらない
- あてはまらない

25. あなたは義務感によってアルバイトをしていると思うことがありますか。

1 つだけマークしてください。

- あてはまる
- 少しあてはまる
- どちらともいえない
- あまりあてはまらない
- あてはまらない

26. あなたはアルバイトにおいてリーダー（バイトリーダーなど）になったことがありますか。

1 つだけマークしてください。

- 立候補してなったことがある
- 立候補以外でなったことがある
- リーダーになったことはない
- その他: _____

あなたの所属している組織・団体（部活動・サークル・アルバイトなど）についておうかがいします。そのうち、もっとも積極的に関わっているもの1つをお考えください。

27. あなたがもっとも積極的に関わっている組織・団体について、以下の項目のうちあてはまるものをすべて選んでください。

当てはまるものをすべて選択してください。

- 将来の進路について相談できる機会がある
- 互いに助け合う雰囲気がある
- ひとりひとりが独立して行う活動が多い
- 男女関係なく活躍できる場である
- 先輩が後輩を指導する雰囲気がある
- あてはまるものはない

28. あなたがもっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバーについて、以下の項目のうちあてはまるものをすべて選んでください。

当てはまるものをすべて選択してください。

- 出身地にばらつきがある
- 公立高校・私立高校出身者がどちらもいる
- 所属学部（出身学部）にばらつきがある
- 学生だけでなく社会人もいる
- 留学生がいる
- あてはまるものはない

29. あなたがもっとも積極的に関わっている組織・団体には、OB・OGとの交流がありますか。

1 つだけマークしてください。

- あてはまる
- 少しあてはまる
- どちらともいえない
- あまりあてはまらない
- あてはまらない

あなたの容姿に対する関心についておうかがいします。

30. あなたはどのくらいの期間に1度、美容院または理容室を利用しますか。

1 つだけマークしてください。

- 3週間未満
- 3～5週間未満
- 5～8週間未満
- 8～12週間未満
- 12週間～半年未満
- 半年以上、または行かない

31. あなたは以下のような場合、どれほど身支度（メイク、ヘアメイク、服選び）に時間をかけますか。

1 行につき 1 つだけマークしてください。

	5分未満	5～15分未満	15～30分未満	30～60分未満	60～90分未満	90分以上
授業だけがある場合	<input type="radio"/>					
大人数での食事会に行く場合	<input type="radio"/>					

32. 以下のマスクの見た目に関する項目のうち、あなたがマスクを購入する際にこだわる点をすべて選んでください。

当てはまるものをすべて選択してください。

- 色
- 形
- 素材
- 大きさ
- あてはまるものはない
- その他: _____

33. 冬シーズンを含む半年間で平均して何着ほど服（トップス、ボトムス、アウターのみを含める）を購入しますか。

1 つだけマークしてください。

- 0着
- 1～2着
- 3～4着
- 5～7着
- 8着以上

34. 半年間で平均して何点ほどコスメを購入しますか。

ここでコスメとは、化粧品、ヘアセット用品、ネイル用品、香水などを含みます。スキンケア用品は含めずにお考えください。

1 つだけマークしてください。

- 0点
- 1～3点
- 4～6点
- 7～10点
- 11点以上

35. 過去1ヶ月の間にスキンケアとして使ったことがあるものをすべて選んでください。

当てはまるものをすべて選択してください。

- 導入液
- 化粧水
- パック
- 乳液、クリーム
- オールインワン
- あてはまるものはない

ふたたび、あなた自身のことについておうかがいします。

36. あなたは以下の項目についてどのくらい満足していますか。もっとも近いものを1つずつ選んでください。

1行につき1つだけマークしてください。

	満足している	やや満足している	どちらともいえない	やや満足していない	満足していない
学業	<input type="radio"/>				
趣味への取り組み	<input type="radio"/>				
人間関係	<input type="radio"/>				
将来設計	<input type="radio"/>				

37. あなたがLINEでプライベートな話をする親族以外の人は1週間あたりどのくらいですか。

1つだけマークしてください。

- 0人
 1～5人
 6～10人
 11～15人
 16人以上

38. あなたには大きな悩みや不安を相談できる人が、親族を除いて何人いますか。

1つだけマークしてください。

- 0人
 1人
 2人
 3人
 4人
 5人以上

39. 人間関係（親族との関係を除く）が円滑にいかない場合、自分の努力で改善できると思いますか。

1つだけマークしてください。

- そう思う
 どちらかといえばそう思う
 どちらともいえない
 どちらかといえばそう思わない
 そう思わない

40. あなたには現在交際している人がいますか。

1つだけマークしてください。

- はい
 いいえ

41. 春休みの平均的な1週間のうち、友人や恋人と外出するおおよその合計時間を教えてください。

1つだけマークしてください。

- 0～4時間未満
 4～10時間未満
 11～20時間未満
 21～30時間未満
 31時間以上

42. あなたは結婚（事実婚も含む）したいですか、したくないですか。

1 つだけマークしてください。

- したい
- どちらかといえばしたい
- どちらともいえない
- どちらかといえばしたくない
- したくない
- すでに結婚している 質問 45 にスキップします

43. あなたは将来結婚（事実婚も含む）すると思いますか。

1 つだけマークしてください。

- そう思う
- どちらかといえばそう思う
- どちらともいえない
- どちらかといえばそう思わない
- そう思わない

44. もしあなたが結婚（事実婚も含む）するとしたら、以下の要素について不安に思いますか。

1 行につき 1 つだけマークしてください。

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
あなたの経済力	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
パートナーとのコミュニケーション	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

45. 次の図が示すように、親の学歴や住む地域によって、人々が大学に進学するかどうかには差があることを示す研究があります。以下のような意見について、自分自身にもっとも近いと思うものを1つずつ選んでください。

出典：松岡（2019）『教育格差』の33～44ページによる。20代男性の割合を示す。

図1：父親学歴別・大卒割合

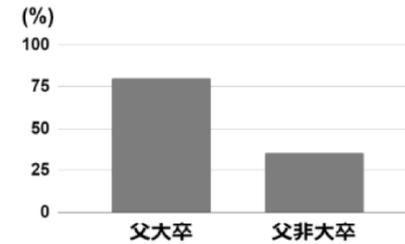
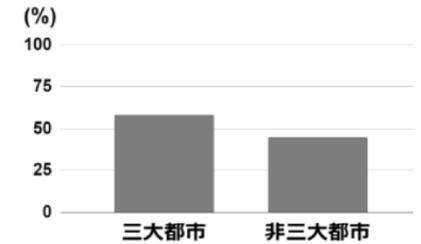


図2：出身地域別・大卒割合



1 行につき 1 つだけマークしてください。

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
個人の学歴は、家庭の豊かさや社会的地位で決まっている	<input type="radio"/>				
個人の社会的地位は、家庭の豊かさや社会的地位で決まっている	<input type="radio"/>				

46. あなたの出身高校の偏差値は次のうちどれにあてはまりますか。

1 つだけマークしてください。

- 50未満
- 50以上55未満
- 55以上60未満
- 60以上65未満
- 65以上70未満
- 70以上
- その他: _____

47. あなたの出身中学校は次のうちのいずれでしたか。

1 つだけマークしてください。

- 公立（公立小中一貫校・中高一貫校も含める）
- 私立
- 国立
- その他: _____

48. あなたの出身高校は次のうちのいずれでしたか。

1 つだけマークしてください。

- 公立（中高一貫校も含める）
- 私立
- 国立
- その他: _____

49. あなたのお父さんが最後に行かれた学校は次のうちどれにあてはまりますか。

1 つだけマークしてください。

- 高校以下
- 短大・高専・専門学校
- 難関大学（旧帝大、一橋大、東工大、神戸大、慶応大・早稲田大）
- 国立大学・難関私立大学（上記以外の国立大学・GMARCH・関関同立など）
- 上記以外の大学
- 父はいない
- わからない

50. あなたのお母さんが最後に行かれた学校は次のうちどれにあてはまりますか。

1 つだけマークしてください。

- 高校以下
- 短大・高専・専門学校
- 難関大学（旧帝大、一橋大、東工大、神戸大、慶応大、早稲田大）
- 国立大学・難関私立大学（上記以外の国立大学、GMARCH、関関同立）
- 上記以外の大学
- 母はいない
- わからない

51. あなたが大学に入学する直前に住んでいた地域は次のうちどれにあてはまりますか。

1 つだけマークしてください。

- 政令市
- 20万人以上の市部
- 10万人以上の市部
- 10万人未満の市部
- 郡部（町村など）
- 日本以外

52. あなたのご家庭の最近1年間の所得はおよそいくらですか。あなたの奨学金・アルバイトによる所得は除いてお答えください。

あなたが独立の家庭を形成している場合は、ご実家の所得をお答えください。

1 つだけマークしてください。

- 300万円未満
- 300～500万円未満
- 500～700万円未満
- 700～1000万円未満
- 1000～1500万円未満
- 1500万円以上
- わからない

53. あなたの現在の居住形態は以下のどれにあたりますか。

1 つだけマークしてください。

- 実家
- 実家以外のアパートやマンションなど（ひとり暮らし）
- 実家以外のアパートやマンションなど（複数人で生活）
- 寮（ユニバーシティハウスを含む）
- その他: _____

54. 以下の項目について、自分自身にどの程度あてはまりますか。もっとも近いものを1つずつ選んでください。

1 行につき1 つだけマークしてください。

	あてはまる	少しあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
外にいるより家の中 にいる方が気が楽だ	<input type="radio"/>				
家や自室に閉じこも って外に出ない 人たちの気持ちがわ かる	<input type="radio"/>				
自分は社交的な人 間だと思う	<input type="radio"/>				
自分はダメな人間だ と思うことがある	<input type="radio"/>				

55. 以下の項目について、自分自身にどの程度あてはまりますか。もっとも近いものを1つずつ選んでください。

1 行につき1 つだけマークしてください。

	そう思う	どちらかといえばそう 思う	どちらかといえばそう思 わない	そう思わ ない
自分はコミュニケーショ ン能力が高い方だ	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
自分の容姿に自信が ある方だ	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
自分の容姿に関心が ある方だ	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
自分は周囲の人に好 かれやすい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

このコンテンツは Google が作成または承認したものではありません。

Google フォーム

基礎集計表 (N=157)

数値は各カテゴリーの占める割合 (%) を示す

q01	性別	男性	64.33
		女性	31.85
		その他	0.19
		無回答	0.19
		<hr/>	
q02	年齢	18歳	17.83
		19歳	14.01
		20歳	38.85
		21歳	18.47
		22歳	5.73
		23歳	2.55
		24歳	0.64
		25歳以上	1.91
		無回答	0.00
<hr/>			
q03	学年	1年生	28.66
		2年生	6.37
		3年生	57.32
		4年生	1.27
		大学院生	5.10
		研究生	0.64
		無回答	0.64
		<hr/>	
q04	学部	文学部	19.11
		経済学部	20.38
		理学部	50.32
		農学部	10.09
		その他	0.00
<hr/>			
q05	今semesterのオンライン主体の授業の割合	2割未満	54.14
		2割以上4割未満	17.20
		4割以上6割未満	13.38
		6割以上8割未満	5.10
		8割以上	10.19
		無回答	0.00
<hr/>			
q06	現在の授業への満足度	満足している	30.57
		やや満足している	57.96
		どちらともいえない	6.37
		あまり満足していない	2.55
		満足していない	2.55
		無回答	0.00
<hr/>			
q07	今semesterの1週間あたりの授業外学習時間	1時間未満	1.91
		1～3時間未満	5.73
		3～5時間未満	15.29
		5～7時間未満	15.92
		7～9時間未満	13.38
		9～11時間未満	10.83
		11～13時間未満	9.55
		13時間以上	27.39

	無回答	0.00
q08_1	授業には意欲的に参加している	
	そう思う	41.40
	どちらかと言えばそう思う	38.85
	どちらともいえない	11.46
	どちらかと言えばそう思わない	6.37
	そう思わない	1.91
	無回答	0.00
q08_2	単位さえ取ればよいと考えて授業に参加している	
	そう思う	10.09
	どちらかと言えばそう思う	29.30
	どちらともいえない	21.66
	どちらかと言えばそう思わない	26.75
	そう思わない	10.83
	無回答	1.27
q08_3	自分は学習意欲が高い方だと思う	
	そう思う	14.01
	どちらかと言えばそう思う	36.31
	どちらともいえない	30.57
	どちらかと言えばそう思わない	13.38
	そう思わない	4.46
	無回答	1.27
q09	今semesterの1週間あたりの登校頻度	
	0日	1.91
	1~2日	8.92
	3~4日	30.57
	5~6日	53.50
	7日	5.10
	無回答	0.00
q10	高校生までに保護者と、保護者の仕事について話したことはあるか	
	よくあった	30.57
	たまにあった	40.76
	あまりなかった	24.20
	まったくなかった	3.18
	覚えていない	0.64
	無回答	0.64
q11	高校生までに、社会問題に関する学外団体の活動に自発的に参加した経験はあるか	
	あった	12.10
	なかった	87.26
	その他	0.64
	無回答	0.00
q12	学部を修了した後の進路についての考え	
	就職を考えており、興味のある職業が具体的にあり	16.56
	就職を考えているが、興味のある職業が具体的に決まっていない	15.92
	内定を得ているなどすでに進路が決まっている	0.00
	大学院への進学(すでに大学院へ進学している場合を含む)	58.60
	わからない	7.01
	その他	1.91
	無回答	0.00
q13	就職活動をいつ始める予定か	
	2年後期より前	3.18
	2年後期	7.64
	3年前期	15.92
	3年後期	2.55
	4年前期	0.00

	4年後期	0.00
	その他	1.27
	非該当	65.61
	無回答	3.82
q14	就職活動の現在の状況	
	最終面接に進んでいる企業がある	0.00
	ES(エントリーシート)を出したことがある	1.91
	ESを出したことはない	29.94
	非該当	65.61
	無回答	2.55
q15	就活用のアプリ・ウェブサイトの1週間あたりの利用頻度	
	使用していない	26.11
	1~2日	5.10
	3~4日	0.00
	5~6日	0.00
	7日	0.64
	非該当	65.61
	無回答	2.55
q16	部活動・サークルに所属しているか	
	部活に所属している	24.84
	サークルに所属している	38.85
	部活・サークルの両方に所属している	7.64
	どちらにも所属していない	28.66
	無回答	0.00
q17	部活動・サークルに1週間あたり費やしている時間	
	0~5時間未満	38.85
	5~10時間未満	15.29
	10~15時間未満	7.64
	15~20時間未満	3.18
	20~25時間未満	5.10
	25~30時間未満	0.00
	30時間以上	0.64
	その他	0.00
	非該当	28.66
	無回答	0.64
q18	部活動・サークルに時間的に追われていると思うことがある	
	あてはまる	7.64
	少しあてはまる	15.29
	どちらともいえない	5.73
	あまりあてはまらない	10.19
	あてはまらない	31.85
	非該当	28.66
	無回答	0.64
q19	義務感によって部活動・サークルをしていると思うことがある	
	あてはまる	3.82
	少しあてはまる	11.46
	どちらともいえない	7.64
	あまりあてはまらない	13.38
	あてはまらない	34.39
	非該当	28.66
	無回答	0.64
q20	部活動・サークルにおいて自由に活動時間を決めることができる	
	はい	52.87
	いいえ	17.20
	その他	0.64

	非該当	28.66
	無回答	0.64
q21	部活動・サークルにおいてリーダーになったことがある	
	立候補してなったことがある	7.01
	立候補以外でなったことがある	14.01
	リーダーになったことはない	49.04
	その他	0.64
	非該当	28.66
	無回答	0.64
q22	アルバイトに1週間あたり費やしている時間	
	アルバイトをしていない	48.41
	0~5時間未満	13.38
	5~10時間未満	18.47
	10~15時間未満	15.29
	15~20時間未満	4.46
	20時間以上	0.00
	無回答	0.00
q23	アルバイトにおいて自由に労働時間を決められる	
	はい	36.31
	いいえ	14.65
	その他	0.64
	非該当	48.41
	無回答	0.00
q24	アルバイトに時間的に追われていると思うことがある	
	あてはまる	5.73
	少しあてはまる	19.11
	どちらともいえない	5.10
	あまりあてはまらない	12.10
	あてはまらない	9.55
	非該当	48.41
	無回答	0.00
q25	義務感によってアルバイトをしていると思うことがある	
	あてはまる	10.19
	少しあてはまる	19.11
	どちらともいえない	6.37
	あまりあてはまらない	10.83
	あてはまらない	5.10
	非該当	48.41
	無回答	0.00
q26	アルバイトにおいてリーダーになったことがある	
	立候補してなったことがある	1.27
	立候補以外でなったことがある	4.46
	リーダーになったことはない	44.59
	その他	1.27
	非該当	48.41
	無回答	0.00
q27_1	もっとも積極的に関わっている組織・団体：将来の進路について相談できる機会がある	26.75
q27_2	もっとも積極的に関わっている組織・団体：互いに助け合う雰囲気がある	57.96
q27_3	もっとも積極的に関わっている組織・団体：ひとりひとりが独立して行う活動が多い	28.03
q27_4	もっとも積極的に関わっている組織・団体：男女関係なく活躍できる場である	58.60
q27_5	もっとも積極的に関わっている組織・団体：先輩が後輩を指導する雰囲気がある	35.03
q27_6	もっとも積極的に関わっている組織・団体：あてはまるものはない	16.56
	無回答	2.55
q28_1	もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバー：出身地にばらつきがある	75.16

	もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバー：公立高校・私立高校出身者がどちらも多い	54.14
	もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバー：所属（出身）学部にはばらつきがある	66.88
	もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバー：学生だけでなく社会人もいる	21.66
	もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバー：留学生がいる	28.03
	もっとも積極的に関わっている組織・団体のメンバー：あてはまるものはない	11.46
	無回答	2.55
q29	もっとも積極的に関わっている組織・団体には、OB・OGとの交流がある	
	あてはまる	21.66
	少しあてはまる	22.93
	どちらともいえない	12.74
	あまりあてはまらない	8.92
	あてはまらない	31.21
	無回答	2.55
q30	美容院・理容室の利用頻度	
	3週間未満	0.64
	3~5週間未満	15.29
	5~8週間未満	21.66
	5~12週間未満	31.21
	12週間~半年未満	23.57
	半年以上、また行かない	7.64
	無回答	0.00
q31_1	授業だけがある場合、身支度にかかる時間	
	5分未満	31.85
	5~15分未満	33.76
	15~30分未満	21.66
	30~60分未満	11.46
	60~90分未満	1.27
	90分以上	0.00
	無回答	0.00
q31_2	大人数での食事会に行く場合、身支度にかかる時間	
	5分未満	21.02
	5~15分未満	24.84
	15~30分未満	28.03
	30~60分未満	21.02
	60~90分未満	3.18
	90分以上	1.27
	無回答	0.64
q32_1	マスクの見た目でごだわる点：色	46.50
q32_2	マスクの見た目でごだわる点：形	40.76
q32_3	マスクの見た目でごだわる点：素材	52.23
q32_4	マスクの見た目でごだわる点：大きさ	59.24
q32_5	マスクの見た目でごだわる点：あてはまるものはない	14.65
q32_6	マスクの見た目でごだわる点：その他	1.91
	無回答	1.27
q33	半年間で平均して購入する服の数	
	0着	7.01
	1~2着	32.48
	3~4着	31.85
	5~7着	21.02
	8着以上	7.64
	無回答	0.00
q34	半年間で平均して購入するコスメの数	
	0点	43.95

	1~3点	35.67
	4~6点	15.29
	7~10点	3.82
	11点以上	0.64
	無回答	0.64
q35_1	過去1ヶ月間にスキンケアとして使ったもの：導入液	7.64
q35_2	過去1ヶ月間にスキンケアとして使ったもの：化粧水	60.51
q35_3	過去1ヶ月間にスキンケアとして使ったもの：パック	18.47
q35_4	過去1ヶ月間にスキンケアとして使ったもの：乳液・クリーム	55.41
q35_5	過去1ヶ月間にスキンケアとして使ったもの：オールインワン	12.10
q35_6	過去1ヶ月間にスキンケアとして使ったもの：あてはまるものはない	24.84
	無回答	0.64
q36_1	学業の満足度	
	満足している	24.84
	やや満足している	45.22
	どちらともいえない	13.38
	やや満足していない	11.46
	満足していない	5.10
	無回答	0.00
q36_2	趣味への取り組み	
	満足している	29.94
	やや満足している	31.85
	どちらともいえない	20.38
	やや満足していない	12.10
	満足していない	5.10
	無回答	0.64
q36_3	人間関係	
	満足している	22.29
	やや満足している	29.94
	どちらともいえない	30.57
	やや満足していない	12.10
	満足していない	5.10
	無回答	0.00
q36_4	将来設計	
	満足している	4.46
	やや満足している	28.03
	どちらともいえない	36.94
	やや満足していない	19.75
	満足していない	10.83
	無回答	0.00
q37	LINEでプライベートな話をする親族以外の人数	
	0人	22.29
	1~5人	64.33
	6~10人	10.19
	11~15人	1.91
	16人以上	1.27
	無回答	0.00
q38	大きな悩みや不安を相談できる親族以外の人数	
	0人	24.20
	1人	14.65
	2人	25.48
	3人	16.56
	4人	3.82
	5人以上	15.29

	無回答	0.00
q39	人間関係が円滑にいかない場合、自分の努力で改善できると思うか	
	そう思う	14.65
	どちらかといえばそう思う	36.94
	どちらともいえない	28.03
	どちらかといえばそう思わない	14.01
	そう思わない	6.37
	無回答	0.00
q40	現在交際している人がいるか	
	はい	21.66
	いいえ	78.34
	無回答	0.00
q41	春休みの平均的な1週間に、友人や恋人と外出する合計時間	
	0~4時間未満	46.50
	4~10時間未満	31.21
	11~20時間未満	16.56
	21~30時間未満	3.18
	31時間以上	2.55
	無回答	0.00
q42	結婚（事実婚も含む）したいか	
	したい	43.31
	どちらかといえばしたい	24.84
	どちらともいえない	17.20
	どちらかといえばしたくない	3.18
	したくない	11.46
	すでに結婚している	0.00
	無回答	0.00
q43	将来、結婚（事実婚も含む）すると思う	
	そう思う	26.11
	どちらかといえばそう思う	24.84
	どちらともいえない	24.84
	どちらかといえばそう思わない	14.65
	そう思わない	9.55
	非該当	0.00
	無回答	0.00
q44_1	結婚（事実婚も含む）するとしたら、不安に思う要素：自分の経済力	
	そう思う	26.11
	どちらかといえばそう思う	36.31
	どちらかといえばそう思わない	25.48
	そう思わない	12.10
	非該当	0.00
	無回答	0.00
q44_2	結婚（事実婚も含む）するとしたら、不安に思う要素：パートナーとのコミュニケーション	
	そう思う	34.39
	どちらかといえばそう思う	30.57
	どちらかといえばそう思わない	23.57
	そう思わない	11.46
	非該当	0.00
	無回答	0.00
q45_1	個人の学歴は家庭の豊かさや社会的地位で決まっている	
	そう思う	21.02
	ややそう思う	54.78
	どちらともいえない	10.19
	あまりそう思わない	11.46
	そう思わない	2.55

	無回答	0.00
q45_2	個人の社会的地位は家庭の豊かさや社会的地位で決まっている	
	そう思う	16.56
	ややそう思う	45.86
	どちらともいえない	16.56
	あまりそう思わない	16.56
	そう思わない	4.46
	無回答	0.00
q45_s	親の学歴や住む地域による大学進学率の差についての情報提示	
	提示している	40.76
	提示していない	59.24
q46	出身高校の偏差値	
	50未満	0.64
	50以上55未満	3.18
	55以上60未満	10.83
	60以上65未満	22.29
	65以上70未満	28.66
	70以上	29.94
	その他	2.55
	無回答	1.91
q47	出身中学校	
	公立(公立小中高一貫校・中高一貫校も含める)	82.80
	私立	11.46
	国立	5.10
	その他	0.00
	無回答	0.64
q48	出身高校	
	公立(中高一貫校も含める)	78.98
	私立	18.47
	国立	1.27
	その他	0.64
	無回答	0.64
q49	父親の学歴	
	高校以下	24.20
	短大・高専・専門学校	8.92
	難関大学(旧帝大・一橋大・東工大・神戸大・慶應大・早稲田大)	15.29
	国立大学・難関私立大学(上記以外の国立大学・GMARCH・関関同立など)	26.75
	上記以外の大学	20.38
	父はいない	2.55
	わからない	1.27
	無回答	0.64
q50	母親の学歴	
	高校以下	15.29
	短大・高専・専門学校	35.03
	難関大学(旧帝大・一橋大・東工大・神戸大・慶應大・早稲田大)	7.64
	国立大学・難関私立大学(上記以外の国立大学・GMARCH・関関同立など)	19.11
	上記以外の大学	19.75
	母はいない	0.64
	わからない	1.91
	無回答	0.64
q51	大学に入学する直前に住んでいた地域	
	政令市	24.84
	20万人以上の市部	30.57
	10万人以上の市部	16.56
	10万人未満の市部	22.29

	郡部(町村など)	1.91
	日本以外	3.82
	無回答	0.00
q52	最近1年間の世帯年収	
	300万円未満	7.64
	300~500万円未満	10.83
	500~700万円未満	14.01
	700~1000万円未満	17.20
	1000~1500万円未満	10.83
	1500万円以上	3.82
	わからない	33.76
	無回答	1.91
q53	現在の居住形態	
	実家	15.92
	実家以外のアパートやマンションなど(一人暮らし)	75.80
	実家以外のアパートやマンションなど(複数人で生活)	3.82
	寮(ユニバーシティハウスを含む)	4.46
	その他	0.00
	無回答	0.00
q54_1	外にいるより家の中にいる方が楽だ	
	あてはまる	47.77
	少しあてはまる	28.03
	どちらともいえない	10.83
	あまりあてはまらない	8.28
	あてはまらない	5.10
	無回答	0.00
q54_2	家や自室に閉じこもっていて外に出ない人たちの気持ちがわかる	
	あてはまる	38.22
	少しあてはまる	36.31
	どちらともいえない	9.55
	あまりあてはまらない	8.92
	あてはまらない	7.01
	無回答	0.00
q54_3	自分は社会的な人間だと思う	
	あてはまる	9.55
	少しあてはまる	24.84
	どちらともいえない	21.66
	あまりあてはまらない	27.39
	あてはまらない	16.56
	無回答	0.00
q54_4	自分はダメな人間だと思ふことがある	
	あてはまる	34.39
	少しあてはまる	35.03
	どちらともいえない	14.65
	あまりあてはまらない	10.19
	あてはまらない	5.73
	無回答	0.00
q55_1	自分はコミュニケーション能力が高い方だ	
	そう思う	14.01
	どちらかといえばそう思う	29.94
	どちらかといえばそう思わない	29.94
	そう思わない	26.11
	無回答	0.00
q55_2	自分の容姿に自信がある方だ	
	そう思う	6.37

	どちらかと言えばそう思う	18.47
	どちらかと言えばそう思わない	45.86
	そう思わない	28.66
	無回答	0.64
q55_3	自分の容姿に関心がある方だ	
	そう思う	14.01
	どちらかと言えばそう思う	47.13
	どちらかと言えばそう思わない	23.57
	そう思わない	14.65
	無回答	0.64
q55_4	自分は周囲の人たちに好かれやすい	
	そう思う	6.37
	どちらかと言えばそう思う	42.68
	どちらかと言えばそう思わない	33.12
	そう思わない	17.20
	無回答	0.64